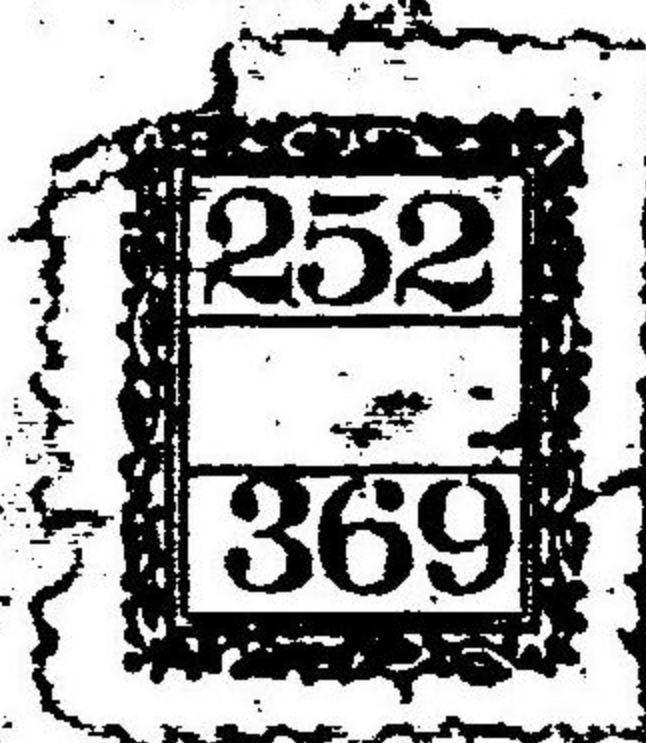


曹洞宗要法話



019698-000-7

特18-116

曹洞宗要法話

新井 石禪/述

M39.6

ABG-0495





予昨臘病を遠州濱名湖畔に養ふこと數旬、稍や愈ゆるに及んで錫を名古屋に移し、芳精舎に駐すること數日、其間信徒の需めに應じて聊か修證義の法話を試む、其明く所元より百千萬分の一をばも盡す能はずと雖も、有志の懇望に依り録して以て書冊と爲し題して曹洞宗要法話と曰ふ、是れ唯だ信徒の備忘に資するが爲めにして、敢て大方の識者に示さんとはあらず、抑も曹洞の宗義は八萬法蔵の關鑰を把定し三學六度の樞軸を全提し、所謂實際理地に一座を立せず佛事門中一法を捨てざる法門なるが故に、自力他力聖道淨土等の名相を以て律すべからず、而して之を開示するには自づから禪と戒との二門あり、禪は以て心地を開明し戒は以て性徳を發揮す、此二つのもの相表裏して遂に一玄に歸す、明治二十三年我が兩本山は修證義を編製して、在家化導の

治禪
12
内交

禪と戒との二門あり、禪は以て心地を開明し戒は以て性徳を發揮す、此二つのもの相表裏して遂に一玄に歸す、明治二十三年我が兩本山は修證義を編製して、在家化導の

標準を定め佛戒相續を以て安心の原則と示し玉へり、然れども此佛戒なるものは畢竟禪海の波瀾にして宗乗の妙機亦た此中に在り、此戒に依りて諸佛菩薩の大道を通達し此戒に依りて利生報恩の行持を圓成することを得べし、今や思想界の潮流を察するに、或は極端なる厭世に傾き或は陋劣なる利名に奔り、中庸を失する者實に少なからず、之を救済し之を誘掖するは國家焦眉の急務なりと謂ふべし、此書を録するの微意、亦た唯だ教義の一斑を宣傳し兼ねて時弊矯正の一助たらんことを期するに在るのみ、大方の君子其文を見て其義を棄つること無くんば幸甚

明治三十九年六月吉祥日

雲洞現住 新井石禪識

目 次

一	曹洞宗旨の大意 (三席)	一
二	本 證 妙 修 (二席)	四三
三	懺 悔 滅 罪 (二席)	七二
四	受 戒 入 位 (三席)	九八
五	發 願 利 生 (二席)	一四八
六	行 持 報 恩 (二席)	一八〇

持18
106

祖

訓

高祖大師曰く、佛となるにいとやすきみちあり、もろもろの悪をつくらず、生死に著するこゝろなく、一切衆生のために、あはれみふかくして、かみをうやまひ、しもをあはれみ、よろづをいとふこゝろなく、ねがふこゝろなく、心にもよことなくうれふることなき、これを佛となづく、またほかにたづぬることなかれ、太祖國師曰く、道ふことを見ずや、常在靈鷲山、及餘諸住處、大火所燒時、我此土安穩、天人常充滿と、唯靈山會上のみ所住處といふに非ず、豈梵漢本朝も亦た洩ることあらん、如來の正法流轉して一毫髪も欠ることなし、若し然れば此會は是れ靈山會たるべし、靈山は是れ此會たるべし、唯諸人の精進と不精進とに依て、諸佛頭出頭没せるのみなり。

曹洞宗要法話

新井石禪口演

一 曹洞宗旨の大意

第一席

曹洞宗とは如何なる宗旨であるかと云ふことを簡單に御話に及びませう、我が大聖釋尊は今を距ること二千九百三十三年の四月八日に中天竺即ち今の印度の中の西北に當る迦毘羅幡卒國の國王、淨飯大王の御子と御生れ遊ばされ。悉達太子と申されましが、深く人生の無常にして苦痛の甚しき状態を觀ぜられ此苦痛の根源を究めて一切衆生を濟度せんとの大誓願を起し玉ひ、十九の御年の十二月八日の夜窈に王城を逃れ出て愛馬健陟に跨がり御車なる車匿一人を召連れ、南の方二百哩計隔つて居る摩竭陀國王舍城の近邊の檀特山と云ふ山中に分け上りて、御修行なされ、其上處々方々遍歴

せられまして最後に當時波羅門教の高僧と呼ばれし阿羅邏仙人迦爾仙人を訪ふて、種種の御議論もあつたが到底御満足遊ばすことが出来ず、依て断然六年間の苦行遍參を止めて只獨り摩竭陀國の伽耶城と申す町の近處なる伽耶山と稱する山中に入り六年間の御修行をなされた御年三十歳の十二月八日の曉夜明の明星の東の山の端を出づるの時忽然としてお悟を御開き遊ばされたじや、それより八十歳の二月十五日夜半拘尸那城の附近娑羅雙樹の間に於て御涅槃に御入り遊ばすまで、前後五十年間の御說法之を佛敎と申すのである、其五十年間の御敎化中には大乘と云ふて氣高い敎もあれば小乗と云ふて卑近なる敎もあり、大乘の中にも華嚴經あり法華經あり般若經あり大日經あり又た無量壽經もあり阿彌陀經もあり機に臨み時に隨つて千變萬化の御化導であります、故に何れが果して釋尊の御本懷であるやら表面から見た處では幾んど其撰び方に苦心程です。是を以て三國の高僧方は御自分の信仰と其時代の狀態とに依て、或は法華經を以て釋尊出世の本懷と定め或は無量壽經を以て如來化導の最上乘なりと論じ、其人々に依て所見を異にし遂に宗派と云ふものが出来るに至つたてす、我が日本國は

今より一千三百五十四年以前人皇二十九代欽明天皇の十三年に百濟國より佛敎が傳はつて來て今日では十三宗五十三派と云ふ澤山な宗派が分れて居りますすが盡く皆な大乘佛敎です、大乘佛敎と云ふ上からは皆な同一じやが其内容に至つては、法華經に依て宗旨を開いた天台宗や日蓮宗があり大無量壽經觀無量壽經阿彌陀經の三部の經典を所依として開宗した淨土門もあり、淨土門の中でも淨土宗は觀無量壽經を中心として宗旨を立られ眞宗は大無量壽經を中心とし時宗は阿彌陀經を中心として居る杯、實に蘭菊芳を競ひ日月光を争ふと云ふ光景である。併し其源は釋尊御一人の御說法であるから所謂「分け上る麓の路は多けれど同じ高根の月をこそ見る」て歸着する所は必らず一致して居るに相違ない、だが聖道門とか淨土門とか自力とか他力とか易行道とか難行道とか顯敎とか密敎とか云ふ名相の爲めに、種々の衝突を來たして甚しきは互に相排擠して時としては随分亂暴なる誹謗罵詈の聲をも聞く様に至つたじや、實に歎かほしき限りじやが是れも止むを得ざる自然の勢とても申す外はなからう、然るに我が曹洞宗は世に所謂禪宗の一じやが此禪宗なる者は外々の宗派の様には別段所依の經論と云

ふものがあるても無く、古來よりして直指人心見性成佛不立文字教外別傳と申してある、一寸外面から眺めると何にが何やら一向に摸索すべからざる宗旨の様に思はれる。夫れが爲めに世間の學者ばかりか佛教中の方々でも揣摩臆測を以て禪宗を批判する所から随分滑稽じみた程誤解して居る人も見へるが、是れも強ちに無理からぬことであらうと思ふ、然らば禪宗なる者はドーユー處から生れてドーユー風に發達して今日に至つたかと云ふ事を一通り御話しせねばならぬ。

一體佛教は何を教へるのであるかと申すに云ふ迄も無く釋尊のお悟りになつた眞理を教へるのである、釋尊は此眞理をお悟り遊ばされて以て宇宙の本源を盡し萬物の生起する所以を究め生死苦樂の本末を明らめ自己の大安心を決定せられたじや、更に進んで一切衆生を教化して迷を轉じて悟を開き苦を離れて樂を得惡を斷じて善を行はしめて以て人生の第一義を完全に成就せしめ玉ふが正しく釋尊の御本懐である、然らば釋尊が悟り遊ばした眞理とは何んなものであろうかと云ふに、釋尊は見明星悟道の折大聲疾呼して其眞理の光明を全世界の人に御告げ遊ばされた御語がある、即ち「我れと大地

の有情と同時に成道す」と云ふ御語じや、是れは我が成道は決して我れ一人の成佛ては無い一切の衆生人間は申すに及ばず蠱蜂蜻蛉蟹蛙に至る迄我れと同時に成佛して、盡乾坤裏また一箇の迷ふて居る者も無く、一人の凡夫外道惡人邪見人も無い、一微塵の中にも無數の衆生が居る一滴の水の中にも無數の動物が居る斯かる微細の者迄も盡く大光明を放ち大神通を現はし大善根を成じ大功德を具へて居るぞと云ふ御語であります、なんと各々方は此御語が御解りになりましたか、各々方は自ら我れは凡夫じやイヤ惡人邪見人じやイヤ容易に佛様や神様に成れる身で無いと御思召ては釋尊の御語に背きますぞ、我れは釋尊と同時に成佛し釋尊と露程も變らぬ佛の身じや、是れから佛になるのでは無い業に既に佛に成つて居るのじやと云ふことの明らめが附かねば眞實佛教の信者とは申されませぬぞ、番に我等衆生計りては無い草でも木でも山でも河でも日月星辰宇宙法界の其儘が皆な佛でありますぞ、こゝを承陽大師は「峯の色溪の響もみなながら我が釋迦牟尼の聲と姿と」と御示し下されたじや、釋尊は猶も此の悟りの意味の解る様にと思召して華嚴經には「奇哉一切衆生は如來の智慧德相を具有

す但だ妄想執着を以て證得すること能はず」と仰せられてある、即ち一切衆生は皆な三世の諸佛と同體なる智慧も徳も盡く具へて居る。それが知れぬのは妄想執着と云ふ無明煩惱の所爲であるぞとの御示しじや、丁度法華經の中の長者獅子の譬の如く大福長者の相續人と生れた若檀那が、稚き時に迷兒と爲つて他國に漂泊し終には乞食の群に入り自ら長者の子と云ふことも知らず生涯を非人に甘んじて居つた様な者です、我等も亦た釋尊と同時に成佛した立派な境界を持ち乍ら却て我れは凡夫じや惡人じやと思ふて自ら三界六道に迷ふて居つたじや、幸に佛の教に遇ひ奉りてア、成程と氣が付ささへすれば其時が直様大長者の秘藏息子、三世諸佛の御仲間入です、圓覺經には「始めて知る衆生本來成佛生死涅槃猶ほ昨夢の如し」とある、本來成佛であるから釋尊の成道の時始めて成佛したのでは無い久遠劫來の佛様じや、釋尊もそれが知れなんだ爲め三祇百大劫の御難行もなされたが愈々悟りを開いて見れば我れと一切衆生とは共に本來の佛じやと云ふことが御發明なされたじや、併し此悟りの道は只今の哲學杯と稱する學文の様に唯だ理論的に口先計て原理の論究をするのでは役に立たぬ、此も悟り

の光りが全身に充ち渡り天地に充ち渡り手の舞足の踏む所が盡く佛の神通光明となり一言一句が盡く佛の大法輪と爲つて來ねばサツパリ佛法の難有味は無いてす、この味は自分の心で悟り自分の心で嚼分ねば知れぬ、水を飲んで冷たい暖いと知る其味は味ふて見た人で無ければ解らぬ、言にも述べられず筆にも書かれず目にも見られず手にも取られぬ、「一口に飲んだる水の味を問ふ人あらばいかに答へん」じや、母親が乳呑兒に食物を與ふるに嚼て哺めて咽元迄は手も届くがグツト一息に呑み下して胃の腑に收めア、甘ひ味じやと自得することは何んな母親の力でも行かぬ、釋尊御一代の御說法は手の届く限り嚼て哺んで下されたのじや苦集滅道四諦の法輪、十二因縁六度の行願を始めとして或は般若眞空の劍を以て着我妄執の塵を拂ひ或は諸法實相の門を開いて無相空寂の人を導びき、俗諦と呼び眞諦と呼び阿彌陀様の御手傳やら觀音様の助太刀やら夫れは「一方ならぬ御骨折じや、然ども他力と云へば他力にへばり付き自力と云へば自力に取り付き未來を説けば現在を等閑にし現在を示せば未來を忽かにすると云ふ鹽梅で幹から枝枝から葉と次第に分れてト」八萬四千の法門三千餘卷

の經文ともなつたのである、斯く道具立は出来たが多くは道具の一部分に束縛せられて其全體を總合して自ら之れが主人公と爲り自在に之を運用するてなければ決して釋尊の御本意には適はぬ、そこで釋尊は最後に至り天竺で有名なる靈鷲山に在して八萬人の大衆を召集して佛教總會とも謂つべき大會を御開きになつた、サア今日こそは何なる最上の法門を御演說遊ばすやらと云ふので満山立錫の地も無き程に所有御弟子が集つて、御說法の始まるのを今や遅しと待構へて居つた、其盛大なる有様はドンなて有りましたらう、世界第一の大聖人が空前絶後の大法輪を轉ぜらるゝのであるから我等の想像も及ばぬ程の光景であつたに違ひ無い、時至つて釋尊は三十二相八十隨好赫々たる光明を放つて說法の座に御陞りになつた、八萬の大衆は動搖めさわつたが暫時にして水を打つた様に静まり回つて各々首を延べ耳を傾けて居つた、けれども釋尊は沈黙して更に御口を御開き遊ばされぬ、良久ふして優曇鉢羅華と云へる麗しき蓮華の様な一枝の花を御手に取て八萬の大衆の前にズツと拈じ出されたなりて何にも仰しやらぬ、是れが有名なる世尊の拈華であります、サアどうです、此天真爛漫な

る美しき一枝の花自から馥郁たる香を放つて縱横無盡に其本來の徳相を現はして居る眼ある者は見よ鼻ある者は嗅げ、此花葉には大乘小乗の名相は無いぞ、此花心には自力他力の之乎者哉は無いぞ、煩惱も無ければ菩提も無い苦も無ければ樂も無い、眞如と云ふも佛性と云ふも人間の付けた假の符貼じや地獄と云ふも極樂と云ふも因縁に依つて現れた自心の影じや、これは決して三千年前の昔話とのみ思ふてはなりませぬぞ各々方も亦た能々此花を見て取る眼がなければなりませぬぞ、其時八萬の大衆はサツパリ釋尊の御心が解らぬからウツカリボンとして居られたと見へる、獨り上座の摩訶迦葉のみあつてニッコリと笑はれた、是れが所謂破顔微笑です、朋友同志が途中で遇つた時にニッコリと笑ふ其笑ふ中には無限の友情があるじや、親子同士が顔を合せた時にニッコリ笑ふ其笑ふ中に無量の愛情が籠つて居る、此ニッコリの中の味は歌にも詩にも書にも文にも描れる者では無いです、時に釋尊は「我れに正法眼藏あり摩訶迦葉に付嘱す」我が佛法は残らず迦葉尊者に任せたと仰せられた、そこで迦葉尊者は釋尊の法を相續して第一祖と御成りなされました、此以心傳心こそ正しく同時成道の發

現であつて禪宗の本源は即ち茲に在るのでございませぬ、凡そ何事に依らず其極處には必ず口にも筆にも及ばざる所のあるもので之を妙と云ふのです、書でも彫刻でも詩でも歌でも或る程度迄は指南も出来やうし教育も届ふが、ぞ妙處と云ふに至れば其人が自得するより外は無、佛のお悟り遊ばされた眞理は一切眞理の中の極處です即ち妙法である、此妙法を傳へん爲めに衆生の根機に随つて華嚴、阿含、方等、般若、法華涅槃の五時八教も遊ばされた、大乘とか小乗とか權教とか實教とかの區別はありませんして凡て妙法と云ふ眞理の源から流れ出てざるものは無い、釋尊の御心だに解れば八萬四千の法門は皆な妙法の花であります、若し佛の御心が解らなければ三千餘卷の經文も畢竟月を指すの指に過ぎぬ、文字や言語の上に妙法があるとのみ思ふは間違じや、故に釋尊は大般若經の中に、我れ得道よりこのかた一字を説かず汝も亦た聞かず」と仰せられ、又た御涅槃の砌に文殊菩薩が再び法輪を轉ぜられんことを請はれた時、釋尊は「吾れ四十九年世に住するも未だ嘗て一字を説かず汝吾れに再び法輪を轉ぜよと請ふ是れ曾て法輪を轉ぜしや」と御答遊ばされた、

是れが禪宗で云ふ不立文字の意であります、禪宗で所依の御經を定めず直ちに佛の御心を相傳するからとて決して御經文を嫌ふても捨るのでも無い、唯だ御經文の奥底に潜んで居る佛の御本懐を明らむるのであります、去れば華嚴經も好し法華經も好し般若經も好し三部經も好し手に信せ拈じ來つて盡く同時成道本來成佛の眞理を現はすのであります、故に禪宗と云ふ宗旨の根源は各宗各派を離れて外に別に在るのでは無くて、各宗各派の腦髓とも神經とも消化器とも成つて各宗各派の經律論を造次傾沛の上に活運轉させる底のもの即ち禪宗であります、して見れば三部經の中にも禪があり法華經の中にも禪がある、此禪を知らざれば三部經も法華經も眞の利益を現はすことが出来ませぬぞ、昔し東印度の或る國王が釋尊より二十七代の祖師にて達磨大師の御師匠なる般若多羅尊者を招待して御齋を遊ばされたことがある、國王の御殿に於ての大供養定めし特別の大法要があるならんと思ふて居たに、尊者は一向法要を御勤めなさる景色も見へぬそくて國王は尊者には何故御經文を御讀みなされませぬやと問はれたじや、其時尊者

は「貧道入息蘊界に居せず出息衆縁に涉らず常に是の如きの經を轉ずること百千萬億卷なり」と申された、即ち私は常に佛の妙法の中に在りて寢ても寐ても佛法を離れぬ入息も衆の因縁に束縛せられず出息も亦た煩惱の穢を受けぬ、去れば出息も入息も其儘の佛法である手の舞足の蹈む所其儘の佛教でありますとの仰せてござります、ユー鹽梅に參らねば活きた佛教とは云はれますまい、念佛宗の人でも眞實我れを捨て己れを忘れて佛の光明の外は一物をも留めず、「唱ふれば佛も我れも無かりけり南無阿彌陀佛の聲ばかりして」と云ふ様に、佛様と我れとの隔てが取れて天地同根萬物一體となる時は、是れを同時成道の端的でありますぞ、眞言宗から云ふても實際に三密相應して大日如來と自分とが互融して法界力一枚になつた時忽然として禪の光明が現はれまするじや、此光明が見へない様では眞の信心、眞の加持とは許されぬじや、この道理を能々明らかに置て置て我が曹洞宗の御法義を聽聞なされたならば、實に是れ人生最大の幸福之れに過ぐる者はあるまいと思ふ、これにて宗旨の起原丈は概略御話すが濟ましたからこれより席を改めて三國相傳の大要を演ることゝ致しませう、

第一二席

禪宗の起源は、前席に於て申し述べた通り、釋尊の成道が即ち宗乘の基礎で靈山會上に花を拈ぜられて迦葉尊者かニッコリ微笑せられた時に佛法を御付囑遊ばされたのが宗統の根源であります、釋尊御涅槃の後は迦葉尊者が法王と爲つて佛法を護持せられたる者が眞實佛のお悟りを得られた時御師匠と顔を合せて其場に於て印可證明と申して御印證を受けて、始て祖師の御位に列なるので、決して經文の上のみで研究したり又は自分の信仰や見識丈を以て宗旨を定めたのでは無く、暖かい手から暖かい手に授けられた嫡傳の法であります、それから第三祖が商那和修、第四祖が優婆塞多と次第に相續して、第十二祖が大乗中興の祖師たる阿那菩薩即ち馬鳴菩薩で、第十四祖が八宗の祖師と仰がる、龍樹菩薩です、それから二十八代目が支那禪宗の初祖と御成り遊ばされた達磨大師であります、達磨大師は南天竺の國王香至と云ふ王様の第三子で

あつて、法を二十七祖般若多羅尊者に嗣ぎ、五天竺を巡錫して外道を降伏し盛んに佛法を弘通せられました。梁の武帝の普通元年に支那に渡られ當時佛心天子と云はれた武帝に相見して宗乘を示されたが、武帝は皮相の信者であつたゆえ、それを見切つて楊子江を江り魏の嵩山の少林寺に錫を駐めて面壁九年せられた、其間に神光大師と云ふ拔群なる御弟子が出来て支那の第二祖と御成りなされた、第五祖大滿弘忍禪師に至つて其下に曹溪大師と神秀大師との二高僧があらはれましたが、神秀大師の宗風は漸修と申して幾多の修行を重ね漸々に悟りの道に進むと云ふ方であつたから達磨大師の正統とは許さなんだ、曹溪大師は非常なる大善知識であつて、其門下には夥多の高僧が出来たなれども青原禪師と南嶽禪師との御兩人を曹溪の二神足と稱して尤も卓絶であつた、此の青原禪師より五代目に洞山大師と云ふ古今獨歩の高僧が現はれて大に宗風を擧揚し、支那四百餘州は申すに及ばず朝鮮國に迄弘通せられた、そこで天下の人が其宗風を欽慕する所から遂に曹溪大師の曹の字と洞山大師の洞の字とを取つて曹洞宗と云ふ宗名を付けたのであります、又南嶽禪師より五代目には臨濟大師と云ふ秀

拔明匠がありまして洞山大師と相對して實に禪天の日月であつた、其宗統が即ち臨濟宗である、其外に青原禪師の系統から雲門宗法眼宗の二宗を生じ、南嶽禪師の系統から別に僞仰宗と黃龍派楊岐派の二派が分れた、之を總括して五家七宗と云ふたてず併し決して宗義に異なりがあつたては無く唯だ法孫が繁殖したのと、幾分か宗旨を唱ふる上の機鋒と儀式の上に特得の點があつた處から、宗派と云ふ様な名前が付たのであります、

洞山大師より十三代目が天童山の如淨禪師である、禪師は越上の御生れて十九歳の時に禪門に投ぜられ臂肉の穿れる迄坐禪なされたとある、天童山に住せられても上堂入室に唯だ黒色の袈裟縵子を着せられ、嘉定年間に時の皇帝より紫衣禪師號を賜はりしも上表して御辭退遊ばされし程の高潔なる御方であつた、去れば太祖國師は禪師を贊歎して「道德當世に並びなく操行古今に不群なり」と云はれてあります、

我が日本の宗祖たる高祖承陽大師は、貞應二年支那の嘉定十六年御年二十四の御時入宋せられて諸方の知識を誦び玉ひ、最後に此の如淨禪師の室に入り曹洞の宗脈を御

相傳在宋五年にして二十八歳の時御歸朝遊ばされまして、最初に宇治の興聖寺を御建立、後に今の大本山永平寺を越前志比の庄に御開創に相成り、前後二十七年間の御化導これぞ我が日本國に始めて曹洞の宗風が傳はり、靈山少林直指の正法、宇内無比の宗教が璨爛たる光りを放つた根源であります、大師は法を孤雲懷辨禪師に御相續遊ばされ建長五年八月二十八日太陽曆では九月二十九日御年五十四歳を以て御涅槃に御入りなされました、懷辨禪師は法を加州金澤大乘寺の開山に御成りなされた徹通義介禪師に御傳ひ遊ばされ、義介禪師は今の大本山總持寺御開山太祖弘徳圓明國師に御傳授なされました、これより曹洞の宗風は旭日東天の勢を以て日本全國の津々浦々に迄も輝やき渡り遂に今日の如く一萬四千の寺院七百餘萬の檀徒信徒を有するに至つたのでございます、只今でも宗統相續の儀式は密室風を通ぜすと云ふて師匠と弟子とが顔と顔とを合せた處に於て密傳密付して、更に他人の取次と云ふ様なことを許さぬが宗規上の嚴則と成つて居ります、釋尊より今日迄の世代の數は拙稿が丁度八十代に當りますから、一般の方々も大概は八十世前後であらうと思ひます、

斯様に八十代も世代が重なり殊に釋尊の御涅槃よりは二千八百餘年の星霜を経、印度支那日本の三國に流傳して居ります、嗣法相續の一事に至りましては、昔日釋尊が靈山會上に於て一枝の花を拈ぜられ迦乘尊者がニッコリと破顔微笑せられた時、釋尊の御心と迦乘尊者の御心とがキツチリと證契即通して恰も割符を合せた様に感應道交せられたので、「我れに正法眼藏あり摩訶迦乘に付屬す」と仰せられて、佛法相續の御披露を遊ばされました、其の時の以心傳心の儀式がソックリ今日に迄行はれて居るので、此點に於ては釋尊の時も今日も少しも變りはない、これが我が宗門の最も貴とい處であります、御開山承陽大師が天童如淨禪師より佛法御相續の時御嗣書と云ふものを御傳ひなされた、是れは傳法の御系譜に如淨禪師の御證明を付せられたもので宗門第一の寶物であります、拙稿等も矢張師匠よりして法を傳ひまする時には必ず此御嗣書を授かるので之を嗣法相續と申しまするじや、此外に釋尊より嫡々相傳の御戒法を相續致しまして其の戒法相續の系譜書を戴くのが乃ち御血脉て之を傳戒相承と申しまするじや、故に我が宗門には自から嗣法相續と傳戒相承との二た通りがあるのです

さいます、尤も御嗣書と御血脈との外に大事と申すものがあつて之を合せて三脈と稱
しまするが、此大事なるものは御嗣書に附屬したものであるからツマリは嗣法と傳戒
との二様に過ぎませぬ、嗣法相續のことは前々より申した如く釋迦如來の心法を相傳
することでありませぬ、心法と云ふは釋迦如來が六年苦行の後菩提樹下に在りて、見明
星の曉忽然として無上正覺の悟りを御開きなされ、「我れと大地の有情と同時に成道
す」と獅子吼遊ばされました、其の釋尊の御悟りを明らかに明らめて佛の心を相傳するのが嗣
法相續です、此御悟りを明らむるには學文の力や思慮分別の上では逆も得ることが出
來ぬ、一切の知解分別所謂惜い欲い憎い愛いと云ふ様な有造無造を打ち捨て、無心
無心大無心の境界と爲り、善惡を思はず是非を測らず我がと云ふ我見の根本を抜き
去り妄念の波を打ち静め、千代能が戴く桶の底ぬけて水たまらずば月もやどらじ「水
も無く月も無く吾も無く佛も無く苦しみも無く樂みも無く迷も無く悟も無き大虚空裏
に安住するの時、忽然として同時成道の御悟りが現はれまするじや、サア一度此御悟
りが現はれますれば、盡世界盡く覺皇妙莊嚴の御淨土となり、山川草木も等しく三

十二相八十種好の佛の御姿と爲り、我等が手の舞足の踏む所ソツクリ其儘が大光明
を放ち大神通を現じ大功德を成じ大法輪を轉ずる様になるじや、コーニエ風に參らん
ては佛法も死物となつて格別の價値も無いものになりますぞ、併し此境界に至るには
是非坐禪より入らぬばならぬ、故に高祖大師は「諸佛如來ともに妙法を單傳して阿耨
菩提を證するに最上無爲の妙術あり、これたゞほとけ佛にさづけてよこしまなること
なきは、すなはち自受用三昧その標準なり、この三昧に遊化するに端坐參禪を正門と
せり」と御示し下されてあります、自受用三昧とは佛の御悟りのこととす、此御悟り
を得るには端坐參禪即ち坐禪が正しき入り口であるぞよとの仰せじや、坐禪と申して
も決して専門家たる拙劣等て無ければ出來ぬと云ふ様な窮屈な狹苦しいものではあり
ませぬ、苟も志さへあれば何れな忙がしい方でも少しも其事務を妨ぐることも無く優
に坐禪することが出来る、此坐禪の事は別にソツクリと御話しに及ぶ考であります、
次に傳戒相承と云ふは釋迦如來の御傳ひ下された御戒法を相續することでありませぬ、
抑も釋迦如來は成佛の當時梵網戒經を御説きなされて菩薩の大戒を御傳ひ下され「衆

生佛戒を受ければ即ち諸佛の位に入る」と仰せられて、我等一切の衆生は一度此御戒法を受け奉りさへすれば直様三世諸佛の御仲間入り此身此儘佛に成るぞよと宣はせられてある、又娑羅雙樹の間に於て御涅槃に御入りの砌遺教經と申す御遺言の御經を御説き遊ばされ、其の中に「我が滅後に於て當に波羅提木叉を尊重し珍敬すべし乃至此は則ち是れ汝等が大師なり若し我れ世に住するとも此に異なること無けん」と仰せられてある、波羅提木叉と云ふは戒法のことです、乃ち我が滅後は我が説き遺したる戒法を以て我れと思へよ佛の在まされ世には戒法こそ眞の佛なるぞとの御趣意であります、斯く釋尊は最初の御說法に御戒法を説き又た最後の御說法にも御戒法を説かれてある、一期五十年の御教化は戒法を以て始まり戒法を以て終ると申しても宜い、戒法は實に佛敎八萬の法門を一貫する神經系統の様なもので、成佛得脱の要道安心起行の妙法は此戒法を離れて外にはありませぬ、併し戒法と申しても眞宗や其他淨土門の人々が心配するが如く、在家止住の輩には到底行ない難いとか下根劣智の者には迎も持たれぬとか申す様なものでは無く、在家でも出家でも確固たる信仰力がありさへすれば、必ず受けられ必ず持たれ必ず其の利益を蒙むることの出来る甘露最極の正法であります、又た佛法王法の表から見ても是非受けねばならず是非持たねばならぬ世間出世間に通じて肝心要の妙則です、其の戒法の箇條は總て十六箇條しか無い此十六箇條の中に三千の威儀八萬の細行も残らず籠り、倫理道德の標準も餘す所なく具つて居ると云ふ甚深微妙の法門であります、此戒法を受け奉つて佛の御位に入るのであるから之を受戒入位と申のです、夫故に我が宗で在家化導の標準と致すは専ら此傳戒相承の方であります、併し乍ら嗣法と傳戒とは決して隔てのあるものでは無い、戒法相承の根源はと云へば信心である、信心の極意はと云へば佛の御心に感應することである佛の御心はと云へば同時成道の御悟りである、其の御悟りが衆生に對し萬物に對して御戒法と爲つて作用を現はすのであるから、御戒法は譬へば花の如きもので佛の御心は實の様なものです、實に因て花が開き花に依て實を結ぶ畢竟不離不即の關係を有して居るのであるから、戒法相承の裏面には嗣法相續の密意が具なり嗣法相續の表面には戒法の徳相が現はるゝのであります、此戒法の事は此法話の骨目でありますから席

は、必ず受けられ必ず持たれ必ず其の利益を蒙むることの出来る甘露最極の正法であります、又た佛法王法の表から見ても是非受けねばならず是非持たねばならぬ世間出世間に通じて肝心要の妙則です、其の戒法の箇條は總て十六箇條しか無い此十六箇條の中に三千の威儀八萬の細行も残らず籠り、倫理道德の標準も餘す所なく具つて居ると云ふ甚深微妙の法門であります、此戒法を受け奉つて佛の御位に入るのであるから之を受戒入位と申のです、夫故に我が宗で在家化導の標準と致すは専ら此傳戒相承の方であります、併し乍ら嗣法と傳戒とは決して隔てのあるものでは無い、戒法相承の根源はと云へば信心である、信心の極意はと云へば佛の御心に感應することである佛の御心はと云へば同時成道の御悟りである、其の御悟りが衆生に對し萬物に對して御戒法と爲つて作用を現はすのであるから、御戒法は譬へば花の如きもので佛の御心は實の様なものです、實に因て花が開き花に依て實を結ぶ畢竟不離不即の關係を有して居るのであるから、戒法相承の裏面には嗣法相續の密意が具なり嗣法相續の表面には戒法の徳相が現はるゝのであります、此戒法の事は此法話の骨目でありますから席

を改めて委しく御話しする積りです、

支那禪宗の二祖神光大師は俗名光と曰ふて武宰の御方であつた、幼年より拔群の志氣を具へられ長ずるに及んで諸史百家の學を修め、道として窮めずと云ふこと無く理として辨まへずと云ふこと無しと云ふ程でありました、猶ほ之れに満足せず「孔老の教は禮術の風規なり莊易の書は未だ妙理を盡さず」と云ふて歎息せられ、龍門香山の寶靜禪師の門に投じて出家し深く大小乗の經論を研究して其の堂奥に達せられたが、所謂知識の學、分別の悟であるから中々實地に大安心を決定することが出出なんだのである、そこで大通元年十二月九日と云ふに、嵩山の少林寺に在ます達磨大師を御尋ね遊ばされました、處が達磨大師は如何なる御思召あるや一向知らぬ顔をなされて容易に入室を御許しにならぬ、據なく夜に入ても猶ほ窓の外に立て御出になりましたが、頃しも極月の寒空殊に五老峯の山中、吹き來る風は骨を削るかと思ふ斗、ポツ／＼降り出したる雪は風に煽られて巴字と散り亂れ瞬く間に腰を埋むる程に降り積りました太祖國師は此時の光景を叙べて「落つる涙滴々凍る涙を見るに愈よ寒きことを増す」

と仰せられてある、而れども露計も精神を屈せられず、古の佛菩薩は道と求むる爲めには血を刺して饑を濟ひ崖に投じて虎に飼ひしと聞く、古人何人ぞ我れ何人ぞ、縦や雪の爲めに一命を失ふとも道を求むるの志は撓むべきやと御思惟遊ばされたじや、夜半に至つて達磨大師は漸く此方を御覽なされ、終夜雪の中に立つ汝は一體何事を求むるのじやと御問なされた、二祖大師はヤレラれしやと聲を震はして、唯だ願くは和尚大慈大悲を以て眞實の道を傳ひ我等衆生を濟度し玉へと申し上げた、其時達磨大師は諸佛無上の妙法は生々世々にも難値難遇じや、我れを忘れ己れを忘れ身を棄て命を捨つる程の覺悟なければ逆も得るごとは叶はぬぞ、聊かに智識の學や分別の悟を擔ぎ來つて之を求め様としては到底無駄な事なるぞと仰せられて、其儘壁に向つて坐禪せられ更に御取合なさらなんだじや、達磨大師は曾て五天竺を遊歴して到る處機に臨み時に應じて諄々として法を説き縦横に教化せられた御方です、然るに今ま二祖大師に向ては冷酷なる御化導のなされ方、これには深ひく御思召があつて斯くも惡棘なる手段を御取りなされたのであります、若し我等が此様な場合に臨んだなら如何てござり

ませう、忽ち腹を立て、引込て了てあるうと思はれます、けれども二祖大師はそんな
 柔弱な御志ではあらせられぬ、達磨大師の激勵に依て益々發憤せられ遂に護自用
 の刀を執り左の臂をズバリと断つた、雪を染成す唐紅、血汐滴たる臂一本、達磨大師
 の目の前に突き出された、チロリと見て取る達磨大師は始めて御満足の體にて、古の
 佛は最初に法を求むる時身を忘れて願み玉はず汝は今臂を断つて道を求めんとす其の
 志稍や可なりと仰せられて、慧可と云ふ御名を賜はり入室を御許しなされ、汝の求
 ひる所は何であるぞと御尋ねになつた、二祖大師は恭しく申し上げるには、私は昔ね
 く世間出世間の學問を修め盡すも未だ眞實安心の地に至ることが出来ぬ、あはれ願く
 は大慈大悲を垂れて我が爲めに心を安んじ心を樂しましむべき法門を授け玉へと願は
 れました、サア此心を安んずると云ふことが尤も太切な聞き處じや、安んずると云ふ
 は心の上の苦しみも無く動き亂れることも無く一方に偏よることも無く、泰然として
 山の如く悠然として海の如くなるが即ち安心です、此を高祖大師は「萬づを厭ふ心
 なく欣ふ心なく心に思ふこと無く憂ふること無き之を佛と名く」と仰せられたじや、

彼の悲觀とか樂觀とが申して此世の中を苦しみと見るも樂しみと見るも穢土と見るも
 迷界と見るも、丁度眼病人が病の爲めに空中にチラ／＼と花の如き物がチラツイて見
 へる様なもので、己れの妄見妄念より本來無一物の處に於て様々なる影法師が映つて
 見へるのであります、心の中に一點でも不明の點があつては安心では無い、現世の上
 に惑があつても未來の上に疑があつても俱に安心とは言はれぬ、唯だ此安心と云ふ一
 言が一切聖賢の最終目的、宗教上の一大事因縁であります、時に達磨大師は葛向から
 「心を將ち來れ汝が爲めに安心せしめん」と仰せられた、オニ安心がして欲しいと申す
 か然らば其の心と云ふものを將て來い直ぐ安心させてやろう、サア心を將て來いよと
 の御催促じや、なんと不思議な御化導ではありませんか、だがこれを達磨の達磨たる
 所以であります、千有餘年前の昔話しとのみ思ふて居つてはなりません、今日只今達
 磨大師より此様な御催促を受けたものと思ふて篤と工夫を凝して貰ひ度です、サア心
 とは如何なるものを言ふやらん墨繪に書きし松風の聲「我等互の心は何んなもので
 せう、長い物が短かい物が丸い物が四角な物が、惜い欲しいと思ふのが心ならば思はぬ

時はどこに居るであろう、惜い愛いと思ふのが心ならば眠つた時や死んでの後はどこ
に行くであろう、心は世界よりも大きい物であろうか世界よりも小さい物であろうか
此身の外にあるであろうか此身が其の儘心であるか、頭のギリ／＼から足の爪先ま
で一分／＼に斬り刻んだならば何處に心らしい物があるであろう、「櫻木を打ち割り見
れば何にも無し花の種とやなにをいふらん」じや、惜い欲い惜い愛いと思ふ思慮分別
の心をサラリと打ち離れて了はねば決して心の本體は悟れませぬぞ、斯様に其の根源
を究め盡すを回光返照の退歩と申すのであります、徒らに智情意などを云ふ枝葉を研
研して居つては學文としては必要じやが安心を得る役には立ちませぬじや、二祖大師
は晝夜の分ち無く工夫坐禪をなされて遂に心の本體を御悟り遊ばされ、心を求むるに
終に不可得」と御答へになりました、不可得とは得べからずと云ふのじやから無一物
と云ふも空と云ふも同じ様な語ではあるが、唯だなんにも無いと云ふ様な單純無味な
ことでは無い、有とも無とも云はれぬ所を不可得と仰せられたのであります、心と云
ふても固より精神とか脳髓とか神経とか申す様なものを指すのでは無い、無限の空間

と無限の時間とに充滿して其の空間時間の差別をも離れた所のものである、故に此身
も此日月も此萬物も此世界も其の儘ソツクリ有とも無とも云はれぬ不可得である、此
を承陽大師は「心不可得は諸佛なり」「使得十二時の渾身これ心不可得なり」と御示
し下されたじや、其の時達磨大師は「汝が爲めに安心せしめ了れり」と仰せられた、
不可得と云ふ御悟りが出来さへすれば其の時こそ眞實安心の地に至つたのじや、これ
が達磨大師の御證明であります、諸君も亦た一切の煩惱妄念を打ち拂つて不可得と云
ふ處まで究めて御覽なさい、何れの處に苦しみだの迷だのと云ふものがあるらう、地獄
の釜も忽ちに摧け餓鬼道の焰も忽ちに消え畜生道の横道も忽ちに跡を失ふて「雲より
も高さところに出て見よしはしも月に隔てやはある」皎々たる不變眞如の明月は大
千世界に輝やき涉つて生死即涅槃の大眞理が現はれる、これを以心傳心の妙處、同時
成道の御悟りて、正しく禪門安心の根本土臺であります、幸に曹洞の宗義に値遇し奉
りし我等も互は是非共斯かる高尚微妙の法門に向つて大安心を決定なさる、が、生々
世々の最大幸福と申すべからずであります、

第三席

前席に於きましましては禪門の宗旨が三國相傳して來た有様と安心決定の大本とを御話しに及びました、これ丈では餘り高尚過ぎる様で、又た餘りに漠として大海の際涯を絶して取り付く島の無い様な感じをなさるゝ方が無いとも申されぬかと思はるゝ、依て更に我等が平生の行爲の上に當て箴めて一通り禪門安心の妙用を御話し致さうと思ひます、尤も只今は講義が無いから宇宙觀とか人生觀とか倫理觀とか云ふ風に論理的に一々論究はせぬ、唯だ御解り易い様に何にも箇もヒツクルメて其の大綱丈を申し上げる積りなのであります、

抑も世の中で何にか一番大きいかと云ふに宇宙に過ぎたるものはありません、仰いで天を望めば日月星辰燦爛として羅列し俯して地を臨めば海陸山川歴々として交參す此日月星辰も此海陸山川も盡く宇宙の間に孕れて居る一小分子ではありませんか、斯くも廣大なる宇宙は何に依て出來たものでありませんか、科學者の言ふ所に依ります

ば、此世界は太陽を中心として我等の住んで居る地球を始め土星天王星水星金星木星火星海王星の八つの遊星と四百二十餘の細かい星との團體より成り立て居る、其の太陽も元は大熱を有する瓦斯の様な氣體であつたが後に液體と爲つて段々に固まり來つた處から、グル／＼と回轉を始めた、回はるに從て次第に熱が減じ遂には分烈して八の遊星及び無數の小星となつた、地球の如きも追々冷くなつた爲めに草や木も生へ人間も生きて居ることの出來る様になつたが、内部には未だ熱があるから火山が噴出したり温泉が湧き出したりするのじや、其の本家本元は太陽であるから之を太陽系と名けてある、これとても宇宙間の一部の世界たるに過ぎぬ、其の中で我等の領分たる地球の上から見ても其の周圍が二萬四千哩もあると云ふから、一時間に二十哩を走る汽車に乗て夜晝押ッ通しに走ても五十日かゝらねば一廻り回ることが出來ぬ、處が太陽の大きさはと云へば直徑が八十五萬二千六百哩もある、それが小さく見へるのは地球との距里が九千二百萬哩もあるからじや、太陽の光線は一秒時間に十八萬六千三百哩を駆け一秒時間に地球を八巡回る程疾いが其の光線ですら太陽から地球に達するに

は八分間もかゝる、地球と北極星との間は前の光線の疾さでも二十餘年かゝらねば達することが出来ぬ、それ處では無い天文學者の説に依れば前の光線の疾さで走ても千五百萬年かゝつて初めて達する程な遠い所にも星があると申すことじや、佛教に現はれたる世界説に依れば須彌山と云ふ山が世界の中心となつて其の上と下と四方とに無數の小世界がある、之を大別して三界六道と申すのじや、我等の住んで居る世界は須彌山の南に當つて居ると云ふ所から南閻浮提と稱します、此世界を千合せて小千世界と名け、小千世界を千合せて中千世界と名け、中千世界を千合せて之を大千世界と名く、乃ち千に千を二重に乘けるから三千大千世界と云ふ、これ丈が釋尊御一佛の御受持遊ばざる御教化の區域じやと説てある、何と廣大なことではありませんか、此宇宙の大きい所から我等を眺めたならば何んと名けたものでありませう、誰やらが「芥子粒の中をくりぬき堂建てし五百羅漢を安置こそすれ」と云ふた處が、それではまだ大ら過ぎるとして「蚊のこぼす涙の上の浮島の濱の眞砂を千々に碎きて」と詠んだ者があつたと云ふが、地球と云へる世界ですらも蚊のこぼす涙の上の浮島の眞砂の中の一

粒にも如かぬ、況てや互の身の上杯は御話しになつたものには無い、宇宙は空間の上で此様に大きい計りて無く時間の上でも限りが無い、佛教では世界の四相と云ふて成住壞空を説てある、成は世界の成り立つ時代、住は現存の時代、壞は破壊れる時代、空は世界の滅却して相の無い時代じや、而して空滅の時代から一轉して亦た成立の時代となり、出来ては壞れ壞れては出来ぐる循環すること井戸水を汲む釣瓶の車の廻るが如くじやと云ふてある、今日の學者も物質不滅勢力恒存と云ふて物の形體にこそ種々の變化はあれ、物體を組織たる原の物質には生滅増減は無いと認定して居る、「雨霰雪や氷りと隔つれど落つれば同じ谷川の水」太陽と爲り地球と爲り人間と爲り動物と爲り草と爲り木と爲るも根本の物質は少しも變つては居らぬ、然らば此物質はどゞして出来たてであらう、物質の原は何てであらう、此物質が如何なる意味を以て色々に変化するのてであらうと云ふが所謂哲學上の問題じや、此問題を説き明さんとて古今の學者が腦味噌を絞つて思ひくゝの解決を下して在るので、唯物論だの唯心論だの二元論だのと云ふ學説が世に現はれて居るのであります、

併し其の様な學問上の議論は別途の御話しに譲るとして單刀直入に佛教の上から申しますると、此宇宙なるものは心に依て造られたものであります、宇宙間の森羅萬象が千變萬化するのには取りも直さず心の妙用であります、心と申しても唯心とか唯物とかと云ふ相手のある隔てのつく心では無い、達磨大師が二祖大師に向つて、心を將ち來れ汝が爲めに安心せしめんと云はれたので、二祖大師が心を求むるに了に不可得と答へられた、その不可得の心じや、之を佛性とも真如とも云ふのである、此心は生さるの死ぬのと云ふことも無ければ増すの減ると云ふことも無い、本來平等にして無差別である、此心は靈妙不可思議の作用を具へて暫時も休息することは無い、其の作用は無爲無漏と申して天眞の妙機であつて、我等の心の中にウジ／＼して居る様な意志は持つて居らぬ、凡夫量見に對して見れば宇宙は全く無意思である、其の無意思が取りも直さず宇宙の大意思である、釋尊は此大意思を御悟り遊ばされて同時成道と仰せられ草木國土悉皆成佛とも御示し下されたのであります、此大意思の發動する所自から太陽とも爲り地球とも爲り人間とも爲り動物とも爲り草とも爲り木とも爲つて千變

萬化である、其の千變萬化する上がやがて一つ心の源より流れ出たのであるから、古今に通じ十方に涉つて同一の軌道を守つて居る、其の同一の軌道なるものを佛教では因果因縁と説いたものであります、因果因縁と云へば直ぐ地獄とか極樂とかを聯想して兎や角申したがる連中が多いが、八遊星の運行も春夏秋冬の順環も人間の生死も草木の榮枯も火の燃へるも水の流るゝも皆な因果因縁の相であります、之を天地生成の徳と云ふ側から申せば孝順心慈悲心と云ふ名前が付けられるじや、孝順心とは親に孝行、君に忠順と云ふ意味で、凡て小さい物が大きな物に順ひ弱き物が強き物の力を借り卑き物が尊とさ物の措圖を守る所の徳です、風一たび吹き來れば草は自から偃す太陽天に輝けば水は蒸發して空に騰る、東風ソヨ／＼と動けば野邊の千草は忽ちに霞を籠める、梅の花が笑を漏せば鶯が來つて枝に上る、流るゝ水も巖に觸れば之を避けて逆はず、玉を綴れる菊の花も霜に逢へば色を變ずる、是れ皆な萬物の上に現はれる孝順の徳であります、此孝順の徳が我等人間の身の上に現はれますれば、忠義と爲り孝行と爲り恭儉と爲り智能と爲り、義勇奉公とも爲りて倫理道德の根源を造るの

てあります、又た慈悲の心とは大きな物が小さな物を憐れみ強い物が弱い物を資け尊
とい物が卑しい物を恵むの徳である、太陽は赫々として長へに光りと熱とを與へて萬
物をして能く生成發育することを得せしむ、水は混々として物を潤ほし火は蒸々とし
て物を乾かし、風は颯々として新らしき空気を送り大地は乾々として物を載せて餘さ
ず、花は爛熳として錦を織り鳥は眼院として樂を奏す、空中の大氣は動物の口と鼻と
より入て血脈の循環を活潑ならしめ、我等の排出する炭酸は植物を養なひ植物の吐
き出す酸素は我等を養なひ、喉が乾けば之を救ふに水あり腹が減れば之を補ふに食あ
り寒ければ火あり熱ければ風あり「春は花夏ほととぎす秋は月冬雪さえてすいしかり
けり」見るとして美ならざるは無く聞くとして樂しみならざるは無い、天地萬物は實
に是れ大慈大悲の丸出してはありませんか、此慈悲の徳が我等人間の身の上に現はれ
ますれば博愛と爲り公益と爲り信義と爲り和合と爲りて善根功德の土臺を拵へるので
あります、佛は之を佛性常住の孝順心慈悲心と梵網戒經に御示し下されてある、我等
も互は宇宙の中に生れ宇宙の中で働らき宇宙と同體にして少しの隔ても無い、我等も

互の身も心も手も足も眼も口も皆な盡く孝順心慈悲心の塊まり物じや、佛様の心と云
ふは大慈大悲であると申すが我等の心も矢張大慈大悲である、太陽も星辰も火も風も
草も木もソックリ大慈大悲の權化である、我等の孝順心慈悲心も宇宙萬物の孝順心慈
悲心も決して變つたものには無い、即ち同時成道である、天地同根萬物一體であつて
自家の資藏外より來らずでありますぞ、

サア箇様なる貴とい身を持ち乍ら何故其の孝順心慈悲心に反對する様な淺間敷煩惱を
起し耻かしい惡業を造るのでありませう、是は宇宙の罪でも佛性の仕業でも無い、唯
だく無始劫より以來自ら起し來つた貪欲瞋恚愚痴の三毒煩惱の細目に縛られて憐れ
果敢ない身の上となつたのである、其の三毒の煩惱は只だ我「オレガ」と云ふ物から
生じたのであつて、決して是れが煩惱であると云ふ實體は無いのです、それが因縁造
作の力に依て習慣性となり遺傳性となり種々の關係に纏はれて、遂に凡夫外道惡人邪
見人杯と云ふイヤラシイ名前が喰付たのであります、全體孝順心慈悲心の運用上自然
天然と、進んで取ると云ふ力と物に抵抗する力と取る捨るの二途を棟別る力との三

大力が具つて居るです、此進んで取るの力が慈悲の妙用とも爲り佛の大誓願とも爲つたのじや、物に抵抗する力が忍辱波羅密とも惡魔降伏とも爲つたのじや、抵抗力が強くなければ眞の堪忍は出来ぬものです、「火の中をわけて往くべき法の道雨風雪はものゝかずかは」「まけてのく人を弱しと思ふなよ己が心にかてばなりけり」じや、又た棟別る力が智慧と爲つたのである、之を恩徳斷徳智徳又は大悲大行大智の三徳とも申しまするし、又た心理學上の語を假りて云へば完全なる情感と意志と知識との作用と云ふべきである、此三徳の上に一寸でも我と云ふやつが頭を出すと大變じや、慈悲が忽ち變じて貪欲の風となり勇氣が却て瞋恚の焰と變じ智慧がアベコベに愚癡の水と爲つて我れと我が身を苦しめて繩なき繩に繋がれるのじや、一度心を求むるに了に不可得と云ふ御悟りが開けさへすれば、其の時は我と云ふ惡魔を塵にして此身此儘三徳具足の佛様じや、手の舞足の踏む所がソツクリ孝順心慈悲心の丸ころがしじや、心の欲する所に従つて則を踰へず、忠孝仁義恭儉博愛の徳は指の先からも毛の端からも光りを放つて來まするじや、此を高祖大師は「十方法界三途六道の群類みなともに一時に

身心明淨にして大解脱地を證し、本來面目現するるとき諸法みな正覺を證會し萬物ともに佛身を使用して、すみやかに證會の邊際を一超して覺樹王に端坐し一時に無等々の大法輪を轉じ究竟無爲の深般若を開演す」と御示し下され、太祖國師は「眼根より光明を放て色相莊嚴をなし耳根より光明を放て音聲の佛事をさし得たり手裡に光明を放て自を轉じ他を轉じ脚下に光明を放て進歩し退歩す」と仰せ遊ばされたのであります、昔し達磨大師より四代目の祖師となられた、大醫禪師が三祖大師に御相見の時「願くば和尚慈悲乞ふ解脱の法門を與へよ」と願はれた、これは私はドーモ煩惱の繩に縛られ、業障の綱に繋がれて三界六道に迷ひ込て居る身の上であります、あはれ大慈大悲を以て此繩目のスツカリほどける所の御教化を賜はりたいとの御願ひです、佛法を信仰なさるゝ方々は是非共コーユー願を心底より起さねばならぬ、面白半分や物好半分の信心では此願は起らぬものです、其の時三祖大師は「誰れか汝を縛するや」と仰せられた、汝を縛つたり繋いだりするものは何物じや、何物の爲めに煩惱を起したり業障を受けたりするのじや、汝を縛すると云ふ不屈者を尋ね出せよ三毒煩惱の源は何奴

なるぞとの御答へてあつた、そこで禪師は「人の縛する無し」別に私を縛るものが外にはございませぬ「鳴子をは己が羽風に任せつゝ心とさはぐ村雀かな」じや、斯く申し上ぐると大師は「何を更に解脱を求めんや」我等を縛る者が無いと云ふことが徹底解ればそれが直様縛目のほどけた解脱自在の境界じや、夢の中に鬼を見て非常に其の鬼に苦められて居つても目を覺して見れば、東西南北に鬼らしいものは少しも無い、自分は固より大涅槃の床の上に安住して居身ては無いか、ア、鬼ありと見たのは夢の中の妄想であつたと云ふことが知れさせれば其の儘安心解脱の境界であるぞよと仰せられました、諸君も亦た我を縛る底のものを能々詮索して御覽なさい、盗人を押へて見れば我が子なり、三毒煩惱をばシツカリと押へ付けて見ればそれがソックリ孝順心慈悲心の御寶でありますぞ、之を自己を明らかにするとも真理を悟るとも申すのであります、自分が自分を忘れて居るから煩惱となつて我れを苦しめるじや、自分が自分を悟りさへすれば煩惱も即菩提となつて佛の三徳を現はすのである、希臘の大賢ソクラテスはデルフォに在るアポロの神殿の額の「己れを知れよ」と云ふ語を以て教

理の骨子と爲し、道は遠きにあらず己れに在りと云ふことを土臺にして、教を施し道を講じ真理の光明を歐洲の天地に輝かした、是れ等も正しく御悟りの一半を發明したに相違ないです、我等も互も能く己れを明らかにすれば無我の理に達しますれば無我は決して空々寂々では無い死物では無い、自から宇宙の大意に契ふて獨り手に孝順心慈悲心の作用が活動撥轉して、釋尊傳授の御戒法が知らず識らず造次顛沛の上に現はれて参りまするじや、

唐の無善居士と云ふは護法論を著した有名な人ですが、姓は張名は商英と云ふて一度は宰相に迄なつた方です、始めは大の佛法嫌い、それも食はず嫌じや、一日或る寺に行て經藏の中に美麗なる一切經が整然として安置されてあるのを見て忌々しく堪らぬ、我が聖人孔子の書が印度より來た胡人の教に及ばぬとは残念なことである、よし我れ全力を揮つて佛法を排斥してやると云ふて家に歸り直ちに書齋に入て破佛論の草稿に取懸つて夜半迄も机に向て考へて居る、其の妻は向氏で少しは佛法をも心得て中々の行手であつたと見えます、居士の傍に來て深夜に及んで何事を遊ばすやと釋

ねますると、予は無佛論を書く積りじやと答へた、すると妻の申すには無佛論ならば佛は無いと云ふことでありませう、無い佛ならば論ずる迄もありません、然れども佛は現在有るてはありませんか、佛は常住にして不滅です、して見れば御考案を改めて有佛論を御書きなされたが宜いではござりませんかと云ふた、其の語が何んと無く奥床しい感じが致したので、心がトギマギして筆も鈍り其の儘中止して居つたが、或時朋友の處を訪ふて維摩經を見た、段々と讀む中に「此病は地大に非ず亦だ地大を離れず」と云ふ語があつた、これは維摩居士の病氣と云ふ因縁から其の病の本を詮索した文です、此身は地水火風と云ふ四大の聚り物じやが、此四大なるものは宇宙に充滿して居つて生死も増減も無い、然るに病氣が出た死んで仕舞ふた杯と云ふは因縁に依て現はれた一時の假の相に過ぎぬ、四大の上には病も無ければ死ぬと云ふことも無い、四大其の儘が佛性常住の孝順心慈悲心である、夫故四大の上には病氣などは無い、併し此身あつて此病があるのじやから四大を離れて外に病があるても無いと云ふ意味の語てあります、居士は此處に至つて大に發明する所があつたので其の御經を借りて來

て一生懸命に讀んで居つた、其の時妻の向氏が之を見て貴郎は好い御經を御讀みなされますすな、其の御經を十分御研究になつたら、其の時こそ始めて無佛論を御作り遊ばして宜しかろうと存じますと申した、居士は之を聞いて益々研究して遂に佛教の大信者になつたと云ふ御話しがあります、悟りの眼を開いて見れば佛様も我等も一體平等であるから凡夫じやの佛じやのと云ふ隔てが無なる、これぞ眞の無佛の理であります、其の隔ての無くなつた時始めて天地法界が皆な佛性の慈悲心孝順心と爲り山川草木も盡く心の光り佛の御姿じや、之を聖人に己れ無し己ならざる所なしと申したのである、己れが無いからして凡夫と佛との隔ては取れて了ふ、己ならざる所が無いからして世界中がソツクリ佛の御姿と爲るのです、して見れば禪門の安心は宇宙の眞理と一致した處に決定せらるゝのであるから、其の妙用に至つては活動的で進歩的であることは言ふ迄も無い、又た禪門では佛の御經文は盡く自己の藥籠中に收めて少しも之を嫌はぬのみならず、世の中の學問と雖も一分の眞理あるものは取て以て自家の珍財と爲し、自ら之れが主人公と爲つて眞理を運用するのが我が宗の本領であります、また

御話しは盡きませぬが大體丈は一通り演へた積りてありますから、曹洞宗旨の大要はこれにて席を結ぶことと致します。

もろ／＼の衆生を見るに、ことごとく己れが身に在り、己れが身も亦衆生の身中に在り、猶ほ影現の如し、能く衆生をしてことごとく佛身ならしめ、亦た己れが身をして衆生身と作さしむ、(大集經の佛語)行者常に應に智慧觀察して此心をして邪網に隨せしむること勿るべし、當きに勤めて正念にして不取不著ならば則ち能く是の諸の業障を遠離すべし、(馬鳴大士)

身命を顧みず聞法するがときは、その聞法成熟するなり、この體性は尊重すべきなり、いまわれら、道のためにしてさらん體性は、佗日にさらされて野外にすてらるるとも、たれかこれを禮拜せむ、たれかこれを賣買せん、今日の精魂かへりてうらむべし、鬼の先骨をうつありき、天の先骨を禮せしあり、いたずらに塵土に化するときを思ひやれば、いまの愛惜なし、のちのあはれみあり、(承闍大師)釋尊の佛法沙界にみち／＼ていたらざるところなし、參到せんになんぞいたらざらん、この人身たやすく受るところにあらず、むかしの善根力によりて受け來るところなり、もし一度このところにいたらば悉く解脱せん、(弘徳圓明國師)

二本證妙修

第一席

曹洞宗の安心起行を委しく申上る前に順序として修證義の總序に於て御示し下されてある所の、我が宗の信者としては必ず豫め心得置かねばならぬ事柄を述べて、それから我が宗の安心起行を表示せられた修證と申す意義の大要を御話し致走と思ます、先づ第一に心得べきことは佛教の目的です、佛教を信ずるのは何の爲めであらう、佛教とは一體ド・ユーことを教へるものであらうと云ふことです、勿論佛様に成るのが佛教の目的には違ひないが、之を國家の上から人生の上から眺めまして果して佛教の目的は那邊にあるかと云ふことを極めて置かねばならぬ、細かに申せば多くの理由もございませうが大判に判り出して見ると三種の目的を出てぬ、即ち第一には人の精神に安慰と幸福とを與へて人生一切の苦痛を救ふこと、二には人間道徳の基礎を確立し人としての凡ての事業に於て一定の意義あらしむること、三には未來の問題を明らか

にし永遠の安心を與へ我等の智徳をして無限に向上進歩せしむること、以上の三ヶ條が尤も肝要なる目的であらうと思ひます、此目的は國家の上からも社會の上からも暫時も缺くべからざる必須の條件です、而して此目的を全ふするには宗教より外に完全なる機關は無いてす、佛教八萬の法藏も歸する所は此三大目的をば出てぬ、縦や千差萬別の御化導がありませうともドイのつまりは人生の束縛を離れて道徳的地盤を立て未來際を期して智徳圓滿の佛地に進むの外は無いてす、抑も人生には必ず苦痛と云ふイヤナものが伴ふて居る、これには精神上の苦しみと肉體に感ずる苦しみとの二つがある、而して其苦しみの原因には自然界より生ずるものと境遇に依つて來るものと自分の迷や又は不注意から特と拵へるものと希望の上から現はれるものとの區別がある、寒い熱いの飢いの渴くの又は年を取て腰が痛む、眼がかすむ、それ地震それ雷やれ大風が吹く、大雨が降ると云ふ様な類は皆な自然界より生ずる苦しみます、お錢が無い、着物が無い、それ叱られた、やれつねられた、休む暇が無い眠る隙が無いと云ふ様な事は境遇に依つて來苦しむじや、腹が立つてならぬ悔しくてたまらぬ、生き易り

死に易り恨を晴さて置くべきや杯と自ら煩悶するのや、どうしても思ひ切られぬ明らめられぬ杯と愚癡に沈むの類は重もに迷から出た苦しみます、食ひ過て腹が痛む飲み過て目が廻る遊び過て手違ひが出來た言ひ過て取返しが付かぬ相場に出して失敗した博奕に引懸つて丸裸となつた道樂して親に勘當された不都合を働いて世間の信用を失つた、危きに近づいて怪我をした洋燈を塵末にして火事を出がしたの類は不注意の報である、金儲が致たい出世が致たい、學問を致たいが親が許して呉れぬ事業を起したいが資本が無い、如何にせば世の中が治まろうや如何にせば世界列國に對して覇權を握ることが出來様か杯と心身を勞するの、希望より生じた苦しみます、凡そ生けとし生ける者一人として、此苦しみを受ざるは無、人間の一生は此苦しみと戰爭して居る様なものです、況てや修證義の三節にもある通り「無常憑み難し知らず露命いかなる道の草にか落ちん身己に私に非ず命は光陰に移されて暫くも停め難しじや、朝にして夕を待たず出息は入息を待たず風前の燈よりも脆く山川の水よりも疾きは無常轉變の有様です、大江の千里が「紅葉を風に任せて見るよりもはかなきものは命な

りけり」と詠じ、和泉式部が「おくと見し露もありけりはかなくて消えにし人を何に
 たとへん」と讀みしも決して厭世觀とのみは評されね、「山に入り市に交りても遁れ難
 きは無常の使關を固め兵を集めても防ぎ難きは生死なり」と云ふが正しく人生の一大
 事實ではありませぬか、去れど此苦しみをば無暗矢鱈に厭ひ嫌ふてはなりませぬ、事
 る此苦しみがあればこそ快樂も幸福も現はるゝのでありますぞ、「艱難は最善の教師」
 「失敗は成功の伴侶」じや、大燈國師は「うきことの猶も我が身につもれかします心
 のまことをや見ん」と詠せられ、優婆塞戒經には「一切の悪友諸の煩惱業は即ち是れ
 菩薩道莊嚴の伴なり何を以ての故に一切の凡夫は智慧正念の心あること無し故に煩惱
 を以て怨敵と爲す、菩薩は智慧正念具足す故に煩惱を以て道の伴と爲す悪友及び業も
 亦復是の如し」とありて、悪友も煩惱も正しき信仰の力を以て見れば却て我等をして
 善根を積み功德を重ねしむる好因縁じや、世には運命と云ふ様なものがあつて人生を
 支配する様に見へるが別に不可思議のものがあるては無い、即ち前世よりの業力作用
 に依て生じたる因果因縁の現象です、此因果因縁の道理が解りさへすれば人生の苦み

と云ふことも自から明らかになつて參る、善因あれば善果あり惡因あれば惡果あり、
 我等の一念が少しでも動けば身と口と意との上に種々の作用を起し其作用が善業とも
 なり惡業ともなり又は善ても惡ても無い無記業ともなる、無記業は勢力が微弱である
 から多は報を感ぜぬじや、縱し感じた處が無記であるから苦樂は無い、善と惡との二
 つは必ず其作用に相應した苦樂の結果を招ぐのである、地獄の如く全然苦しみの衆生
 もあり極樂の様に全然樂しみの衆生もある、又た人間の様に苦樂兩つ乍ら具つて居る
 中にも苦しみが多くて樂しみの少ない者もあり樂しみが多くて苦しみの少ない人もあ
 り、十人十色百人百色千態萬狀じや、過去も現在も未來も盡く此因果因縁の假の姿で
 ある、生るも死するも凡て因果の鏡に映つた一時の影法師である、唯だ結果の現は
 れる時期には三時業と稱して三通りの區別がある、即ち此世で造つた業に依て此世の
 中に果報を受くると、此世で播いた種が未來に生ると、此世の種が次の未來世以後に
 實を結ぶるとの三時期がある、それは業作用の勢力に強いと弱いとがあるのと其原因
 を助けて生長せしむる外部の事情に緩急輕重がある爲めです、是等の事は修證義の四

節と五節とに委しく御示し下されてあります、斯く因果の道理の歴然たることが解り
 さへすれば人生に於ける我等の苦しみも楽しみも其本末始終の關係が分明に知れるか
 ら、決して徒らに世を恨み人を怨むこと無く苦しみに遇ふては益々悪心悪業の恐るべ
 きことを觀じ樂しみに遇ふては愈々善心善業の貴とき所以を喜びて、自ら心を治め心
 を安んじて苦しみの中に在り乍らも苦しみの爲めに束縛せられず泰然として世に處し
 得られます、アチソンの所謂「宗教上の希望は常に困難の下に屈縮せざるのみならず
 却て困難の中に樂しみを生ず」と云ふ様になる、是れが佛教第一の目的です、そうな
 りますれば寢ても寤ても因果因縁の大法を重んじて毫末も味ますることが出来ぬ様にな
 るから、國家の法律や社會の耳目杯の外に於て深く天理人道を明らめ神佛の御照覽を
 畏れ慎しみて道徳上に確固不拔なる基礎が出来る、今の世の中の人は多くは因果の大
 法をも信ぜず神佛の照覽をも恐れず唯た法律とか社會の賞罰とか云ふ人爲の事のみを
 以て行爲の標準となす様じやから、動もすると良心の制裁力が次第に弱くなつて何事
 にも誠實の志操が乏しく殆んど道徳的精神の基礎がグラツいて居る様に思はるゝ、征

露の戰爭に於て東郷大將杯は大勝利のある毎に 大元帥陛下の御威稜と 皇祖 皇宗
 の御神徳とに依るものと御信じ遊ばされた様じや、中には無暗に天祐補助と云ふ様な
 ことを申しては國民を迷信に誘ふ様になりはせぬかと言ふて心配する向もある、成程
 何にも歎も天祐を頼みにする様では迷信にも陥るうが「心だに誠の道に叶ひなば祈
 らずとも神や守らん」と云ふは實に是れ神人感應の妙理である、誠の道に叶ふた
 る心が無ければ神佛の感應は無い、至誠の心を以て事に當れば必ず神佛の利益はあるも
 のです、「神明に對して信心を失ふ者は人に對して信用を失ふ」とは西洋の格言じや、
 「天道は善に福はいし惡に禍はいます」「君子罪を昭々に得ること無さを欲せば先づ罪を
 冥々に得ること勿れ」とは支那聖賢の語じや「おろかなる人天猶ほまことを感ずるお
 もひあり諸佛の正法いかでかまことに感應するあはれみなからん土石沙礫にも誠感の
 至神はあるなり」とは承陽大師の御親訓じや、こうゆう正しき信仰は決して妨げ無い
 のみならず寧ろ精神の根本を養ひ道徳の基礎を立つるものであります、是れが佛教
 第二の目的です、それからモー一つの問題は乃ち生死の一大事です、修證義の一番初

めに「生を明らめ死を明らむるは佛家一大事の因縁なり生死の中に佛あれば生死なし但生死即ち涅槃と心得て生死として厭ふべきもなく涅槃として欣ふべきもなし是時初めて生死を離るゝ分あり」とありて、生と死との二途を明らめるのは實に佛教信徒の一大事であります、小西來山が臨終の時に「來山は生れたとかて死ぬるなりそれ恨みもなにもかも無し」と詠んだと云ふが、全く我等は生れたから死ぬるのじや人生てふ大海に沈浮出沒する一切の事柄萬柄は皆な生と死との中間に翻へる大波小波じや、一息截断すれば萬事休す、山を抜く力、世を蓋ふの英氣、花を欺く顔、人を驚かすの富も棺桶の蓋一枚でも終いてす、「夏草やつはものどもの夢の跡」「長き夜の眠りの中にまた眠り夢の世に猶ほ夢を見る哉」「夢の世に猶ほ夢を見て短かさ夢の浮橋を渡りつゝ惜しい欲い憎い愛いとモガキにモガイて居るのである、而して我等はドーして生れて來たのであろう、それは知らぬ、死んでドーなるてあろう、それも知らぬ、來た處も知らず先行も知らず、我等は實に六道の辻にうろついて居る憐れむべき迷ひ兒ではありませんか、それならば如何様に生死を明らめたなら宜いかと云ふに、修證義には生死即

ち涅槃と心得よとある、これが生死の明らめ方です、涅槃とは不生不滅と申して生れも死にもせぬ、常住不變の義じや、生れたり死んだりすると思ふは因縁假和合の相を執する實有の妄見じや、我等も萬物も世界も元より生れもせず死にもせぬ常住の涅槃じやと明らめねばならぬ、抑も此宇宙なるものは空間と云ふヒロサの上でも時間を云ふ長サの上でも限りの無いものじや、尤も世界の上にも生住壞滅の四相とて生れた時代もありジツと住まつて居る只今の様な時代もあり壞と破壊してこはれる時代もあり滅と何にも無くなつて空々寂々の時代もあつて、人間の生老病死と同じ様ではあるが其生と見へるも滅と見へるも盡く因縁和合の上に現はれた假の相たである、宇宙そのものへ上には少しも増したの滅たのと云ふことは無いです、一天雲漲ざり天口爲めに昏く雨車輛を流すの時も天地の上には更に變りは無、清風徐ろに起り山月影爽かに萬里の長空一點の雲なき時も宇宙の上には毫も増減は無、一滴の水結んで霜と爲り蒸發して氣體と爲り結晶して氷と爲り雨と爲り雲と爲り雪と爲り霰と爲るも、水そのものはやつぱり不生不滅の大涅槃じや、我等も亦た其通りて因縁に依て借りて生れ因

縁盡れば則ち死す、生死の其儘がやがて不生不死の大涅槃です、此道理が解らねば到底大安心は決定致されませぬぞ、「あゝ樂や虚空を家と住みなして須彌を枕に獨り寐の春」と云ふ樂しみは現はれませぬぞ、サア此涅槃の光りが見留められたならば我等の境界は火に入っても焼けず水に入っても溺れぬ金剛不壞の佛果、生死其儘の無量壽佛じや過去も現在も未來も唯だ因縁生より現はれた無常なる幻の影であるが其因縁を造り出す御主人公は誰れかと云ふに我が心です、華嚴經の覺林菩薩の偈にも「心は工なる畫師の如く能く諸の世間を書く五蘊悉く從て生ず法として造らざる無し」とある、「千なりや蔓一筋の心から」じや、我等の心こそ實に天地萬物の主宰者造物主でありますぞ、心と云へば直ぐ唯心論とか一元論とか云ひたがるがソんな小理窟では呑込の付くものではない、我等こそは不生不滅の大涅槃の床に坐して天地の主宰權を掌握して居るのじや、其主宰者たる我等も互が生死の二途に迷ひ萬物の爲めに驅り使はれて惜い欲ひ憎い愛い杯と騒ぎ廻り、無我夢中に生涯を送るのは全く妄想の熱に浮かされて居るからです、此妄想熱を拂ひ除けて金剛堅固の大安心を得るのが佛教第三の目的

であり、世の中には佛教の何物たるを知らずに自ら信仰を度外視する人もあり、又た佛教中に在り乍ら其目的を誤つて居る人も少なからぬのは甚だ歎かはしいとす、故に修證義の第六節に「當に知るべし今生の我身二つなし三つなし徒らに邪見に墮ちて虚しく惡業を感得せん惜からざらめや」と御誡め下されてある、何卒各々方は此點に深く御注意なされて真正の大功德を得られたいものであります、或處に眼鏡屋があつたが或時一人の盜賊が忍び込んだ、見世の小僧が早くも目を醒して見ると今や戸の節穴から見世を窺かんとする鹽梅じや、頓智の小僧は早速に入つ目の眼鏡を節穴に當がつて帳場に坐り込んで居た、泥棒はそれとも知らずコソコソ窺いて見て驚いた、此家は餘程用心深い、小僧が八人で夜番をして居る哩、モ一少し過たら眠くなつて寐るだらうと云ふて潜んで居つた、小僧奴此度は大きく見へる眼鏡を當がつて置いた、泥棒は暫くして窺いて見て二度ビックリ、ヤア恐ろしい大入道が見世に居る哩、小僧は面白がつて其眼鏡をアベコベに當がつた、泥棒は益々驚き此家はなんと云ふ廣い家だらう奥行が二三里もあり走じや、こりや堪らぬとて逃げ去たと云ふ御笑草がある、此

泥棒が見る度毎に驚き恐れたは唯だ眼鏡の爲めであつて、小僧其物は大きくもならず小くもならず増しもせず減りもせぬじや、我等も亦た宇宙觀や人生觀の上に於て邪見の眼鏡に惑はされて虚しく悪業の衆生とならぬ様用心せねばなりません。

昔し支那の福州古靈の神贊禪師と云ふは、有名な方じやが本は同じ福州の大中寺の弟子でありました、若い折行脚に出掛て當時傑出の大善知識百丈禪師の會下に投じて難行苦行を積み遂に立派なるも悟りを開かれ三四年を経て大中寺に歸られました、師匠さんは神贊に向つて「ドーじやな何んな修行が出来たなと尋ねられしも、謙遜なる神贊は、ドー致しまして一向に未熟で御耻しうございますとのみ申して居つた、だが師匠孝行なる神贊はツクツク師匠の様子を見るに少しも安心の態度が無いから心潜かに氣の毒に思ふて居られました、或日のこと風呂を沸して師匠をお入れ申し、背を洗ふて上げて居つたが、師匠はデツブリ肥つた體格であつたが思はず知らず「好箇の佛殿而かも佛未だ聖ならず」と口走つた、これは師匠さんは相變らず立派な身軀で大本山の本堂の様じやが惜ひ哉中の本尊様が御疎末じやといふ意味です、師匠は驚いて何

じやと云ふて振向いた、すると神贊は「佛聖ならずと雖ども且つ放光を能くす」佛様は疎末じやがまだ生きてござるから頼もしいと云ふ程の意じや、二三日を過ぎてから或時師匠は窓の下で御經を看て居ると、一疋の蜂が飛て来て障子にブツツカッタが表へ出られぬ處から同じ處をブンブン無暗にブツツカッて居るのを傍に居た神贊が見て「世界許の如くに廣潤たるに肯て出でず他の故紙を鑽ること豈年にし去らん」と言ひ乍ら「空門肯て出でず窓に投ず也太癡百年故紙を鑽る何れの日か出頭の時」と云ふ偈を作られた、是意は世界は是の如くに廣い出入はどこからても自由自在じや然るに小さい處に目を着けてソコ計りに迷ひ込で居るからして、百年の間障子の故紙をツツツイタからとても生死を離れる分は無、一切衆生も亦た是の如くじや、常住不變の大涅槃、生死其儘の無量壽佛であり乍ら因縁假和合の相に執着し五慾六塵の煩惱に頭を突込み、繩なき繩に縛られて我れと我が手て三界六道の苦しみを招ぎつゝあるは、ア、氣の毒千萬のことじやと云ふ意味である、之を聞た師匠は非常に感歎せられまして始めて神贊の一大事を明らめたことを知り、遂に兩人手を取つて再び百丈禪

師の下に參じ兩人共禪師の御弟子になられたと云ふありがたい御話しがございます、何んと趣味ある御話しではありませぬか、我等互は受け難き人間の身を受け遇ひ難き佛法に遇ひ奉ることの出来た最勝稀有の生れ方です、我等の身の上こそ大本山の本堂にも劣らぬ立派な果報です、斯かる萬物の靈長とも稱すべき本堂を持ち乍ら太切な心の本尊様が御疎末では申譯の無いことじや、承陽大師も「誰とても日かげの駒は嫌はぬを法の道うる人ぞ少なき」と云ふて御概き遊ばされ、圓明國師は「みだりに古今の情に封ぜらるゝことなけれ聲色の法にとこふるることなけれ夜間をも日裡をもむなしくすることなかれ」と御誠め下されてあります、左すれば露の如き無常の命を虚しく荒野の草に散らさず、急ぎて眞實の佛教を信受奉行せらるゝが肝要であります、これより席を改めて我が宗の修證の大要を述べることゝ致しませう。

第二席

八萬四千の法門三千餘卷の經文も煎じ詰むれば修證と云ふ二字の中に盡く收まるので

あります、修は「ヲサム」と訓じ修行と熟字して佛様の御教に従て身にも口にも佛の道を修め行ふこと、又た證とは「サトリ」と訓じ證悟と熟字して佛の道を悟り明らめて自分の境界が佛の道とキチリと合體して一つものになることである、承陽大師は「此法は人々分上にゆたかに具はれりと雖ども未だ修せざるには顯はれず證せざるには得ること無し」と仰せられて、佛様の御悟り遊ばされた菩提の道と申すもツマリ宇宙の眞理なのであるから、我れも人も皆な本來に具へて居るのではあるが、悲しい哉煩惱業障の雲に蔽はれて其の妙徳を顯はすことが出来ぬじや、其の煩惱の雲霧を拂ひ除けて皎々たる眞如の明月を眺めさせたいものじやと云ふが、釋尊御化導の御本懐であります、それじやに依て八萬四千の根機に應じて八萬四千の法門を開き、衆生の病無量なるが故に佛の授け玉ふ御法の良薬も亦た自から無量にして、遂に三千餘卷の經文とも爲り之を三國に傳ひくゝて、トウ／＼今日の日本佛教の如く十三宗五十三派にも分るゝ様になつたのである、縦い如何程法門の數が分れて居様とも、歸する所は修行の方法と證悟の道とを御説き遊ばす外に佛の御本懐は無ひのです、尤も經論の中には

三界六道の狀態世界成立の因縁、其他五蘊十二處十八界とか五位七十五法とか百法とか六大周遍とか云ふ重々の法相も御説き下されてはあるが、決して之を一科の學問として論究するのが大目的では無く、唯だく佛法の修行を全ふし菩提の證を成就せんが爲めの方便資糧に過ぎぬのじや、それでありませうから我が曹洞宗に於ても矢張修と證との二つを以て安心起行の根本標準と致して在るのです、併し茲に一つ是非心得て置かねばならぬ大切なることがあります、それは何にかと申すと、普通佛教の上では修因證果と申して先づ初めに修行の功を積んで其の功力に依て證悟を得る、乃ち修行は原因で證は結果じやと云ふが一般の定則である、而して其の修行の致方が宗派々に依て説き様が違ふて居るから、或は此世に於て直に證が開けると教ゆるもあり或は此世では成佛の因縁丈は定まるが生を易へて未來に至り佛の淨土に生れてから始めて成佛の目的が達せられると示すもあり、中には到底一世や二世の修行では佛には成れぬ生々世々を盡して後に始めて證が得られるのじやと説くものあつて種々様々であります、我が曹洞宗に於きましては別に佛祖直傳の法がありまして修證の取扱

ひ方が普通一般の説き様とは違ふのです、どう違ふかと云ふに丁度他の宗門とは反對でありまして、修行してから證るのは無く、先づ最初にちやんと證を得てそれから修行すると申すのであります、尤も淨土眞宗には平生業成と云ふ説があり、眞言宗では即身成佛と説き華嚴宗では初發心時便成正覺と説いてあるから、頗る似寄て居る様なものゝ細かに味ふて見れば我が宗の御教は又た格別て之を直に本證妙修と御示し下されてある、即ち承陽大師は辨道話に於て「我等さいはひに一分の妙修を單傳せる初心の辨道すなはち一分の本證を無爲の地に得るなり」又た「今も證上の修なるが故に初心の辨道すなはち本證の全體なり」と仰せられたのが此處です、本證とはモトヨリサトルと云ふので修行してから悟るのでは無く、我等はまだ此世に生れない前からチャンと證て居る立派な佛様であるから今更事新らしく證りたいと云ふて修行する迄も無い、本來成佛であるぞ云ふと意味になる、又た妙修とは妙は不可思議と云ふとであるから心にも詞にも及ばぬ程極貴とい極氣高い極奥深い修行と云ふ意味になる、なぜならば普通の修行ならば證を開く爲めに致すのじやから證を開きませすれば、そ

れて修行の方は卒業済になるのであるが、妙修と云ふは證つて了つた上に現はれて来る修行でありますから之を佛事とも云ふじや、即ち佛様の仕事なのである、本來成佛と氣が付けば其の本證の御光りが身の上にも口の上にも心の上にも瞭然として輝き入り寝るも起きるも盡く證の作用佛様の御仕事となつて參るから、丁度日月が世界萬物を照すが如く別に報酬を得る爲めの行でも無く名利を求むる爲めでも靈驗を得る爲めでも無い、天真無漏の妙用じや、又た天の長へに覆へ地の長へに載するが如くにして世界のあらん限り盡未來際生々世々の修行であつて、これて事済み御終ひと云ふことは無いから妙修と名けられたものであります、古人の歌に「雲晴れて後の光りと思ふなよ本より空に有明の月」とあるが、月の姿は雲に鎖されるればしは藏れて居る様に見へても、月其の物は一分一厘も雲の爲めに傷けらるゝものには無い、十重二十重に雲は圍まうとも月は依然として瑠璃よりも清らかなる姿を以て中天に輝いて居ります、本來成佛と云ふ證の明月は縦や煩惱業障の雲に鎖されて居る様に見へても本の證は毛筋程も増減はありません、煩惱業障の浮雲はホンの一時の湧き物であつて其の實

體があるのでは無い、清風徐ろに來れば行衛も知れず消え失せて仕舞ふじや、我等の信心こそ正しく煩惱業障の浮雲を吹き拂ふ清風である、信心一たび起れば懺悔の念忽ちに現はれ佛智不思議の力と妙合して無始劫來の雲霧は影も形も無く消滅して、本より空に有明の證の月が皎々として宇宙の全面に輝いて居るです、サア一度有明の月が現はれさえすれば「庭に生ふるチリ／＼草の露までも影をほそめて宿る月影」で一草一木の葉末に残る白露にも玉の様なる影を宿し「月は明なり銀色三千界人は酔ふ金風十二樓」とか「里わかずながひる人の袖ごとに影も惜まぬ山の端の月」と云ふ様に幾百億萬の人に對して隔ても無く漏しもせず清らかなる光りを與ふるじや、これが即ち本より空にすみわたる證の月が一切萬物に對して影を分ち光りを放つ所謂妙修であります、普通で云ふ修證は雲霧を拂ふのが修行で月を見るのが證じやと云ふ様な鹽梅に取扱ふて居るが、我が宗の教へ方は雲霧は如何様に有ろうとも一念信心の風を以て一時にサラリと吹き拂ふことが出来るから、高祖大師の所謂「信成就の處佛祖現成す」て其の當體間に髪を容れず嬋娟として證の月が現はれるじや、月の姿を見認たのが證

て其の月影が「千江水あり千江の月萬里雲なし萬里の天」と千江萬水に影を分つて世界の暗を照すのが修行であります、一步を進めて申しますれば雲霧杯には貪着せず、雲霧よりも一段高い處に飛び出して直ちに月宮殿の真只中に入る時は「雲よりも高さ處に出て見よしばしも月に隔てやはある」て如何程雲霧があろうとも少しも邪魔にはならぬ「悟りなば四條五條の橋の上往來の人を深山木に見て」て、恰も泥の中に在りて泥に染まらぬ蓮の華の如き境界となるのであります、

然らば本證妙修の二の徳がどうすれば我等も互の身の上に顯れるかと云ふに、之を修證義の中には四箇條に説いてある、是れが我が宗安心起行の四大原則であります、本證のサトリを顯はす法門としては懺悔滅罪と受戒入位との二箇條があり、妙修の實行としては發願利生と行持報恩との二箇條があります、此事は席を改めて委しく御話しを致す積りてはあるが便宜上ザット其の筋道の大概を申し上げて置かうと思ふ、前に申した月と雲との譬への通りて、我等は無始劫來よりして煩惱業障と云ふ雲霧の爲めに冥きより冥きに入て永く三寶の御名をだも聞かず、三界六道の暗路を辿つて自ら苦

しみを招き自ら迷ひに沈んで居つたのじやが、一度佛祖の御教を聽聞して見れば、我等は釋迦如來にも彌陀如來にも寸分變らぬ本來の佛の身である、佛性常住の孝順心慈悲心は宇宙の妙用であつて我等も亦た宇宙同體の徳を具へて居たのである、然るに無明煩惱の所業とは申し乍ら夢にもそれを知らずして、迷ひに迷ひ苦しみに苦しみて居りしことの恥がしさと深くも既往の罪過を後悔して、佛の教を信じ奉り心底から佛の御救ひを願ふのが即ち懺悔じや、其の信心懺悔の風の方で罪障の雲霧が跡形も無く消滅すると云ふが懺悔滅罪であります、此懺悔滅罪は正しく本證の上の方便行とても申しませうか、ツマリ證を聞く準備の法門です、罪障の雲霧が消えて了へば「影は金鏡を開いて満ち輪は玉壺を抱いて清し」とも謂つべき本證の明月は第一義天に懸つて居る、其の證の月の本體は佛性常住の孝順心慈悲心の御姿じや、其の御姿には自から十六條の御戒法の光りが輝いて居る、第一義天と云ふても餘所の事ではありませぬぞ我等の心も我等の身もソツクリ其の儘サトリの月の姿でありますぞ、十六條の御戒法と云ふも我等の具へて居るサトリの御光りの名じや、其の御光りを自ら味まして居つ

たに依て釋迦如來は大慈大悲の手を垂れてソレ此處に在るぞよと御指し示し下されたのが戒法の御相續じや、其の御相續を戴いてア、證の月は我が身にありしが萬徳圓滿の御佛とは我が身の事でありたるかと、深くも深く信仰して心に受け收めたのが受戒入位と申すのであります、受戒入位とは「衆生佛戒を受ければ即ち諸佛の位に入る」と釋尊が御示し下された梵網經の御語を約めたので、即ち御戒法を受けて佛の位に入る此身此儘の成佛と云ふとす、こゝを太祖國師は「よのつね釋迦老漢汝等と俱に行住坐臥し汝等と俱に言語伺候して一時も相離るゝことなし、一生若し彼の老漢を見ずんば諸人悉く皆不孝の人たらん」と仰せられてある、これは佛様は決して外には在まざる我等と俱に一處に寐たり起きたりしてござるぞ、それをウツカリして居ては佛様を殺す様なものであるぞとの御示しじや、一處にござると云ふは我等も互が其の儘の佛なるぞと云ふ意味なので即ち本證のことである、近代の名僧と言はれた行誡上人が「夜もすがら唱ふる三世の御佛の御名はひかしの我が名ならずや」と詠ぜられたのも、この事じや、これが我が宗の大安心であります、サア箇様に我等も互は本來成佛で

其の儘の證の姿なりしと明らかめが付たならば世にこれ程喜ばしいことはありますまい法華經にある譬の通り、大長者の一人息子が幼き時迷見となつて四方に漂泊し、遂には我れは長者の相續人と云ふことをも打ち忘れ自ら橋の下席の上の非人じやと思ふて居つたのが、後に長者に救ひ上げられて汝は決して非人でも乞食でも無い、今日よりは大長者の若檀那であるぞと言はれた時の嬉しさはどんなでありましたらう、我等も亦た是の如く、凡夫外道惡人邪見人地獄の釜のゴビリ付と逆思ふて居つたのも今は昔の夢物語り、我れは其の儘の佛なりけりと解つたなら、汝は大長者の相續人であるぞと言はれた時の迷見よりも一層深い喜びが起らねばならぬてはありませんか、サア我れは其の儘の佛様じや、今日よりは天下晴れての證の姿ぞと安心が極つたならば月影の隈なく物を照すが如く佛様の妙用が起らねばならぬ、其の妙用を妙修と云ふのは是れが即ち發願利生と行持報恩との二箇條です、發願利生とは誓願を發して衆生を利益すると云ふことであるから、取りも直さず佛性常住の慈悲心の現はれたのである、衆生無邊なるが故に誓願も亦た無邊でなければならぬ、一人や二人や一國や一世界で

は無、一日や二日や一年や二年では無い、釋尊は「今此三界は皆な是れ我が有なり其の中の衆生は皆な是れ我が子なり」と仰せられて、三界六道は皆な己れが教化の領分じや其の中の衆生は盡く我が子であるとの御誓願じや、我等も亦た全宇宙を以て領分とし一切衆生を以て親子兄弟と爲して、七生や十生どころでは無い生き易り死り易り未來際を盡して利益を興へ慈悲を施し、諸共に無上菩提の樂しみを得様と云ふ大誓願を起さねばなりません、崇光天皇様が「鈴鹿川八十瀬の浪の立ちぬにも我が身の爲めの世をば祈らず」と御詠じ遊ばされしが如きは最も貴とさ發願利生の大御心と申すべきである、それから行持報恩の方は佛性常住の孝順心の現はれた姿であります、行持とはオユナヒタモツと云ふので我等も互か日々行ふべき事を行なひ持つべき事を持つと云ふことです、教育の御勅語に「爾臣民父母に孝に兄弟に友に夫婦相和し朋友相信じ」云々と御示し賜はりし御掟が正しく行持の標準であります、細かに分析すれば此中でも出家は出家の行持があり在家は在家の行持があり其の人々に依て皆な夫々の正しき行持が無ければならぬ、其の行持を以て御恩に報ずると云ふが行持報

恩である、佛教には四恩と云ふて四の恩を示してある、一には父母の御恩、二には國王の恩と申して即ち天皇陛下の御恩、三には衆生恩と云ふて世の中に生きとし生ける者に皆な御恩があると仰せられてある、四には三寶は恩と云ふて佛と法と僧との三つの御恩、以上四の御恩に報ゆるのが人間の道です、其の報恩の致方は外には無い、日々の正しき行持が取りも直さず御恩報謝であるぞよと云ふが行持報恩であります、發願利生も行持報恩も皆な本證の明月より出づる所の光明であるから、眞實大安心が決定すれば任運自然に衆生利益の誓願とも爲り御恩報謝の行持とも爲つて來るので、ツマル所は清らかなる大信心の上に現はれる天真の妙用でありますから、如何なる下流劣智の人でも一念信仰の心さえ堅固なれば、骨折れずに本證妙修圓滿具足の佛様になれるのであります、昔し天竺の室羅筏城と云ふ町に演若達多と申す婦人がありました、毎朝鏡に向つて御化粧をして居つた走しやが或る朝イツモの通り鏡に向つた處が、どうしたものか顔が映つて見へぬ、餘程疎相かしい者であつたと見へて早合點して、サア大變だイツも映

つる顔の鏡に影を現はさぬは、テツキリ昨夜盗賊が入て己の頭を盗んで行つたに違ひ無い、頭が無くつては弁も挿されぬ白粉も付られぬコリヤ此儘に捨て、は置かれぬと云ふので、表の方へ飛出して役所に駆け込み盗難の訴を致した、役人は呆れ返り、汝は何を云ふのじや其の通頭が有るては無いかと云ふと、演若達多は腹を立て、盗まれたものを有る杯ど仰しやるは貴下方も矢張泥棒の肩を持つて居らるゝに相違ないア、残念など、亦もや表へ飛び出し町中を駆け廻つて、誰か己の大切な頭を盗んだ者があゝる頭が無くては御辭儀をするにも差支へる、返して呉れやくと、丸ッ切狂亂の體て手も付られぬ、其の時一人の者が後から物をも言はず拳骨を振り上げて演若達多の頭を撲ぐり付けた、するとビツクリ驚頭ア、痛いと云ふて兩手を頭に上げたがニツコリ笑ふて、マアく宜かつた頭が此處に在つたはいと申したと云ふ話がある、佛性常住の佛の證は誰とても具へぬ者は無い、無明煩惱の爲めに自ら迷ふて頭が無いと思ひ込ひから、三界六道の間を駆け廻つて惡業の罪を重ねるのじや、一切衆生皆な佛性ありと云ふ佛の御教化に預かりて氣が付て見れば、ア、本證の頭は此處に在つたのじや

と云ふことが知れるじや、佛祖は心の外に法を求むるは外道であるぞと御戒め下されてあるに依て、我等も互は眞實至誠の心を以て自己を信するが佛法の一大事であります、

劉向の説苑と云ふ書物の中にこうゆふ話が出て居る、支那の有名なる聖人老子の師匠は常従と云ふ人であつた、此常従が死際に枕元に會つて居る門人の中から老子を喚び出して自分の口を大きく開いて、我が舌は存して居るかと問ふた、老子は恭しく存して居りますと答へた、重ねて齒は何うじやと問ふた、齒は缺けて多くは損んで居りますと答へた、其の時常従は舌の長へに存するは柔さが爲めてある、齒の早く缺けるは硬さが爲めてある、硬き物は他に逆ふて仕事に無理があるから傷れ易い柔かな物は佗に逆ふことなく唯く其の志を守るに依て身を全ふることが出来る、汝等若し道を行はんと欲したならば徒らに人を當てにするよりも銘々の口中に在る舌を以て御手本とせよと教訓して死なれた走でありませす、一寸而白い御話してす、成程我見の強い者は自ら敵を求め自ら仇を結びて遂には其の身をも亡ぼすに至るじや、志を守つて能

く柔順の徳を養ひ中庸に所謂「忠恕道を遠ること遠からず諸を己れに施して願はずんば亦た人に施す勿れ」とある様に孝順心慈悲心の徳を失なはざる時は其の道彌々明らかにして自から其の身を全ふするものです、殊に舌の如きは内は非常に強いが外は非常に柔かじやから、何んな物が入て来ても寛大の量で以て之れに接して居る、氷の様な冷たい物でも茶碗蒸の様な熱い物でも、砂糖でも醤油でも餅でも酒でも擇り嫌いはせぬ、盡く腹の上に載せ唾液を以て之を溶解し甘い味を醸して之を神経に傳へて喜ばせ、而して何んな甘い物でも好きな物でも自分の手元に留めては置かぬ、サツくと胃の腑に運んで全身に利益を與へて居るじや、舌の如きは實に是れ菩薩行の標本である、猶ほモウ一つ御心得を願はねばならぬことは本證妙修を別々に分けて御話しを致したのも、一通安心と起行との上に當てて申したので御開山の御教示の極意から見れば、修と證との二つは決して離るゝことが出来ないので、前の月の姿と月の光りとの譬へて十分御解りでもあらうが、モウ一つ譬へて見れば、證は蠟燭に點た火の如く修行は蠟燭の火の光りが室内を照して一切の暗を拂ふが如きものであります、又は

證は水の様なものて修行は波の様な譯合である、故に證の中には必ず修行があり修行の中には必ず證がある、我れは本來佛であると安心の決定した時其の安心の中にチャンと發願利生行持報恩の修行が籠つて居るじや、發願行持の修行の中には本來成佛と云ふ大安心の御證りがチャンと具はつて居るのであります、して見れば四大原則と云ふも畢竟して一個の大信心の外は無いて、我等互は幸にして斯かる有り難き御教に遇ひ奉りしは生々世々の好因縁、盲龜浮木にもまじたる身の仕合せではありませんか「潔よく月は心にすむものを知るこそ暗の晴るゝなりけれ」じやに依て此好因縁を歡び喜こんで急いで大信心を決定し、一時も早く修證具足の境界となり、以て佛敎信徒たるの素懐を成就せられんこと、切に希ふ所てござります、

古人の云く朝に道を聞て夕べに死すとも可なりと今ま學道の人も此の心あるべきなり、曠劫多生の間いくたびか徒らに生じ徒らに死せしに、まれに人目を受けてたまふ佛法にあへる時、此の身を度せずは何れの生にか此身を度せん、縦ひ身を惜み、たもちたりとも、かなふべからず、ついに捨て行く命を一日片時なりとも佛法の爲めに捨てたらんは永劫の樂因なるべし、

三 懺悔滅罪

第一席

これよりは我が宗の安心起行の標準たる修證義の四大原則の中の一番最初にある懺悔滅罪の一則を御話し致します、抑も人と云ふものは必ず一の希望を抱いて其の希望に向つて進んで参るものであります、若し希望の無い人であつたならば其の人は殆んど死人も同然て生きて甲斐なき者と云はねばならぬ、彼のナポレオンが「人に欲望ある緊要なるは猶ほ天地間に大氣あるを要するが如し」と云ふた通りです、教育家に爲りたい政治家に爲りたい財産家に爲りたいと云ふのも、又た公共的精神の上から起つて國家を治めたい天下の窮民を救ひたい世界に福音を傳へたいと云ふのも皆な希望の一つである、此點から申せば宗教と云ふものも、佛に成りたい神に成りたい極樂に往生したい天國に生を受けたいと願ふのであるから、人心必然の希望として現はれねばならぬこととあります、凡そ希望なるものは現在の位地や境遇に満足せぬ所から生ずる

のじゃ、貧乏で困るから金を儲けたい腹が減てならぬから何にか食べたい、馬鹿では困るから學問をせねばならぬ野蠻では困るから文明に進めねばならぬ、兵備が不充分であるから之を擴張せねばならぬ、實業が發達して居らぬから之を奨励せねばならぬ是れ皆な現状の不満足から起るのであります、唯だ希望の上にて自分一箇の爲めにするとな下國家の爲めにするると欲情の爲めにするると正義の爲めにするると、一時の爲めに圖ると永遠の爲めに圖るとの別があつて、小人とか君子とか悪人とか善人とか小さいとか大きいとか凡夫とか菩薩とか云ふ名が附くのであります、今我等互が佛法を信仰して成佛得脱を求め様と云ふ希望は如何なる動機から起つたものであらうぞと申すに、一部の迷信者はソツチ除けとして、是れは極めて正しい清らかな極めて神聖なる心から起つたものであるです、何故かと云ふに佛に作りたいと云ふのは決して名譽を求むる爲めでも無ければ利欲の爲めでも無い、熟々自身の境界を顧みるに、拂ひ難きは邪見の雲起り易きは煩惱の波じや、心の水は中々に澄み難く胸の空は容易には晴れやらず、四苦八苦の風は朝に夕に我が身を襲へ三毒五欲の火は寝ても癒ても我が

身を焦し、殆んど一日も安心の時節が無いではありませんか、酒を飲み色に愛て、一時の憂を忘れ花を眺め月を見て暫の苦しみを離れましても、朝顔の花の忽ちに萎むが如く夢の間に消えて仕舞へ、後に残るものは、歎樂極つて哀情多して、其の暫時の樂しみが却て苦しみと爲ることが多いじや、「いつまでか明けぬ暮れぬと管なまん身は限りあり事は盡せし」スツタモンダと浮世の波に揺れて居る中にイツの間にやら冥途の御迎がやつて来て否應なしに三塗の故里に御戻りじや、思へば淺間敷世の有様ではありませんか、銘々が自心の罪の深きこと行の穢れ多きこと此世の最と淺間敷事が十二分に解つて能々それを恐れ慎しみさえすれば社會の罪惡と云ふものは自然と無くなる譯です、傳染病の恐ろしいことが解らぬ中は到底十分なる豫防の注意は届かぬ筈のものです、其の淺間敷ことを自覺してア、恐ろしや耻かしやと氣の付いたのが佛法信心の動機となつたのであります、然らば成佛の曉には何をする積りかと云ふに、大慈大悲の誓願力に乗じて一切の衆生を濟度し各自の天職を勤め行ふて御國と父母と社會と佛との御恩を報ずるのが目的である、或る人が熱心に極樂往生を願ふて居るから、

拙者が貴下は極樂へ生れて何をする積りてありますと尋ねた處が、其の人の申すには極樂に參れば働かなくても甘い物が食べられ家を作らなくても美しい蓮の臺に寝て居られ遊びたい時は雲に乗て何處へでも出掛られる、年貢も取れず借金取も來ず見たい物が見られ聞きたい物が聞かれると云ふから一刻も早く行きたいと思ふとの挨拶であつた、どうてせう、こんな了簡て極樂へ行かれるならば、極樂と云ふ御淨土は丸てヌラクラ者や卑しん坊の集合所じや、往生淨土の目的はそんな譯のものでは無い、彼の母親が小兒を育てる時の艱難はどんなてありません、小兒の爲めには穢い思ひもせねばならず夜も碌々安心して眠ることも出来ぬ、其の骨折は一通りや二通りでは無い、加之小兒の爲めには心を苦しめることも罪を造ることも決して少なくは無い、紀の貫之の歌にも「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に迷ひぬるかな」とありますじや、併し乍ら小兒の爲めには如何程艱難しても慈愛深き母親は決してそれを艱難とは思はぬ其の艱難こそ母親の身に取りては無上の樂しみなのである、母親は小兒の爲めの艱難を以て我が身に取りての極樂淨土の樂しみとして居るのである、市原の王は小兒の少

なきを悲しんで「言とはぬ木すら妹と兄ありといふを唯だ一人子にあるがくるし」と
 と詠み、山上の憶良は「銀も黄金も玉も何かせん勝れる寶子に如かめやも」と歌へ、有
 名なる赤染衛門は其の子の大江の擧周が和泉の守の任を果して後大病に爲つた時、住
 吉明神の崇じやと思ふて「かはらんと祈る命は惜しからてさても別れん事を悲しき」と
 と詠んで己れの命を以て我が子の身代に立たうと願ふたと云ふことじや、これと同じ
 ことと成佛した上の仕事は衆生濟度と御恩報謝の二つの外は無、此二つを務むるの
 を最上の樂しみと感ずる様でなければ佛様とは申されぬじや、佛法信仰は箇様なる動
 機より出たものじやに依て世の中は是れ程清き美しき神聖なる希望は無いと云ふても
 決して過稱ではありますまいと思ふのであります、
 御話しが後に戻りますが前に述べた通り我等が互の心は多くは煩惱の穢を以て充され
 我等が互の身と口とは動もすれば罪過を造るの道具に使はれて居る、而して人の命の
 無常なることは草の葉の露よりも脆く我が身に逼まる種々の苦しみは秋の空に漲る
 雲の様に晴間と云ふものは少ないじや、是れ皆な前々の世から造り置いた煩惱と業障

との作業である、故にア、思ひば、淺間敷身の上哉と心の底から慚愧して、それと
 同時に佛様の御慈悲の徳と御誓願の力とを少しの疑をも挿まず深く信仰し其の
 御前に於て今迄の罪過の御詫を爲て御濟度を願ふのが即ち懺悔であります、懺悔と云
 ふ詞は天竺の語では懺摩と申すを支那では悔過と翻譯してある、悔過とは過を悔える
 と云ふことです、今は天竺の原語の中の懺の字と翻譯語の中の悔の字とを合せて懺悔
 と云ふ熟語を定めたのであります、一口に申せば、ア、我等こそは無始劫來よりして
 無量の煩惱を起し種々の惡業を重ね、三時の業報力に依つて現在の身を受け罪過より
 罪過を生み冥きより冥きに沈むことの耻かしさよ、それが爲めに佛にも神にも變らぬ
 心の寶を持ち乍ら我れと我が手で六道八難の巷に彷徨て居つたのである、將來は深く
 自ら慎んで煩惱の穢を清よめ惡業の塵を拂ひ替て成佛の素懷を遂げねば成らぬ、あは
 れ願くは佛祖我れを憐れみ玉ひて此罪業の衆生を御助け下されと懺悔するのでありま
 す、韓退之も「人其の過を知らざるを憂ふ既に之を知りて改むること能はず是れ勇な
 きなり」とも云ひ易經には「善を見ては遷り過あれば改む」とあるが如く、徹底己れ

の非を悔えて慚愧の心湧き出づれば其の人は最早精神的に奇麗な身に生れ易つた様な
ものです、昨日の悪人も今日は善人と爲り昔の凡夫も今は佛じやから、罪惡の根本は
サラリと消滅して最も美しき境界に作り了つたのである、之を懺悔滅罪と申したも
てあります、

それであるから修證義の第七節には「佛祖憐みの餘り廣大の慈門を開き置けり是れ一
切衆生を證入せしめんが爲なり、人天誰が入ざらん、彼の三時の惡業報必ず感ずべし
と雖も懺悔するが如きは重さを轉じて輕受せしむ又滅罪清淨ならしむるなり」と仰せ
られて、我等の罪を滅して清淨なる境界と成ることは懺悔の一門に依るの外は無い、
是れ則ち佛様や祖師方の廣大無邊なる御慈悲の力より與へられたる御光りである、維
や三時業の報に依て現在が未來に必ず受くべき罪がありましたも、懺悔の力は能く其
の罪を軽くするのみで無く、全然消滅して仕舞ふことも出来るぞとの御教訓じや、第八
節には「然れば誠心を専らにして前佛に懺悔すべし」とあつて懺悔するには少して
も心に虚偽があつてはならぬ、誠心即ち真心より出た懺悔でなければ役に立たぬ、真

心より出た懺悔心は自から佛様の御慈悲の御心と感應するから罪障消滅は疑ないて
す、又た世の中の實際から見ても一人たりとも悪い者があれば多くの人に迄迷惑を及
ぼすものじやが、其の代り一人でも眞實善心に立戻る時は多くの人に如何程幸福と安
心とを與へるか知れませぬじや、故に「淨信一現すると自他同じく轉ぜらるゝなり」
て自分斗が善人に轉ずるのでは無く他人に迄自から感化を與へて善に進ましむる様に
なります、そののみならず「其利益普ねく情非情に蒙らしむ」と仰せられて、他人斗で
なく非情なる草木に迄も其の利益が及ぼさるゝじや、茲に一軒の家がありとせんに、
其の家なるものは材木や壁土や石や瓦を以て組織つたもので無論非情と云ふで情識の
無い物である、家の庭とても石や植木で造つた物で是れも非情じや、サア非情の物で
はあるが、其の家の主人や家族が若し悪人ならばどうであらう、あの家は恐い家じや
アスコの庭に足踏するのは氣味が悪いと申すてせう、主人や家族の心懸が悪ければ家
の疊や敷居から庭の植木までかトンダ御相伴を食はねばならぬ、之に反して若し主人
や家族の心が善心に立返りますると、モ一あの家は大丈夫だアスコの庭に入つても安

心だからチト遊びにても参ろうかと云ふ様な鹽梅になるてはありませんか、傀儡師首に懸けたる人形箱鬼を出さうと佛出さうと「心一つの使ひ方で地獄にも極樂にもなるのでございませす、

釋尊より十八代の祖師伽耶舍多尊者が御師匠さんの十七祖僧伽難提尊者の御傍に御出なされた時、或る日風が吹いて本堂の鈴をチリ、ンと鳴らした、スルト御師匠さんがアレは風が鳴るのか鈴が鳴るのかと御問へ遊ばされたじや、なんても無い御言の様じやが非常に奥深い意味を含んで居るのです、其の時伽耶舍多尊者は風の鳴るにも非らず鈴の鳴るにも非ず我が心の鳴るのでございませすと御答になつたと申す尊とい御話しがあります、此御話しを能々噛みしめて味ふて戴きたいものである、宇宙の本體には迷ひの悟りのと云ふ音沙汰は無じや、苦しみと聞くも樂しみと聞くもツマル所は一心の響てあります、「心こそ心まよはす心なれ心に心心ゆるすな」てあるから常に一心の動く源に用心して地獄や鬼を造らぬ様にせねばなりません、中阿含經の中に七事不齊と云ふて人の世の中に七通りの不平均な事があるとして其の因縁を示されてある、一

には壽命の上に長壽の者と短命の者とがある、長壽は慈悲があつて物の命を殺さなんだ功德で短命は之れに反して殺生した報である、二には身體の上に就て、生來丈夫な者は衆生を燒まさざりし徳で弱者は衆生を苦しめた報じやとある、三には容貌の上で、相貌の美しい者は堪忍の徳で醜い者は腹を立た報じやとある、四には徳の上で、人の敬ひを受くる者は嫉妬心の無かりし徳で人に輕蔑されるは嫉み妬みをした報じやとある、五には身分の上で、尊とく生るゝ者は謙遜して人に向て高ぶらなんだ徳で卑い者は高慢した報じやとある、六には財産の上で、身代の好い者は布施した徳で貧乏は吝嗇の報じやとある、七には知識の上で、聰明な者は智慧ある人に近づいて勉強した徳で馬鹿な者は悪い友達を好んで怠けた報じやとある、これはホンの一通り因果の有様を呑込み易い様に御示し下されたのではあるが、此御示しに依て萬事を推し測つて見ることが出來ます、世の中に有りと有らぬ一切萬象は皆な自心現の影像と申して我が心の影法師じや、年始狀の様なものて、恭賀新年と書いて手紙を出せば向ふからも恭賀新年としてよこして呉れる、此方て新年御芽出度うと言へば向ふても新年御芽

出度うと挨拶する、此方て笑ひば向ふも笑ひ此方て腹を立てると向ふても變な顔をするてす、夫故此方から施をして人を恵めば人も亦た親切を盡して恵んで呉れる、恵み手の澤山あるのが富貴の入の子供達じや、貧乏人には恵み手が無い、乞食の子にてもなると親てさへ着物一枚も満足に恵んては呉れぬじや、人に頭を低ければ人にも低げられる者と爲る、威張散らかすと人に威張られる者とならねばならぬ道理です、實にや「よしあしのうつる心の水鏡よく見れば我が姿なり」じや、この道理が解りさえすれば縦ひ如何程苦しみがあるうと不平があらうと、人をも恨みず世をも恨みず唯だ我が心に立返つて、煩惱業障の最も深きことを悲しみ佛前に就て無始劫來の罪障を懺悔するが一大事ではありませんか、

經律異相の中には「前心惡を作すは雲の月を覆ふが如く後心善を起すは炬の暗を消するが如し」と云ふ御文があります、これは我等が以前の煩惱の爲めに悪い事を爲たのは丁度村雲が起つて月の光りを覆へ藏した様なものである、ア、惡かつたと懺悔して善心を起すのは炬の火が夜路の暗を消す様なものぞとの御示しです、二十日も三十日

もかゝつて山の如くに積つた雪でも太陽の光りに逢へば、其の御光りと地中から出る熱氣とか合體して瞬く間に解けるものじや、無始劫より以來積みに積んだる罪過でも至心懺悔の其の時は、心の地中より出づる悔悟の熱氣と佛の御慈悲の光りとが妙合して、一刹那の間にも直様奇麗サツパリと消滅して仕舞ふ、所謂「照すなる三世の佛の朝日影降る雪よりも罪や消ゆらん」じや、こゝを第九節には「願くは我れ設ひ過去の惡業多く重なりて障道の因縁ありとも、佛道に因りて得道せりし諸佛諸祖我れを憐みて業累を解脱せしめ學道障り無からしめ云云」と御示し下されたのである、次の文には「佛祖の往昔は我等なり吾等が當來は佛祖ならん」とありまして佛様や菩薩方でも元とは矢張我等と同じ様な罪障深き身てあらせられたのじや、懺悔心の御力が堅固てあらせられたに依て今は萬徳圓滿の御身と御成り遊ばされたてす、我等迎も同じこと、懺悔の慈門に入りさえすれば一足飛に受戒入位の身となりて開路を照す炬の光りを其の身に放つことになりませるじや、

天保年間頃越後の國の今は西蒲原郡の中になつて居る矢島村に田中伊八と云ふ人が

ありました、性來非常の大酒呑て一日に二升宛はかゝさぬと云ふので人は酒頭童子と云ふ字を名けて酒頭の伊八と呼んだ走です、そのみならず中々公事ッポイ方て随分威心の出来ぬ人であつたらしい、或る時同村の者と事を構へて代官所に訴を起した其の代官所の裏手に座敷があつて床間の上に大きな額が掛けて在つた、伊八は不圖之を見ますと其の額には一人の短を道ふこと勿れ人の長を忌むこと勿れ人に施すも慎んで念ふこと勿れ施を受けては忘るゝこと勿れ世譽慕ふに足らず」と云ふ文が書いてありました、これは人の悪いことを道ふなよ人の善きことを嫉むなよ、人に物を施しても思にさせるなよ、人より恩を受けたならば忘るゝなよ人の立身出世杯を羨まずに自ら務めて其の道を守れよと云ふ意味の文章じゃ、伊八は之を見て宿善の催ふす所か翻然として懺悔の念を起したのです、そこで直ちに訴訟の願下をしまして家に歸り、それからと云ふものは丸て生れ易つた様な大善人と爲り、生涯慈善事業に身を委ねた位であつた、近處に鎧瀉と申す大きな瀉があつて毎年水害を被ひる村が百餘ヶ村もあるのて之を憂へて獨力水利を通じて水田の開墾を爲さんと企てたり、又は天保八年の大飢

饑の折は家財諸道具は申すに及ばず衣類から帯迄も賣り拂つて救助に盡力しました、酒屋を商賣としては居つたが實に道徳堅固であつて書を能くかいて雅號を墨池軒と稱した、僅が四十八歳で死にましたが其の一代の徳行は實に百代の模範とも謂つべき程でありしと云ふことです、是れ等は倫理的懺悔とても申しませうか、普通倫理の上から申しても、己れの非を知り過を悔えて能く之を改むるは實に人間の美徳でありまして、ユニー人なれば彼の田中伊八の如く日に新たに月に新たに益々道に進み徳を輝すことは疑ないです、況てや我が佛の教ひ玉ふ所の懺悔は、無始劫來の罪障を根本的に消滅して、此身此儘が受戒入位の道に進んで佛果菩提を莊嚴し、利生報恩の徳を輝かして永劫不退の樂しみを得るじやに依て、我等も互は深く難値難遇の念に住して急ぎに急いで此廣大の慈門に御入り下されたさものでございます、

第二席

前席に於て懺悔と云ふことの大畧を御話し致しましたから、引續き只今は懺悔の法則

に關することと懺悔の御文のことを陳べ様と思ひます、懺悔の法則には二儀兩懺と云ふて二々通りの儀式と二々通りの懺悔があります、先づ儀式の上に小乗の法と大乘の法とがある、小乗の法は人前懺悔と申して自分の作つた罪過を人の前で懺悔するので丁度小供が悪い事をした時親の前で謝る様な工合なのです、是れは自分の知つて居る罪丈しか懺悔が出来ぬ、我等の罪障は幾億萬劫以前から造りに造つて來たのじやから現在一世の罪障は實に些細なものです、現在一世の罪障の中でも覺へて居るものよりは覺へて居ぬ方が却て澤山あります、夫故人間同士で懺悔する坏と云ふことは倫理上に所謂過を悔え善に遷ると云ふ點から見れば結好には相違ないが、我が罪障の總てを根本的に消滅し盡して佛果菩提を成就しようと思ふ懺悔には成り兼ねます、次に大乘の儀式には色々の教へ方があります、第一に作法懺と云ふがある、是れは七日七夜の間始終身と口と意との三業を淨らかにして所謂精進潔齋して佛前に懺悔するので次に取相懺と云ふのがある、是れは靜に坐つて、懺悔の行をして文殊菩薩や普賢菩薩が其に前の姿を現はして御證明下さる迄坐はつて居るのです、菩薩の御姿が見へれば

懺悔が成就したのですと云ふ仕方です、それから無生懺と云ふがある、是れは向ふの佛様を當てにせず自ら罪の本性は元來無生で實體が無い、普賢觀經に「一切の業障海は皆な妄想より生ず若し人懺悔せんと欲せば端坐して實相を觀せよ衆罪は草露の如く慧日能く消除す」とあるが如く、罪と云ふものは妄念より起つたもの、其の妄念は本來清淨なる心の水の上にポツリと現はれた泡の如くて、これを妄念の實體じやと云ふものは無い、即ち本來空である、罪障本と空なれば我が身も空じや懺悔する人も懺悔すべき罪も同じく實體は無いものじやと觀念して、罪障の束縛を解脱するのであります此他にも種々の教へがありますれと今は畧して置きます、又た二々通りの懺悔と申すは事懺と理懺とです、事懺と云ふは事相の上に現はしたる儀式に依て懺悔するので即ち前の作法懺や取相懺の類であります、理懺と云ふは事相に依らず理を觀じて懺悔するので即ち無生懺の如きを云ふのであります、右等の外に觀音懺法華懺沙と云ふ懺悔法がある、我が宗門では地方に依て能く觀音懺法は行はれて居ります、是れは三世十方に在ます佛法僧の三寶を拜請して供養禮拜して罪障を懺悔する法式です、それか

ら淳和天皇の天長七年十二月に始めて宮中に行はれたと云ふ佛名會杯も矢張懺悔式で
す、是れは諸佛集功德華經に御説き下されてある過去の千佛現在の千佛未來の千佛此
三千體ある三世の諸佛の御名を唱へて御拜を爲し、一年中造つた罪を滅ぼすと云ふ法
會である、佛名を唱へ禮拜すれば身口意業を淨めて業障を消滅すると云ふことは藥王
藥上觀經等に明文があります、淳和天皇様は畏くも天下一般に對して朝野を諭せず
盡く唱名禮拜して至心懺悔せよとの御勅令を下されたじや、此佛名會は其の後五六
百年間も宮中に行はせられて在つたと申すことです、去れば太政大臣藤原良經公の「一
年のはかなき夢やさめぬらん三世の佛の鐘の響きに」と云ふ歌や、紀の貫之の「年中
に積みたる罪はかさくらし降る白雪と共に消えなん」と云ふ歌杯澤山遺つて居ります、
我が宗の授戒會と申す御戒法を相傳する法會は前後一周間であるが、戒法相續の濟む
迄は矢張南無三世諸佛と唱へて御拜をするのが第一の加行となつて居る、是れ取りも
直さず佛名會であります、此授戒會の五日目の晩には特別に懺悔の道場を設けて戒弟
が一人々々に道場に入て戒師の前で懺悔を致しますが、是れを室内直傳の法で最も有

り難い儀式ではありませんが、普通から云へば式文にも「二儀兩懺ありと雖も先佛の承
受し玉ふ所の懺悔の文あり罪障悉く消滅す」とあつて二儀だの兩懺だの種々の儀式
作法があろうとも、懺悔の大精神に至つては同一じやに依て、我が宗では佛祖の御傳
授に基づき唯だ一心に懺悔の御文を唱へて、佛の御前に懺悔すれば罪障消滅疑ない
ぞよと教へ下されてあります、

其の懺悔の御文は、修證義第十節にある「我昔所造諸惡業皆由無始貪瞋痴、從身口意
之所生一切我今皆懺悔」と云ふのじや、此御文は華嚴經の普賢行願品に出て居つて古
來より三世諸佛御正傳の御文じやと申し傳へて居る、此意味を簡單に申しますれば、
我等が過去の昔より造りし所の諸の惡しき作業は、皆な始めも知れぬ以前より起し
來りし食欲と云ふムサボル心、瞋恚と云ふイカリハラダツ心、愚癡と云ふ物事の明ら
めの着かぬ心、此三毒の作業に由るのである、而して此三毒の煩惱は身と口と意との三
業の作用に依て種々の罪過を生じたのであれば、現在我等の身も果報も位地も境遇も
苦しきも悲しきも皆な煩惱と惡業の招ぐ所で、今更誰を恨まん様も無く誰を咎めん様

も無い、思ひばく耻かしき淺間敷身の上であります、只今と云ふ只今こそ佛の御慈悲を信じ奉り佛の御誓願に随ひ奉り、一切合切皆々盡く懺悔仕ります、何卒く我等を憐れみ玉へて直ちに御濟度を願ひ上げ奉りますと云ふ詞になるのであります、御文は少か七言四句であるが懺悔の精神は露程も残る所なく述べ盡されて居る、眞實心を以て佛に向ひ奉り心を傾け信仰を捧げて此御文を唱ひますれば百萬陀羅の口上よりも行届いた完全なる懺悔が出来ます、次の御文には「此の如く懺悔すれば必ず佛祖の冥助あるなり心念身儀發露白佛すべし發露の力罪根をして鎖鎖せしむるなり」とありて、筒様に懺悔する時は自から佛様の御助けが得らるゝぞよ、心念と云ふて心の中ても深く懺悔して餘念を雜へるなよ、身儀と云ふて身の儀式の上でも徹底懺悔の姿になり切て仕舞よ、發露白佛と云ふは口に發して言ひ露はし蘊ます佛に申し上げると云ふことじやから、一切我今皆懺悔と口に發して無始劫來の罪障を蘊ます懺悔し奉れよ、左すれば發露懺悔の功德力に依て罪障の根本がサラリと鎖鎖して、身も口も意も三業齊しく雲を離れし月よりも清く泥を出たる蓮よりも鮮かになるぞよとの御示してす、

「しばしこそ人の心に濁るともすまでやむべき法の水かは」一時の迷に依り濁り切つた心でも懺悔の慈門に入りさえすれば忽ち本來清淨なる心の水が美はしく現はれて來る、「曇りなき三世の佛の影々も心の水にすまぬ日ぞなき」と云ふ身の上になりますのでござります、

然らば本來清淨なる心の水を濁らす所の食瞋癡三毒煩惱とは何んなものかと云ふことをザツと御話しせねばならぬ、初めの貪欲とは自分の氣に入つた順境に對して漫りに欲しがる煩惱です、之を五欲とも云ふてある、五欲とは一には金錢衣類土地家屋其の他所有財物に就て貪ぼり求むる欲、二には男女の色情に耽ける欲、三には食物の上で足ることを知らぬ欲、四には徒らに名譽を貪ぼる欲、五には睡眠を貪ぼりて寐て斗り居たがる欲じや、財を求め色を喜び食を取り名譽を重んじ時に睡眠して心身を休養するは人間の本性より出づるもので之を絶對的に捨てよと云ふのでは無い、唯だ貪と云ふ字が付くから悪いのです、貪と云ふは取るべからざるを取り求むべからざるを求むること、義理にも違ひ人情にも背いて唯だ利己一點張りから出た私最見のこと

です、凡そ人間には必らず守るべき一定の道のあること、丁度汽車に軌道がある様な
のです、二本の軌道に依ればこそ百里千里の遠きも滞り無く進行して其の目的地に達
することが出来る、若し少しでも之を履み外したならば汽車其の物が毀れる斗りか多
くの人に迄損害を興ふるです、人間も亦た必らず守るべき二本の軌道がある所謂道理
と人情の二ツじや、此軌道を守つてこそ自他平等に利益して人生の道中も何の滞りも
無く進歩向上して終に其の目的を達するに至るのである、道理と人情を守りさえすれ
ば其の人の得た財は正義の資で其の人の愛する色は夫婦の大倫じや、食物も名譽も之
れに準じて知るが宜い、睡眠杯も貪と云ふのが付くと「朝寐坊、夜寐の好きなき宵寐坊時
々起きて居眠りをする」と云ふ様に、なまけ者に爲る斗りか却て身體に大害を招くに
至るじや、此貪欲は三毒の中で一番能く働く奴で社會の罪惡も八分通りは此奴の仕業
である、「十惡をならべて置てながむれば貪欲殿の丈の高さよ」じや、次に瞋恚とは短
氣を起したり腹を立てたり人を憎んだり恨んだり嫉んだり妬んだりする煩惱です、是
れも道理と人情との軌道を守つて、「おのれやれ岩をも透す桑の弓」と云ふ様に出て來

れば勇とも爲り義とも爲り天晴人間の美德であるが、大概は自分勝手と云ふ奴から來
るので之れが爲めに喧嘩口論人殺し杯と云ふ罪惡をも犯せば家庭や社會の平和を破つ
たりすることが幾程あるか知れぬです、天皇赫として怒り玉へ風詔一下百萬の貌獄立
處に動き、進んで清韓の妖氣を拂ひ以て東洋の平和を開く杯は決して瞋恚では無い、
是れ正しく大慈悲心の運用である、次に愚癡とは物の道理に迷ふたり、又た道理を知
りつゝも覺悟が出来なんだり、役にも立たぬ事をクヨクヨ思ふて自ら心を苦しめたり、
疑の雲に蔽はれて眞の信仰を失ふたりするの類じや、是れは確固たる智慧の力に乏
しき所より起る煩惱である、此愚癡よりして貪欲や瞋恚を起すことが澤山あるから、
愚癡と云ふものは煩惱の親爺で瞋恚は伴頭で貪欲は手代の様なものです、ドウモ親爺
が愚癡で番頭が疥癬で手代が慾張、これでは手の付けられたものには無いです、承陽大
師は「貪慾なからんと思はゞ先づ須らく吾我を離るべきなり吾我を離るゝには無常を
觀する是れ第一の用心なり」と仰せになつて、深く我が命の無常なることを觀念して
「オレガ」我がと云ふ我が儘根性を打ち捨てさへすれば自から貪慾を制することが出

来る、又た「直饒ひ我を殺さんとしたる人なりとも、眞實の道を聽んとして誠との心を以て問はゞ怨心をわすれて是が爲に説くべきなり」と御示し下されて、我れを殺さうとした悪人でも誠の心を以て道を聞かうとしたならば恨みの念を忘れて教化せよとの御教訓です、又た「參學のともがら菩提心をささとして佛祖の洪恩を報ずべくはすみやかに諸因諸果をあきらむべし」とも御教へ下されて、因果の道理を明らむるのが愚癡を離れて正しき智識を開く源であります、

支那の有名なる釋の道安法師の御弟子に法遇法師と申す方がありました、江陵の長安寺に住して専ら御經の講釋をして居られた、門下に投じて教を受くる弟子が四百餘人もあつたと申すことです、或る時一人の弟子が禁制の酒を飲んだ、酒と云ふものは如何程内所で飲ても直様看版に現はれて藏すことの出来ぬものじや、法遇法師は相當の警誠を加へて其の儘御許しになりました、然るに其の事が遠方に居られる師匠の道安法師が聞き込で一箇の包み物を贈られた、法遇法師は謹んで封を開いて見ると竹の筒が人である、筒の中には荆杖と云ふ罪人を撃く竹で作つた杖の様なものが入つて居る、

そこで御考へなされた、ア、是れは此程酒を飲んで無禮をした者があつたが、これと云ふも手の教へが屈かぬからじやと云ふ御思召して之を贈り玉ふたのである、なにからなに迄の御親切最と有り難きことかなと涙を流して推し戴き、直ちに椎を鳴らして合山の弟子を御集めなされ、自ら彼の竹筒の前に香を焼いて御拜を遊ばし、維那と申す衆僧の頭役を呼び出して、御身は御苦勞ながら我が師道安法師に代り此杖を以て予が身を撃て呉れよと命ぜられた、如何に御命令とは言ひ乍ら門弟の身としてドウマア杖が當てられませう何卒御免下されと云ふて御辭退したが、法遇法師の中さるゝには「は決して御身が予を撃つに非ず即ち師道安法師の御折檻であるから是非く頼むとの御語、今は辭するにも辭せられず總身汗を絞り震へる手に杖を執り心の中に手を合せ乍ら三度法遇法師の背を撃きました、法師は泣き崩るゝ斗りに涙を洒ぎ、ア、我れ罪障深くして道徳未だ具はらず弟子を教育するに其の掟全く行はれぬ、是れ皆な己の業報である、我が師は大慈大悲を以て今ま此咎を賜へて我が身を撃ち、我れをして益々其の罪過の淺間敷ことを知らしめ玉ふ、此大恩何れの日か報ずべきやと云ふて、師

匠さんの御座る方に向つて三拜九拜せられました、之を見聞する者餘りの貴とさ一同袖を絞つた走です、これより後は四百餘人の弟子達一人として法を犯す者なく能く治まつた斗りか、天下の道俗翕然として其の徳に靡いたと云ふこととてあります、諸君いかゞでござります、今の世の中にも法過法師の様に、己れを輕んじ道と重んじ、身を忘れて徳を磨く方があつたならば、天下風俗の紊亂、道徳の衰頹も未だ必ずしも憂ふるに及ぶまいと思ひます、教育家にして是の如くならば必ずや學校の風紀も整ふに相違ない、政治家にして是の如くならば國家の政令も必ずや行はれるに相違ないと思ひます、我等も眞實懺悔の念が現はれたならば法過法師の如き麗しき志が自然と生れて來ねばならぬ、菅原の道真公の如きは佛教の大信仰者であつたが、無實の御災難にて筑紫へ左遷せられ玉ひし折四國へ御立寄りなされて、或る驛長に「驛長驚くこと勿れ時の變じ改まるを一策一落是れ春秋」人の盛衰花の榮枯皆な是れ定まる因縁ぞやと御示し遊ばされた、御臨終の前には「病は衰老を追ふて到り愁は謫居を趁ふて來る此賊逃るゝに處なし觀音念すること一廻」と云ふ偈を御作りになつた、無常の賊

は常に此身を襲ふて止まぬ、此時に當りては唯だ觀音菩薩の御慈悲を念ずるより外は無いと云ふので、皆な是れ懺悔の眞心より仰せられたのである、我等は唯だく因縁の道理と佛様の御慈悲とを信じさへすれば其の手に自然と清淨なる懺悔の心が現はれて來るので、懺悔の心が現はるれば我等の境界は恰も大清潔法を施行した機になるから、佛祖正傳の御戒法はソツクリ此身に御相續、其時よりして三世諸佛の御仲間入、これを安心成佛の正門でござります、

若し能く法の如く懺悔せば、有らゆる煩惱悉く皆除く、懺悔は能く三界の罪を出づ、懺悔は能く菩提の華を開く、懺悔は能く佛の大圓鏡を見る、懺悔は能く寶所に至る (心地觀經)
行者かならず邪見なることなかれ、いかなるか邪見、いかなるか正見と、かたちをつくすまで修習すべし、まづ因果を授け無し、佛法僧を毀謗し、三世おとび解脱を授け無する、ともにこれ邪見なり、(承陽大師)
實に本來心を識得せんとき、尙ほ死此生彼差異なし、何に況や罪惡善根の別あらんや、之に依て四大五蘊共に存せず、皮肉骨髓木より解脱す、 (弘徳開明國師)

四 受戒入位

第一席

此席に於きましては我等互が安心成佛の基礎とする曹洞宗の大眼目たる受戒入位の法門を御話しに及ぶ心得であります、受戒入位とは戒法を受けて佛の位に入ると云ふので、是れは釋尊が梵網戒經に「衆生佛戒を受くければ即ち諸佛の位に入る位大覺に同よし已る眞に是れ諸佛の子なり」と仰せられた、乃ち我等衆生は佛の御戒法を受け奉りさえすれば此身此儘三世諸佛に位に御仲間入じや、我等の位が既に大覺圓成の佛と同等になるとすれば取りも直さず佛様の御子であつて、切ても切られぬ親子であるぞと云ふ御語を約めて受戒入位と申したものであります、此事は曹洞宗旨の大綱の御話しの時一通り演べて置きましたから成るべく重複せぬ様に致す考であるに依て彼此思ひ合せて御了解を願ひたいです、

佛教では戒定慧の三學と云ふことを立てる、戒は防非止惡と申して非道を防ぎて惡い

事を止めさせると云ふ佛教の掟である、定は禪定で坐禪をして心を治め煩惱を離るゝことである、慧は智慧で眞理を研究して智識を開くことである、此三通りを標準として佛法を學ぶに依て三學と申したのじや、して見れば戒法と云ふものは三學の一部分に過ぎぬ様じやが、我が宗相傳の御戒法は大に趣が異ふので即ち戒定慧の三學を總合した上に現はれた戒法であります、故に此戒法の中には三學共に具はつて居るじや、普通佛教の上から云へば大乘にも小乘にも皆な夫々の戒法があつて夫れは、非常に廣大なものです、大乘戒の根本とも謂つべき梵網戒經には十重戒四十八輕戒と説いて、重罪を戒められたものが十箇條輕罪を戒められたものが四十八箇條ある、其の他の經律には五戒八戒十戒二百五十戒三百五十戒五百戒數限りも無い程じや、此中には出家丈の戒もあり在家丈の戒もあり兩方に通ずる戒もある、此等の戒律を研究するには律學と云ふて一の専門學科になつて居る位である、然るに我が宗相傳の御戒法は總體で十六箇條じや、即ち三歸戒と三聚淨戒と十重禁戒との十六條である、佛様も我等も出家も在家も等しく十六箇條で増しも減りも無いです、承陽大師は「この受戒の儀必ず

佛祖正傳せり、丹霞天然藥山の高沙彌等同じく受持し來れり、比丘戒を受けざる祖師あれども此佛祖正傳菩薩戒を受けざる祖師未だあらず」と仰せられて、釋尊直傳の法じや、之を佛祖正傳菩薩の大戒と稱して居る、菩薩と行ふは大心の士即ち大きな心のある人と云ふことです、大きな心と云ふは平等博愛の心を以て實行を永遠に期する人のことです、佛の御戒法を相傳した上は此世はろか生々世々を盡して普ねく一切の衆生を利益せんとの大誓願を立てた御方、これが眞の佛弟子である、我等も御戒法を受けて是の如き大誓願を起せば取りも直さず菩薩の境界じや、左すれば此御戒法を受けた者が佛様で受けぬ者は逆も佛様の御仲間入は出來ぬ、御戒法は實に佛の御命である佛の御心である、斯かる貴とき御戒法を相傳し奉る我等こそは此世に比類なき幸福者と申さねばなりません、

十六箇條の最初は三歸戒と云ふ、南無歸依佛南無歸依法南無歸依僧の三箇條です、至心懺悔の手に於て罪障を消滅し身口意の三業が清淨潔白になつたならば、必ず先づ受け奉るべきは此三歸戒であります、故に修證義の十一節には「次には深く佛法僧の

三寶を敬ひたてまつるべし生を易へ身を易へても三寶を供養し敬ひたてまつらんことを願ふべし、西天東土佛祖正傳する所は恭敬佛法僧なり」と御示し下されたじや、佛と云ふは梵語で委くは佛陀耶と申す、支那では覺者又は智者と翻譯してある、覺の開けた智慧の明らかな御方と云ふことじや、それを日本ではホトケと申し上げることに就て昔から種々な解釋がある、人皇二十九代欽明帝の十三年冬十月百濟の聖明王より始めて、金銅の佛像や幡蓋や經論を献上せられた時、其の佛像を摩て見るに温か味があつた、そして之れを「ホトボリケ」があると申したので展轉してホトケと稱するに至つたと云ふ訝しな説がある、又た其の佛像をホドキと名くる素焼の器に入れて献上した所からホトケと稱したと云ふ説もある、契仲阿闍梨の説は佛陀を浮屠とも云ふ浮屠は「ホト」とも讀む「ケ」は木である貴人を木に譬へ賤しい者を草に譬へること日本記古事記等に例がある、乃ち梵語の「フト」に尊崇の詞「ケ」を加へてホトケと稱したのじやと云ふである、又た天桂禪師の歌に「ほとけとは誰が結びけん白糸の賤がをだ巻くりかへしみよ」とあるが如く「ホトケ」は「ホドケル」の意味で解脱の義である、

我等は煩惱と業障の繩に縛られて自由を得ぬ、其の繩目が「オドケ」で解脱を得られたのが佛様じやと云ふ説もある、其の説は何れにもせは、佛様と申すは一切の煩惱を断じ一切の苦痛を離れ、無限の智慧と、無限の慈悲とを具有し玉ひ以て宇宙の眞理を開き顯はし一切衆生を平等に御濟度下さるゝ御方であるに依て、我等は第一に御歸依せねばならぬ、之を歸依佛の戒と云ふのである、次に法は梵語では達磨耶と申すのを法とも軌持とも譯してある、法はノリ手本と云ふこと軌持は軌則を守り持つと云ふことです、火は熱し風は動き水は濕ひ地は堅しと云ふが如きは古今に通じて變ると云ふこととは無い、柳は緑花は紅松は直く棘は曲れり皆な一定の軌道をチャーンと持つて居る、凡夫量見て造つたものは時に従つて變更するが、自然の妙理には變動が無い、變動が無いからノリ手本となるじや、佛の御説さ下された道は即ち天地の公道、宇宙の眞理であるから時移り人換るとも佛法には更に變動が無いから法と云ふたものです、十六條の戒法も矢張法であるから萬世不變じや、我等は此法の力に依て成佛も出來安心も決定するのであるから誠を傾けて御歸依をせねばならぬ、之を歸依法の戒と云ふので

ある、次に僧は梵語で委くは僧伽耶と申すのを和合衆と譯してある、大勢が仲善くして居ると云ふ意味じや、乃ち佛弟子のことです、進んでは佛の道を學び退ては道を傳へて衆生を導くのが佛弟子の役目である、此役目を勤めるには同行の者とも和合し佛の御教にも背かぬ様に和合し、一切衆生とも和合せねばならぬ、故に和合衆と云ふ名が付けられたのである、佛様が在しても法が無ければ御教化は出來ぬ、法があつても僧が無ければ其の法を今日に傳へて我等を利益することが出來ぬ、法は佛の御心であつて僧は法の器械の様なものじや、夫故僧に御歸依をせねばならぬ、之を歸依僧の戒と云ふのであります、

歸依と云ふは、歸はトツグともカヘルとも訓む、女が嫁に行くことをトツグと云ふ、それは一旦嫁入をしたならば本當の實家へ歸つた積りになつて、向ふの家を自分の家と思ひ向ふの舅姑を實の親と思ふて心も身もソツクリ夫の方に打任せると云ふ意味になるじや、又た依の字は人扁に衣を着けた字である、人が着物を着る様に夜でも晝でも夏でも冬でも離れぬと云ふ意じや、即ち歸依すると申すは佛法僧の三寶に信心を

捧げた以上は三寶を以て親とも夫とも思ひ我が身勝手爲すに身も心も御任せ申し、
 寢ても寤ても御傍を離れぬと云ふことじや、南無の方は梵語で歸命と譯してある、歸
 はモトツク命は命令御指圖と云ふ様な意、即ち彼方の御指圖にモトツいて毛筋程でも
 違背は致しませぬと御歸依の誓を立てる詞である、して見れば南無も歸依も同じ意味
 てツマリ梵語と漢語とを雙へ擧げて南無歸依佛等と申したものであります、而して此
 御歸依は一時のことでは無い生き易り死に易り生々世々を盡して御歸依するのである
 から、生を易へ身を易へても三寶を供養し敬ひ奉らんことを願ひよと御示し下された
 ものでございませぬ、

此三寶には三種の功德と申して現前三寶と住持三寶と一體三寶との三通りの徳があり
 ます、現前三寶と云ふは現在世に現はれたる三寶で即ち歴史上の事實としての三寶で
 ある、佛は即ち大聖釋迦牟尼如來、法は即ち如來御一代五十年の御說法、僧は即ち摩訶
 迦葉舍利弗目連阿難須菩提等一千二百五十人の常隨の御弟子等は申すに及ばず、三國
 傳戒の祖師方及び各宗各派の御開山も皆な現前の僧であらせられるじや、住持三寶と

は、末世の今日では佛様も在さず從て面たり、御說法を聽聞することも出来ぬが、其
 の佛法の功德を末代に住持とトメタモツ所の三寶です、即ち佛は本堂杯に安置して
 在る御木像や御書像等じや、法は折本や書冊になつて居る一切藏經、僧は只今の僧侶
 達です、今日では此住持の三寶を手懸りとして御歸依をせねばならぬじや、一體三寶
 とは、宇宙間に充ち涉つて居る真理の姿です、解り易く申せば我等の心の上に本來具
 へて居る三寶です、佛様に變らぬ互の本心本性が佛じや、其の心に自から離塵と云
 ふて煩惱の塵を離れた徳のあるのが法じや、其の心に自から和合の徳のあるのが僧じ
 や、宇宙間の萬物萬象は悉皆成佛の姿である、法法位に住して居る其の儘が大解脱の
 姿である、天地同根萬物一體で相互に圓融無礙なるのが和合の姿である、モット適切
 に申しますれば、我等の心の本體は不生不滅萬徳圓滿の佛様であるのじや、此佛様の
 御光りを味まされ様に平生起る煩惱の塵を拂ひ戒法具足の境界になるのが心の上の御
 經文です、其の御經文を活用して世に違はず人に背かず發願利生行持報恩の徳を現は
 すのが心の上の袈裟衣じや、此三寶は元來一心の妙徳であるから一體三寶と云ふので

あります、箇様に三通の徳がありますれど式文には「一歸依の時諸の功德圓成す」とあつて、我れを忘れ己れを忘れ一心不亂に歸依し奉る時は一切の功德は此歸依の心中に悉く成就するぞとの御教であります、其の御歸依の仕方十三節には「正に淨信を専らにして或は如來現在世にもあれ或は如來滅後にもあれ合掌し低頭して口に唱へて云く南無歸依佛南無歸依法南無歸依僧」と仰せられてある、心には淨らかなる信仰を充たし身では掌を合せ頭を低げ口には三寶の御名を唱へ、三業一體になつて歸依し奉れよとの御示しじや、次に御歸依の旨意を「佛は大師なるが故に歸依す法は良藥なるが故に歸依す僧は勝友なるが故に歸依す」と御教へ下されてある、佛は三界の大道師、法は煩惱業苦の病を療治する妙藥である、僧は佛果菩提の因縁を結び合ふ勝れた御友達じやに依て歸依せよとの御指圖であります、譬へて申せば佛様は親て僧は兄弟て法は財産の様なものです、此三拍子揃つてこそ眞の安心が出来るのである、佛教に如何程多くの宗派がありましても此三寶に歸依し奉る儀式の無い宗旨はありませぬ、又各宗派の御本尊様とても此三寶の外には無い、念佛とか題目とか云ふものになると

少しく様子が變る様じやが、大體は三寶一體の基礎に依り、或は法を主として題目を唱ひ或は佛を主として念佛を唱ひ或は僧を主として觀音大士等を念じたりするもので決して三寶を離れた教へ方は無いのであります、

凡そ信仰の一念は戒法相續の根原で又た成佛得脱の土臺であります、指月禪師は信心を戒の源と説いて置かれたじや、故に華嚴經の賢首菩薩の偈には「信は道の元功德の母たり一切諸の善法を長養す、疑網を斷除して愛流を出て涅槃無上道を開示す」とあり大法炬經には「信受せざるが故に修行なし修行せざるが故に解脱を得ず」とあり華手經には「信を得るは衆樂の因と爲す無上の信心を發せば能く無量無數の衆生の諸の煩惱の病を滅す」ともある、此大信心の現はれたのが懺悔滅罪となり、懺悔の功德の成就した時自然に歸依三寶の念が現はれる筈のもので、小乗佛敎の代表國とも謂つべき暹羅は僧も俗も佛前に向ふ時は必ず、ブツタンサラナン、ガツチャヤミ（南無歸依佛）、タンマンサラナン、ガツチャヤミ（南無歸依法）、サンカンサラナン、ガツチャヤミ（南無歸依僧）、と歸依三寶の文を唱ふると申すことです、今（明治三十九年）を距る

こと一千三百零二年推古天皇の十二年に聖德太子が日本の憲法十七箇條を御製定遊ばされまして其の第二條には「篤く三寶を敬ふべし三寶とは佛法僧なり、則ち四生の終歸、萬國の極宗、何れの世何れの人か是法を貴ばざらん、人尤悪すくなし能く教ゆれば之れに従ふ、其れ三寶に歸せずんば何を以て狂がれるを直さん」とありまして佛法僧の三寶は人生最終の歸着處、世界萬國に通じての本尊様であるぞ、之を敬はざれば國家民人を治むることが出来ぬぞと仰せられてある、天智天皇様の如きは江州に崇福寺を御建立の折親から御指を切らせられて寺塔の地鎮を遊ばされた、聖武天皇様は、朕は三寶の奴なりとまで仰せられたとある、三寶の奴と云ふは朕は三寶の御給使人であるぞとの御詞じや、なんと畏こまことではありませんか、桓武天皇様が今の京都へ都を御移し遊ばされた時、傳教大師の意見を御採用になつて九條の袈裟に象どりて町の區劃を定め一條毎に法華經を地中に納められたと申すことじや、其の外代々の天皇様が恐れ多くも九重の貴とさ御身を以て三寶の御前へ禮拜歸依遊ばされぬは無い、佛法の傳はりてより今日迄天皇様で御法體に御成り遊ばされたのが三十七方ある、皇后

様で尼に御成り遊ばされた御方は七十有餘、天皇の御子様で入道せられた御方は二百三十餘人もあらせられる、賢臣名將の中でも藤原鎌足、吉備真備、和氣清麿、菅原道真、阪上田村麿、源の義家、頼朝、平の重盛、楠正成、新田義貞、藤原藤房、徳川家康杯と云ふ方々は稀なる大信者であられたじや、然るに世の中には斯かる神徳なる信仰の本尊あることを知らず特々邪見の道に踏み迷ふて居る者も少なからぬ、實に慨かほしき限りと言はねばならぬ、或は風の神や雷神を拜んだり、蛇だの猫だの古い杉の木、縁結びと稱する銀杏杯を拜んだり、鼠小僧の墓に掌を合せたり比翼塚に香華を手向けたり「助けセキコム」一列スマして甘露臺に隨喜の涙を流すもあれば、佛教は古臭い坊さんが氣に入らぬ西洋の宗教の方が面白からう杯と縁日見世を冷かす様な心持で横道に入り込んだり、甚しきは生殖器を拜む輩もあるとか申すことじや、餘りと云へば淺間敷ことではありませんか、故に十二節には「徒らに所逼を怖れて山神鬼神等に歸依し或は外道の制多に歸依すること勿れ、彼は其歸依に因りて衆苦を解脱すること無し」と御誡め下されてあります、苟くも東洋第

一の文明國、世界隨一の強國と稱する我が國民としては、宗教信仰の上に於ても他の侮を受けぬ様にせねば濟まぬではありませんか、有名なる太田持資入道道灌は非常の大信心者であつた、風流文雅の道にも富んで居つて其の歌なども皆な教訓的の意味が含まれてある、彼の「いとがずばぬれさらまじを旅人のあとより齎るゝ野路の村雨」とか「直からぬ心をかくす我が影もいとはず照す月ぞはづかし」の類は尤も道德的趣味があるじや、後土御門天皇の御間に對へて「わが菴は松原つゞき海近く不二の高根を軒場にぞ見る」と詠みしが如きは脱俗の風韻が見へて最と奥床しく思はるゝ、此人は武州龍穩寺の泰叟和尚や、芝青松寺の雲岡和尚等に參じて力を禪學に入れたが中々御悟りが出来なんだ、或る日途中に於て一人の巡禮に逢ふて、何處の者ぞと尋ねたところが、京都であると答へた、そこで道灌は、京都の景色と此處とはドーじやなと尋ねた時、恰も何處の山寺からやらボーンと云ふ鐘の音が聞へた、巡禮は左様であります處かはれば品かはる山水の風光も皆な夫々に變つた趣があります、唯だ彼の鐘の音丈は京都も此處も同じ様に思はれますと答へた、其の

時道灌は圖らず豁然として御悟りが開けたと申すことじや、世の中の物柄事柄の上には變つた點と變らぬ點とがある、是れ則ち差別平等の理である、佛様と我等とは元より異つては居るなれども一度大信心を起して我れを忘れ己れを忘れて歸依する時は其の間に寸分も隔ての無い様になるじや、之を十四節には「此歸依佛法僧の功德必ず感應道交するときは成就するなり」と御示し下されてある、我等の感ずる信仰心と佛様の應ずる慈悲心とが道交して一枚になるのが感應道交である、即ち差別の儘の平等です、譬へば戰爭中に一枚の號外が机の上に舞込て來た、之れを見ると我か軍大勝利の吉報じや、之を物理學上から見たならば、唯だ光線が紙の上に當つてそれから其の光線の反射で文字が眼の中に映りそれが腦に傳はつたに過ぎぬから、格別痛痒を感ずることも無さ走なものじやがソコが所謂感應です、簡單なる電報でも手の舞足の踏む所を忘るゝ程の喜びを生じ、それより我が兵士が艱難せし状況等を想像して言ふに言はれぬ感情の起るものです、此時机の上にいるは唯だ一枚の早刷の小紙じやが、自分の心は既に戦地に在る幾十萬の將卒と交通して居るです、木佛や畫像に向ふても折本や巻物に

對しても一念の信仰を注ぐ時は所謂感應道交の力に依て、我が心は既に三世十方の佛様と交通して居るのじゃ、一月や我れ我れや月やのわかぬまで心もすめる秋の夜の月」
 です、太田道灌は箇様に大安心が出来た人ゆえ後に上杉定正の精舎の邸の浴室にて、湯衣一枚手拭一本の時欺し討に逢はれたが、板圍越に空込んだ鎗が道灌の横腹をツブリと入つた、サツと迸る血汐は泉の如くじゃ、豫て覺悟の道灌は鎗の柄をシツカリ握つた亦もや前後より突出したる二本の鎗、前から来たのは片足舉げて之を避け後のやつは身を翻して空を突かせ、神色泰然聲爽かに「かゝる時さこそ命の惜しからめかねて無き身と思ひ知らずば」と讀んでニツコリ笑ふて死に就たと云ふことです、我等お互も感應道交の當體歸依三寶の妙功德を成就して、生死岸頭に臨んでもビクともせぬ様な大安心を得たならば、一切の善根は茶を飲み飯を喫する上にも聚まり来り一切の煩惱は夢の中にも起ると云ふこと無く、「池水によなく影はうつれども水も濁らず月もけがれず」と云ふ境界になり、左之右之造次顛沛にも佛性常住の孝順慈悲を實現する様になるてあろうと思ひます、三歸戒のことはこれにて大略演べましたから

これより席を改めて三聚淨戒十重禁戒のことを御話し致しませう、

第二席

前席では十六條の御戒法の中最初の三箇條即ち三歸戒の事を演べましたに依て、今席は後の十三箇條即ち三聚淨戒と十重禁戒の事を御話しに及びます、尤も此御戒法は一戒毎に甚深の意義と功德とが具つて居りますから、少くとも一戒一席位の割合を以て御話しせねば中々百分の一だも説き盡すことが出来ませぬ、夫故只今はホンの大要丈を申し上げるに過ぎぬ、先づ三聚淨戒と申すは攝律儀戒と攝善法戒と攝衆生戒の三箇條であります、此戒は本業瑠璃經等に委しき御示しがあつて、之を菩薩の根本戒とも申します、乃ち此三箇條が總ての戒法の根本土臺となるので、此戒法を受けて此戒法の心を具へさせれば正しく眞の菩薩眞の佛弟子となるのです、此戒法を受けぬ中は未だ眞正なる佛教信者とは云はれぬじゃ、初の攝律儀戒とは攝は「ヲサム」と云ふ字で風呂敷の中に物を包む様に澤山ある物を一纏めに收め込むと云ふことゝ、律儀は身口意

三業の上の總ての悪い事を禁じた世間出世間一切の法律を指したのである、其の一切の法律を一纏めにして何んな事でも悪いと云ふ悪い事柄は誓て爲るなよと云ふのが此戒法であります、次の攝善法戒は攝律儀戒の反て、佛法の中の四諦十二因縁三學六度の行も坐禪念佛題目加持等の務も、普通人間として行ふべき忠孝仁義勸懲博愛教育技藝に至る迄、凡そ善いと云ふ善い事柄は誓て之を勤め行ひよと云ふのが此戒法であります、後の攝衆生戒は一切衆生を攝すると云ふのであるから、曾た自己が惡を止め善を行ふ斗りではならぬ、進んでは人間は申すに及ばず禽獸蟲魚に至る迄も、憐れみを加ひ情を施し彼等をして同じく惡を離れ善に歸し相共に佛果菩提の樂しみを得せしむる様、誓て濟度の行を運べよと云ふのが、此戒法であります、此三箇條を一口に云へば、悪い事は微塵斗りでも致すまい、善い事は少しでも餘さず行ひたい、一切の衆生は濟ひたいとの三箇の大誓願である、我等も互が尋常何に事を爲す上にも此の三大誓願を前に立て、之を以て一切行爲の目的と爲るのが、此三聚淨戒の眼目で、これが正しく佛心の根本、諸善萬徳の源泉でございます、

處が中々此大誓願は起り悪いもので、大底は社會の攻撃や人前が怖いので據なく悪い事をするのを我慢して居るとか、名譽の爲め又は或る目的の爲めに餘儀なく善い事を爲るとか、義理づくで詮方なしに慈善の御交際を爲るとか云ふ方が多いです、乃ち善い事でも人が讃めて呉れねば馬鹿く敷と云つて止める、左も無ければ法律や約束の爲めに仕方なしに爲る位なものじゃ、悪い事で人が咎めさせねばズンくとやりたがる、故に其の心の底を探つて見れば、惡を止める爲めに止めたでも無く善を行ふ爲めに行ふたでも無く人を助ける爲めに助けたでも無い、差引勘定して見れば何んにも無い、後に残つて居るのは名譽と利欲と云ふ二ツの塊り物斗りじやと云ふ様な鹽梅しきです、そんな風ではとても國民の道徳を高めるとか社會の公徳を進めるなどと云ふことは遠ふして遠いと申さねばならぬ、宗教の必要なることは此處に在るです、我等も互は因果の大法に支配せられて此世に生れ、亦もや因果の命令に従ふて彼の世に行かねばならぬ、人生僅か五十年、身命は無常にして光陰は緊ぎ難し、暫時の惡業も永く未來の苦しみを招ぎ一點の煩惱も忽ち三惡道の報を受く、幸に受け難き人間に生

れ値ひ難き佛の御法に遇ひ奉りし身であり乍ら、何しに罪を重ねる様なことが出来ようぞ、何しに空しく冥さに沈む様なことが出来ようぞ、斯く因果の理を信じ三世の業を明らめずすれば、名譽とか利益とか云ふものは第二第三として、己れの真心から惡を止め善を行なひ衆生を濟度せんとの大誓願が起るものです、既に誓願であるから一時に其の目的を果たすことは出来ぬ、生き易り死に易り未來際を盡して、惡しき事は必ず致すまい善き事は必ず行なはん衆生は必ず利益せんと思ひ願ふて、寐ても病ても忘るゝことが無い様になれば、一日よりは二月一月よりは二月一年よりは二年と時々刻々に、其の目的に向つて歩を進め次第に圓滿なる理想に近づいて来るものじや、其の目的に近づくことを第一の喜びとし第一の樂しみとして參る人ならば、其の人こそは眞の菩薩眞の君子又た眞の自主獨立の人と申すものであります、故に菩薩には四弘誓願と云ふ四箇の誓願がある、所有菩薩方の起さるゝ誓願ゆえ之を通願とも云ひます

一には衆生無邊誓願度で、一切衆生は無量無邊なれども生々世々を盡して誓て之を濟度せんと願、これは攝衆生戒に當るので修證義の四大原則の上では發願利生である

二には煩惱無盡誓願斷て我等の煩惱は朝な夕なに湧き出て盡ること無きも誓て之を斷除せんと願、これ則ち攝律儀戒で懺悔滅罪と受戒入位との二つに當るじや、三には法門無量誓願學て佛法善根の行門は無量なるも誓て之を修行し學ばんとの願、これ則ち攝善法戒で行持報恩に當るじや、四には佛道無上誓願成て、佛の御證り遊されし菩提の道は此上も無く高尚悠遠ではあるが誓て之を成就せんと願、これは最後の目的であるから三聚淨戒及び四大原則の全部が之れに當ります、

毘尼母經等には七佛通誠の偈と云ふがある、乃ち「諸の惡は作す莫れ、衆の善は奉行せよ、自ら其の意を淨ふす、是れ諸佛の教なり」と云ふ四言四句の偈文じや、これは三世の諸佛が共に誡め玉ふ所の御教である、一句と二句とは攝律儀戒と攝善法戒に當ります、三句目の自ら其の意を淨ふすとあるのがイツチ太切なる御教じや、菩薩の戒法は意持戒と云ふて意の上から持つ戒法です、口に妄語は言はんでも意の内て人を欺さうと云ふ量見が起れば、其の人の心は既に鬼にも蛇にも爲つて最早罪の塊りを造つたのである、口で妄語を吐かぬ斗りてはならぬ、必ずや意で妄語を言はぬ人とならぬ

ば清淨とは申されぬ、眞實意が清らかなれば身と口とは自然に淨らかなる、三業清淨なれば自から佛性の孝順心慈悲心が現はれて参るものです、故に自ら其の意を淨ふすと云ふ中には攝衆生戒がチャント具つて居ることは、最も明らかであります、次が十重禁戒で十箇條あります、此戒法は梵網戒經に委しく御示しがあつて御經の中には外に四十八輕戒と云ふ輕い罪を禁じられたのが四十八箇條ある、それに對して重罪を誡められたのを十重禁戒と名けたのである、併し我が宗相傳の旨意では重い方丈を擧げて輕い方は畧すと云ふ譯で無く、此十箇條の中には四十八輕戒は申すに及ばず其の他の一切の戒律は盡く具はつて居るものと心得て戴かねばなりません、而して此十箇條は戒相即ち戒法の相であります、前の三聚淨戒は誓願の目的、此十箇條は其の目的を實行する上の相を御教誡下されたのである、

第一は不殺生戒である、これは人間は云ふに及ばず凡そ世の中に生とし生ける物の命を殺すなよとの御戒めです、佛の御心と云ふは即ち大慈大悲である、其の御心に隨て行くのが戒法の目的です、然れば常に慈悲の心に住して衆生を憐れみ衆生を救ふこと

本意である、凡そ世の中に一番大切な實はと云へば命に過ぎたるものは無い禽獸蟲魚に至る迄命を惜むの情に變りは無、其の一番大切な命の實を奪ふと云ふことは無慈悲の尤も甚しきものと申さねばならぬ、戰爭杯も征露の軍の如き仁義の師なれば平和の爲め人道の爲め止むを得ず御開戦になつたのちや、譬へば惡性の腫物の出來た場合の如きもので打捨て置けば全身の祟を爲すに依て據なく一部分の生肉をも犠牲にして切開治術を施さねばならぬ、東洋の平和を維持し國家の安寧を保全する爲めに涙を揮つて幾十萬の忠臣勇士をも犠牲にせられて、世界に崇を爲す一大腫物を切開せられたのであるから、其の形は戰爭でも其の精神は一大慈悲心の權化である、若し之れに反して敵の命を殺し他の國を奪ふを目的とする戰爭であつたならば世にこれ程の罪惡は無かろうと思ふ、天皇陛下が戰爭中に御詠じ遊ばされた御製に「四方の海みらはらからと思ふ世になど仇波の立ち騒ぐらん」とある、僅々三十一文字の中に戰爭の御目的、仁慈の大御心が溢れて居るではありませんか、斯くてこそ仁義の御戰、不殺生の殺生と申し上ぐべきである、縦しや鳥一羽兎一疋でも自分丈一時の快樂を取らん

が爲めに之を殺すのは決して人道の本旨では無い、銃獵杯は幾んど紳士の樂しみ仕業の様になつて居るが、動物の虐待を防止する會迄出來て居る今日決して賞むべき遊びとは認められぬ、拙訥は極端なる舊思想を是認するのでは無い、惻隱の心が内に動いて鳥一疋でも殺し得ぬ程の慈悲心があつて、而して事に當ては百萬の敵をも恐れぬと云ふ大勇ある人こそ拙訥等の理想とする所である、銃獵杯を致さんでも活潑な勇壯な紳士の遊びは幾等も他に在るであらうと思はるゝじや、營業の爲め鳥や魚の命を殺すのは止むを得ざることにじやが、猶ほ其の心の中には自から一片仁慈の精神を存して居らねばなりませんじや、縦や害虫を撲滅する様な場合でも如是畜生發菩提心の回向心を持って貰ひたいです、濱邊の漁を業とする者が毎年に無縁供養杯の法要を修行して鱒族の爲めに回向するが如きは決して輕んずべきことでは無い、若し神聖なる慈愛の上から斯かる法會を行ふとしたならば、これを實に文明の花であるふと思ふ、敏達天皇様の御時に聖德太子がマダ六七歳の頃であらせられたが、深く殺生の業を悲しみ玉ひ其の御思召を天皇へ申し上げられたので、遂に勅令を以て一ヶ月の中八日十四日十五

日十八日廿三日廿九日三十日文武國內の殺生を御禁制になりました、又推古天皇様の時には一ヶ年間殺生を禁ぜられて獵士や漁業者には禁制中の扶持料を賜はつたこともある、又た今上天皇陛下に於かせられては先年英照皇太后陛下御崩御の砌其の御忌の爲め御一周忌の濟ませ玉ふまでは、主獵官に御勅令あつて濱の離宮及び新宿御料地内に於て雁鴨等を捕獲することを御停止遊ばされたと承はつて居る、是れ皆な佛菩薩の御心と申し上げねばならぬじや、殺生の上にも自から罪の輕重があつて、先づ殺す者の意志から申せば、殺生しても少しも不便なく云ふ情の無いのは罪が重い、慈悲悔悟の念の起るのは輕いじや、又た先方の相手の上で申せば、恩人を殺すのは一層罪が重い、普通の人を殺すは中等、悪人を殺すは輕い、又た人を殺すは重罪、牛馬等を殺すは中等、昆虫を殺すは輕罪と云ふ様な等差が付られる、又た自己の爲めに殺すは重罪、世の中の人々の爲めに殺すは輕罪じや、筒様に同じ殺生でも細かに説けば輕重淺深千差萬別じや、此等の委しい事は一々述べ盡されぬゆゑ大略にして置きます、後の九箇條も皆な之れに準じて御承知なさるが宜い、兎に角縦ひ輕い方の罪でも決して造るまい

と誓ふのが菩薩の大願であります。此戒を前の三淨聚戒に當てし見れば、生物の命を殺さぬと云ふが攝律儀戒、能く此戒を持つて慈悲の徳を全ふするのが攝善法戒、殺生せぬのみか更に進んで他の生命を保護し救助するのが攝衆生戒である、是の如く後の九箇條にも一々此三大誓願が具つて居るのでありますから、其の心得て戒法運用の状態を領解て下さる様に願ひたいのであります。

第二は不偷盜戒である、是れは他の財物を盗むなよとの御戒めじやが意味が大層廣いです、凡て取るべからざるを取るのが皆な偷盜であります、縦や手を着けて盗まなくても取らうと云ふ悪心が一點でも起れば最早此戒の罪人です、壁を壊し垣を踰へて財を盗むは竊盜であるし、恐嚇して無理に奪ふのは強盜追劔じや、奉公し乍ら役目を怠るは位を盗むので日常を貰て働かぬは給金の盗みです、誚諛を言ふのは首の盗み表面丈善人らしく飾るのは善の盗みじや、商人が不當の利を貪ぼる官吏が賄賂を取る拾物を着服する借りた物を還さぬ杯皆な盗みじや、親子夫婦の間でも與へられぬ物を無断に費やすが如きは、縦や紙一枚糸一筋でも盡く此戒の罪人て未來永劫の罪の借金となる

のであります、故に此戒を守る者は自分くの分限を守り義務を盡し他人の財物は微塵斗りも犯すこと無く、進んで他の財物を保護する様に致すのが佛の御心、菩薩の大行であります、

第三は不邪淫戒である、是れは男女の禮を慎しみ夫婦の道を守り雙方共に正しき操を持つて、苟めにも邪しまなる不義姪行を致すなよとの御戒めじや、貞女兩夫に見へずとは昔からの教へじやが女斗りに操を守らせる道理は無い、男子も亦た操を正しくして己れの妻を守り品行を清らかにせねばならぬ、一夫一婦は人倫の大道である、我が國杯は血統相續を重する國柄じやに依て本妻に子の無い時は夫婦相談の上妻を置いた事例も澤山あるが、これ連も十二分の注意を以てせねば却て身を亡ぼし家を滅ぼし國を亂し親族を辱しむる種を播く様なことにも爲る、況てや自分の賤しい情慾より妻狂をする杯は以ての外の事ではありませんか、女たる者の慎しまねばならぬは猶更のこととす、故に此戒を守る者は常に品行を正しくして夫婦の操を持ち家庭の和合を護り、一家の秩序を亂さぬ様にすることが肝要であります、

第四は不安語戒である。是れは妄語を言ふて人を欺すなよとの御戒めじや、梵網戒經には心身の妄語と云ふ御語がある、人を欺かうと云ふ心が起れば其の人は最早心て妄語の罪を作つたのである、これが心の妄語じや、無學の者が學者らしい顔をしたり貧乏の癖に金持ちらしく見せかけたり、勉強もせんて勉強振り不實の者が親切振り杯は皆な身の上の妄語じや、昔し支那九代の祖師藥山禪師に、佛道の中で一番貴とい實は何てあるかと向ふた者があつた、禪師は「莫詔曲」と答へられた、莫詔曲とは心が邪しまに曲つて居りながら表面丈は善人らしく親切らしくする様な不正直をするなよ、是れが人間の實であるぞと云ふ御示しじや、人の品性を卑くし諸の罪を造るのは妄語より甚しきは無いてす、故に此戒を守る者は常に正直の徳を持ち身口意の三業を正ふして苟にも人を欺き世を偽るが如き所業を致さぬ様慎しまねばならぬ、

第五は不酤酒戒である、是れは酒を酤つて人に罪を造らせてはならぬぞとの御戒めてす、御經の中には酒の三十六失だの十五過だの十過だのと云ふ委しい御戒めがつて兎角に酒と云ふものは人の精神を昏まし狂はせるばかりか、身體にも多くの害毒を興

へるじや、智慧を失なひ禮儀を亂だし時間を費やし争論を醸し不經濟不攝生此上も無い徒らものは酒である、夫故酒を酤つたり又は無理強さしたりするのは人に罪を造らせる様なものじやと云ふので、梵網戒經には酒は起罪の因縁なりと御示し下されてあります、併し戒法には開遮持犯と云ふことがある、開は許すこと遮は差止ることです、此戒の如きも能く之を心得て應用を誤らぬ様にせねばならぬ、釋尊も祇陀太子と云ふ方がどうしても酒は止められぬ、併し酒を飲んで身をも心をも害すること無く却て健康を益し行狀が善くなると云ふので特に御許し遊ばされたことが、未曾有經に出て居る、酒其の物には罪は無いが其の結果が恐るべきものであるから御戒めになつたのです、故に此戒を守る者は禁酒が出来ればそれに超したることは無いが、若し出来ぬとすれば孔子の所謂亂に及ばず、楠正成公の遺訓にある「酒は飲むとも飲まるゝ」の教へを守り、苟にも身體を害したり精神を亂したりせぬ様、又た人にもさせぬ様にするのが此戒法の持ち方です、酒屋渡世の方林は精々人の身を害する様な品の無い様に注意して行くのが太切じや、廣く申せば人の心を酔はせるものは、皆な此戒の制する

所となる、花を見て狂ひ廻つたり、碁を打て夢中になつたり、芝居や相撲に上せ込んだり、する類も深く慎しまねばなりません。

第六は不説過戒である、是れは人に過失あるを見ても悪口を言ふなよとの御戒めてす。正法念經には「甘露及び毒藥皆人の舌の中に在り」とも仰せられて、口から作る罪は夥しいです、人誰れが過なからんて自分くも矢張過失が多いに違ひ無い、然るに自ら省みることせず、人の悪口を云ふ杯は實に淺間敷仕業である、故に此戒を守る者は常に愛語と云ふて親切なる語を使い、苟にも人を傷つける様な語や、徒らに人の感情を害する様な語杯は、決して口外に發せぬ様に致さねばなりません。

第七は不自讚毀他戒である、是れは自分の事を讚め人の事を悪く言ふことを制せられたのでツマリ高慢してはならぬぞよとの御戒めてす。「人をたゞ吉野の花とながむべし我れを難波のあしといふとも」と申す歌もあるが、自ら高振らず人をも侮どらぬ程奥床しい美しいものは無いです、如何程高位の人でも又た學者でも財産家でも高慢の風をしては三文の價値も無くなるものです、故に此戒を守る者は常に謙遜の徳を持ち勸

語に所謂恭儉己れを持すと云ふことを慎しみとせねばならぬ、

第八は不慳法財戒である、是れは法と云ふて總て人の道徳を進め人の智識を開き人に安心を與ふる所の教法と、又た財と云ふて衣食住を始めとし總て人の生命を資け養ふべき物と、此二つを己れの身分に應じて人に施すことを心懸けて、必ず無慈悲なる心を以て物惜しみをするなよとの御戒めてす、慈愛の念を以て人畜に物を施すを布施と申すが是は丁度其の反對であります、覺如上人の歌にも「あはれみを物に施す心より外に佛の姿やはある」とありますが、施しをするのがヤガて佛様の御姿です、布施には財施と法施と無畏施との三通りがある、財施は物品を施すのであるが親切な心で爲れば御茶一服傘一本も皆な是れ財施の大功德じや、法施は教へを施すのであるが慈悲の念で致せば、學校教員が生徒を教授することや吏員が人民に注意を與ふることを申すに及ばず、途中で人に道を教へるのも人の着物に泥の付て居るのを知らせてやるのも皆な法施の大功德です、無畏施は無畏は畏れなしと云ふので即ち安心と云ふ程の意味じやに依て人に安心を與ふるのが無畏施である、だが財施も法施も其の目的

は安心を興ふる爲めなのであるから、此戒では單に財と法との二ツ丈を擧げたものである、世の中は互に施し合ふて生存が出来て居るじや、日の乾坤を照す水の萬物を潤ほす如き皆な大布施の御姿です、それに自分さえ宜ければ人の痛いのには三年も忍へるなどと慳貪に構へるのは、第一人間たる資格をも失つて居る仕方です、故に此戒を守る者は平生親切の心を以て人に交はり、分限相應に財と法とを人畜に施し、以て天地の化育を副ける様に勤めねばなりません、

第九は不瞋恚戒です、是れは腹を立てるなどの御戒めじや、凡て此世の中は幾千萬人の寄合身上の様なものであるから、自分一人の思ふ様になるものには無い、況してや煩惱業苦の互の身であれば、我が身でさえ思ひの儘にはならぬものです、「朝夕の飯さえてわしやわらかし思ふまゝにはならぬ世の中」我が身さを我が心にもまかせぬを人を心にまかせべきやは「じや、それに氣に入らぬと云ふては些細な事にまでも腹を立てて人を憎んだり恨んだり嫉んだり妬んだりすると云ふは、何たる淺間敷こととせう、慈雲律師の歌にも「慢の修羅眞の地獄を拂ひすて、慈悲こそもとの姿なりけれ」

とありまして腹を立てた時の心は其の儘の地獄じや、佛様は此世界のことを娑婆と仰せられてある、娑婆とは堪忍士と云ふこととあります、寒さにも忍ひ熱さにも忍ひ順境にも忍ひ逆境にも忍ひねば生きて居られぬ世の中であるぞと云ふ意味なのです、殊には佛の大安心を得て菩薩の大行を致さうと云ふ佛教信者たる人々が、短氣を起したり腹を立てたりして斗り居る様ではどうして慈悲善根が積まれますぞ、故に此戒を守る者は常に堪忍の行ないを持ち、和合の徳を養ふて、如何なる艱難にも忍らへ如何なる逆境にも耐へ、朝な夕な立居振舞も寛い心、雅なる量を以て専ら柔和温厚を旨とし、萬事萬端の上に堪忍行を守るのが最も太切であります、

第十は不謗三寶戒である、是れは佛法僧の三寶を謗るなよとの御戒めじやが、ツマリ我等互が生々世々を誓て三寶に歸依し奉りし上は、棄ても寐ても三寶を敬ひ貴んて苟にも失禮なる振舞を致すなよとの御禁制です、佛様の教に反對なことを爲たり佛様の教へを疑ふたり、佛教の體面を穢す様な行動があつたり、宗派上の争から御經文の悪口を論じ合ふたりするの類は皆な此戒の罪人です、禽獸癡三毒の煩惱に當て、見ま

すれば第八の不慳法財戒は貪慾の御誡め、第九の不瞋恚戒は瞋恚の御誡め、此戒は愚癡の御誡めです、佛の教へに反對するのは愚癡の爲めに眞正の智慧を味まされて居るからじや、それが爲めに益々邪見に陥るてす、ソコで十善戒では之を不邪見戒と名けられてある、適切に申せば此十六條の戒法や修證義の四大原則に背いた量見や行爲や言論杯を爲す者は三寶誹謗の罪を作るのである、故に此戒を守る者は常に佛法僧の三寶を敬ひ堅く佛様の御教へを信じて、身口意の三業を淨らかにし佛教信者たるの本分を盡す様にするのが、實に我等の一大事でありませぬ、

これでザツと十重禁戒の事を演べ了りましたが、此上は更に十六條の御戒法全體の上に就て我等の心得べき覺悟と、又此身此儘佛様の御仲間入が出来ると云ふ宗門安心の一大事を説き明かさねばなりません、餘り長座になりましたから次席に於て一通り演ずることと致します、

第三席

釋尊御涅槃の砌我等衆生の爲めに御懇篤なる御遺言の教訓を賜はりましたのが即ち佛遺教經であります、御遺言の御旨意を一口に申せば、我が涅槃の後には戒法を以て我れと思ひよ戒法の存する所に我れは勝然として居るぞよとの御訓誡であつた、其の御經の中に「若し人能く淨戒を持すれば是れ即ち能く善法あり、若し淨戒なければ諸善功德皆な生ずることを得ず是を以て常に知るべし戒は第一安穩功德の所住處たることを」と云ふ御示しがある、佛の御戒法を持てば一切の善根功德が自から具はる、戒法は實に安心成佛の源であるぞとの御教です、全體佛教の目的は何處に在るかと云ふに、智慧の上から云へば迷を轉じて悟を開くのが目的、果報の上から云へば苦しみを離れて樂しみを得るのが目的、事業の上から云へば一切衆生を濟度するのが目的であります、要するに一切の惡を離れて一切の善を行ふと云ふが總ての土臺になるのである、此善と惡との二つは何を標準として定むるかと云ふに、これは道德學上の大問題で西洋でも東洋でも昔から種々雑多の學説がある、良心説、自愛説、社會主義、學生主義、宇宙主義、國家主義等幾んど數ふるに違なき程であるが、今だに確實なる解

釋が定まつたとは云はれぬじや、併し此等は佛教の上より見ますれば各々一面の眞理を現はしては居るが、多くは理論の一方に趨つて居るので、之を愚夫愚婦に迄も能く吞込ませて實地に行はしむると云ふ一段になると、甚だ不完全と申さねばならぬ、佛教ではどう教へてあるかと云ふに瓔珞本業經に「理に順して心を起すを善とし理に違ふて心を起すを惡と名く」と仰せられてある、その理と云ふものは基督教の様に人生以外に求むるのでも無く、又た少々な社會の一部や國家の一部を以て標準とするのでも無い、此事は既に宗旨の大綱を演べた時に一通り御話して置きましたから此處では略しますが、要するに宇宙其の物がソツクリ眞理であつて之を解釋したのが所謂佛性常住の孝順心慈悲心であります、宇宙の眞理杯と申すと捉まい處の無い漠としたことの様じやが、其の眞理は有の儘に我等の心の中に輝いて居るじや、西東をも辨へぬ稚兒が母親から物を貰ふた時ホツクリ頭を下げる、おイタ、キを爲る、ニツコリ笑ふて喜びと感謝の意を表する、此中に孝順の心はアリ、と光りを放て居ります、其稚兒が玩具を見る、傍へ寄て嬉しがる、菓子を買ふ、手に握て喜ぶ、その中に慈悲の心がア

リ、と光りを放て居ります、之を本能じやとも云ふてあるう、無意識とも云ふてあるう、その本能その無意識がやがて大能力大意識の種子であります、稚兒の生長するに従て其光りが十方に輝き天地間に輝き宇宙間に輝き、遂に宇宙の大眞理大光明と一致して行くのじやが、悲しいかな無始以來の煩惱と罪障との習慣と業累とに依て佛性のお光りが藏れて見へぬ様になる、これが我等凡夫の身の上です、一度此處に氣が付てア、耻かきことかなと思ふて自ら救を求むるのが即ち懺悔である、懺悔の念が一度起りますれば先覺と云ふて我等より前に御覺りを開かれた佛様や祖師方が、有り難くなり戀しくなる、その有り難くなり戀しくなつた心が取りも直さず歸依三寶となるのであります、斯く佛法僧に歸依し奉りますれば自から三寶の御心が我等の心の中に宿り、我等の心が三寶の御心の中に入り、三寶と我等とが一つになつたのを感應と申すのじや、その三寶の御心と云ふのは諸の惡を離れ諸の善を聚め限り無き御慈悲の充ち満ちたのが即ち三寶の御心です、其の御心がソツクリ我等の心の中に宿るのでありますから、我等の心の中にも自然天然に、願くは一切の惡を離れん願はくは一切の善を行

なはん願くは一切の衆生を濟はんとの大誓願が、ムク〜と湧き出すじや、これ即ち三聚淨戒であります、サア此大誓願が湧き出して参りますと、恰も天地自然の妙用が春夏秋冬と循環して休みなきが如く、此大誓願たる宇宙真理の靈機が萬事萬物の上に活動して來まするじや、其の活動の相が即ち十重禁戒であります、乃ち人の生命に對しては自から不殺生戒となつて現はれる、人計りてはありませぬ、鳥獸に對しても草木に對しても現はれます、恩ある人には孝順心の妙用で自今の身を捨て、も恩人の命を守護する心になる、目下の者に向へば自然に之を助けずには居られぬ様になる、草一本木一本でも無益に之を折り取るに忍びぬ様になる、米一粒水一抔でも之を疎略に出來ぬ様になる、是れ即ち不殺生戒の徳が禽獸や草木にまで及ぼさるゝのであります、又た他の財産に對しては自から不偷盜戒となつて現はれる、人間計りて無く、畜生の物でも山の中や川の中に在る物でも漫りに之を取り去るに忍びない様になります、又た男や女の身分に對しては自から不邪淫戒となつて現はれる、心も身も清淨潔白なれば亂りに他の容や貌に迷ふて人を汚す様なことがどうして出來ませうぞ、孝順と慈

悲との光りが輝いて居させすれば穢れた心の時は顔出のならぬものです、天地陰陽は各々其の禮を正ふして、亂りに犯すことは無い、松は紅梅の色香に迷はず竹は垂柳の鼻なるを慕はぬ、日月も山川も長へに其の操を守つて居る、乃ち法性自然の徳である其の徳に叶ふたのが不邪淫の相であります、此大誓願が言語の上に發すれば不妄語戒となるじや、正直は天の道である、柳は綠花は紅少しても偽虚は無、天の道に叶ふた人には妄語杯と云ふ惡魔は憑附かね等じや、此大誓願は自から般若の正しい智慧を具へて居ります、智慧が明らかなれば見る上聞く上に心の狂ふことはありませぬイロハの歌に「淺き夢見し酔もせず」とあるが如く、無明長夜の夢が覺むれば五欲六塵の境に對しましても自分の心の亂れぬのみか、人の心をも治めて參るものです、此正しき知見が不酤酒戒となつて現はれたのであります、孝順慈悲の妙用は人の過失あるを見れば自然に憐れみの心が起るに依て、人の惡口杯を言つて自ら慚しとする様な邪見は無、これが不説過戒となつて現はれたのである、「吳竹のすぐなる節の杖つきていよくたどれ法の大路を」て益々大誓願に向つて法の大路をたどり行く者が、な

にしに僅かばかりの才能に誇つて高慢杯が出来ませうぞ、これが不自讃毀他戒となつて現はれたのであります、大誓願の妙用から見れば治生産業までも皆な布施の姿である、一文なして施しの出来ぬ時でも慈悲の心念が胸一杯に満ちて居れば所謂「物をひに與ふる物の無き時は言の葉のみもなさけあたへよ」と最明寺時頼公の詠じた通り身口意三業の中何れへか慈悲の光りの放たれるものじや、此慈悲心が衆生の肉體に向つて財の施となり、衆生の精神に向つては法の施と爲る、これが不慳法財戒の相であります、又た上を敬ひ下を憐みて常平生「世の中によしあしごとを聞く度に我が身の上を立かへりみよ」と云ふ觀念が出来たならば、自づと柔和忍辱の徳が現はれて瞋患の焰は立處に消えて仕舞ふ、これが不瞋悲戒の相であります、心外和向は「この頃は日に遠く尋ねける近き心の近き佛を」と歎かれたが、今日こそは佛の御戒法を相傳して此身此儘が三世諸佛の御仲間入りと思ふたならば、朝々佛を抱いて起き夜々佛を抱いて眠るで、寐ても寐ても佛様と御同行しや、夢の間にも三寶の御傍は離れられぬ様にならねばならぬ、これが不謗三寶戒となつて現はれたのであります、

是の如く十箇條の御戒法と申すも、畢竟我等の孝順心慈悲心より出てたる三大誓願即ち三聚淨戒が、衆生に對し國家に對し山川草木に對して、自然に現はれたる妙用であつてツマリ心の徳の相であります、故に此十箇條の御戒法は三聚淨戒を離れたものでは無いですが、又た三聚淨戒は本とく佛法僧の三寶に具はつて居る徳でありますから三寶の外に別にあるのでは無いですが、その佛法僧の三寶は唯だ我等が歸依の一念に現はれるのであるから、ド、のツマリは我等の信仰の一念に十六條の御戒法はソツクリ籠つて居るので、故に御經には此戒法を心地の戒と仰せられたのでございませう、猶ほ十重禁戒を一應身と口と意との三業に割り當て、見ますれば、殺生と偷盜と邪淫と酤酒の四つは主として身で作りますから身業に當りますし、妄語と説過と自讃毀他との三つは口が主となるから口業の方で、慳法財と瞋患との二つは意が主であるから意業、終の謗三寶は謗の字の意味が廣くかゝつて居るから主として意業と口業とに當ります、併し此十箇條はコンナに別々に當て嵌めぬ方が宜いのです、身と口と意との三つに通じた御戒法であることは前で演べた様な譯合でありますから、拙

祿は之を三業清淨戒と稱したいと思ひます。

修證義十六節には「受戒するが如きは三世の諸佛の所證なる阿耨多羅三藐三菩提金剛不壞の佛果を證するなり、誰れの智人が欣求せざらん」と仰せられてある、阿耨多羅三藐三菩提と云ふは梵語で、譯すれば無上正道即ち此上も無い正しき佛の道と云ふことになる、此の御文は我等も互が一度御戒法を受け奉る時は、全剛不壞と申して生々世々を盡して朽ちることも無く壞れることも無い、大磐石の様な佛の道と佛の御果報とを成就するぞよとの御示しです、唯だく己れを忘れ我れを忘れて有り難いことじや喜ばしいことじやと深く信仰を凝らして、此御戒法を相續なされるれば其の時直ぐに佛様と親子の御約束、其の場から佛様の御仲間入りでありますぞ、梵網戒經には「汝は是れ當成の佛なり我れは是れ已成の佛なり、常に是の如きの信を作せば戒品已に具足す」とある、これが信心の大眼目であります、汝はとあるは御戒法を相續する我等を御指なされたのです、當成の佛とは當さに成るべき佛と云ふので修證義にある吾等が當來は佛祖ならんの意味です、即ち無始劫來より三界六道に輪廻して居つた凡夫なり

しも、戒法相續の今日よりは疑も無き佛であるぞと云ふ仰じや、我れは是れ已成の佛なりとは、我れは三祇百劫の修行の曉に此戒法を得て已に佛に成つた身である、然れば我れは汝等の親なるぞ汝等は我が子に相違ないぞよとの御語です、扱て是の如く我等御戒法相續の身は今日以後は佛様になつたのじやと、能々信することが出来さへすれば、其の信仰の手元に十六條の御戒法の徳は自然と缺目なく具足することが出来るぞよとの有り難き御教訓であります、なぜかと申しますれば我こそは佛様に成り了つた身の上じやと信するとの深き時は、此信仰の力に依て世の中の一切の苦しみにも勝ち一切の煩惱をも忍ぶ様になるものです、金の爲めに働く者は骨折を骨折と思はぬものです、それは金と云ふ一つの樂しみがあつた爲めに骨折に打勝つたのである、況てや我れは佛に成つたのじやと徹底信する人ならば其の喜びは如何なりてありませう、此大安心の喜びの力は如何なる艱難にも妄念にも打勝つことの出来るものです、此一念の大信心これが御戒法の源、此身此儘の佛果菩提といふ宗門安心の神髓であります、イヤくどう致しまして我等の様な凡夫が御仲間入杯出来ますものか杯と自ら跡退り

をなされてはなりませぬぞ、コ、が即ち信心です、毛筋程でも疑の心や自分量見を出してはならぬ場合であります、譬へて見れば丁度生れた斗りの赤ん坊の様なものです、オギャーと云ふて母の胎内を出た時は全くの無意識であるから、東も知らず西も知らず親をも知らず我が身をも知らぬけれども、其の身は既に帝國四千八百萬人の一員で戸籍簿に登録されて仕舞へば最早立派な人間の御仲間入じや、其の機能の點から云へば手も働けず足も働けず寝るも起るも母親の御世話に預からねばならぬが、人間の頭數から申せば大政治家にも大事業家にも少しも變らぬ金看板の人間てありません、人間は人間に生れてから人間の仕事を習ふのである、匂へば立て立てば歩む、一抄時一抄時一日／＼に成長して後には親にも勝る程の者にも爲るじや、我等も其の通りて御戒法を相傳して「衆生佛戒を受ければ即ち諸佛の位に入る」と云ふ時が「オギャー」と産ぶ聲を擧げたのである、産ぶ聲と共に立派な佛様の御仲間入じや、智慧も狭い徳も薄い神通も無い光明も無い、ケレども三世諸佛の戸籍帳には既に千佛の一數です、佛様になつてから佛様の仕事を習ふのじや、これが即ち本證、妙修の法門である、サア佛様

の御仲間入を致した上は佛法僧三寶と云ふ慈悲深き母親の御世話を戴かねばならぬから、立にも坐るにも寝るにも起るにも南無歸依佛南無歸依法南無歸依僧の唱名が絶へぬ様にすべきは當然じや、その代りには一抄時／＼に成長發達してイツの間になら、三十二相八十種好光明無量壽命無量萬德具足悲智圓滿の佛様になることが出来るのでございます、

支那の唐の世に名高き白樂天と云ふ學者があつて非常なる佛教の篤信家でありました、此人がまだ佛教を信じなかつた頃の御話じやが、或る日道林禪師と云ふ名僧の在ることを聞いて試験してやる位の氣込で尋ねて行かれた、此禪師は暇さへあれば裏手の大木の木の又の上つて坐禪して居る、丁度鳥が窠をかけて居る様じやと云ふので世の人々が字を付けて鳥窠禪師と申した、乃ち鳥の窠和尚さんといふことじや、其の日も相變らず鳥の窠をさめて居つたので、白樂天は直ちに其の木の下に行て見ると好い心持に坐睡をして居る、木の又の上の坐睡隨分險呑に見へる、白樂天は思はず聲を擧げて危い哉／＼と連呼した、禪師は聲に驚かされて目を開て見られると立派な官人ジロソ

と御覽になつて同じく危い哉」と言はれた、白樂天は進み寄り予は大地を踏んで立て居る危きこと更に無し何としてか危しと仰せらるゝや、禪師は直ちに「薪火相交はる識情停まらず危うからざるを得んや」と答へられた、薪火は薪と火です、相交はるですから火と薪が一處になつて居る、これは無常の有様を言はれたものじや、山程積んで在る薪も一塊の火に觸るれば忽ち燃て烟となる、我等の身の上も是の如く無常の火の諸の世間を焼くこと猛火よりも甚しいては無いか、一時の間も油断は出来ぬ、「あすありと思ふ心にだまされて今日も空しく過しぬるかな」ではなりましたねぞ、識情は心意のこと此心と云ふものは朝から晩まで惜しい欲い悪い愛いと、五欲六塵の境を飛び廻りて少しも停ることは無いじや、斯かる淺間敷心を以て無常憑み難き世に在るのはナント危いことではあるまいかとの御挨拶である、白樂天は此和尚中々口が達者だわいと思ふたから語を轉じて「如何なるか是れ佛法の大意」と問ふた、釋尊御一代五十年三百餘會の説法三千餘卷の經文、實に廣大無邊と承はる、其の大意を御示し下されとの問じや、スルと禪師は毘尼母經や涅槃經にある彼の七佛通誠の偈の二句を

擧げて「諸の惡は作すこと莫れ衆の善は行なひ奉れ」と答へられた、白樂天カラ「と打笑ひナニ惡を作すな善を行なへンンな事なら三歳の小兒も尙ほ之を諳んじて居るては無いか、禪師はスカさず「三歳の小兒も之を諳んずと雖も八十の老翁も之を行ふこと難し」と一鍼を與へられたじや、口先の議論や理屈の佛法では三寶感應の徳は得られぬ、實地に惡を離れ實際に善を行なひ戒法具足の身となつてこそ始めて佛法の功德も現はれるのであります、白樂天は之れより禪師に歸依して遂に古今に稀れる程の大信仰者となられました、

天竺の耆域の傳にも之れと同じ様な話がある、耆域は天竺の高僧で晋の世に支那へ来て佛法を弘めた人じや、後に天竺に歸る時法行と云ふ沙門が我等の爲めに何卒一言の教訓を遺し玉へと願ふた、そこで耆域は「口を守り意を攝めて身犯すこと莫れ是の如くの行者は世を度ることを得ん」と云ふ御經の偈文を示した、是れは口を守り慎しみて罪を作らぬ様にせよ、意を攝めて邪見を起すなよ、身を修めて法を犯すなよ、箇様に身口意三業を淨らかにして道を行ふ者は此世の苦しみを離れて菩提の岸に度り着く

ことが出来るぞと云ふ御教訓じや、ところが法行は「願くは上人未だ聞かざる所を授けよ斯の偈の義の如きは、八歳の童子も亦た已に誦誦す、道人に望む所に非ず」と云ふた、只今の教の如きは誰でも知て居りますから珍らしい御話を聞かして戴きたいと乞ふたのです、其の時着域は大に笑つて「八歳誦すと雖も百歳も行なはず誦誦何の益ぞ、人皆を得道の者を敬ふことを知るも之を行ふて自ら道を得ることを知らずと」云ふて悲しまれたと申すことです、法句經には「人壽百歳なるも怠惰にして勤めずんば一日も心身を策勵せんには如かず」と御誠め下されてあります、如何程財産があるうと學問が出来やうと高位高官に進まうと、假の浮世に假の命、一息切れれば身に着く物は一つも無い、生々世々の寶といふは御戒法を相傳して之を行ふ上にあるのじや、之を行ふことは信仰の力に依らねば其の目的を達することは容易に出来ぬ、信仰一度現はるれば其の力に依て一年三百六十日此身も此心も御戒法を離れぬ様になります、之を十七節には「群生の長へに此中に使用する各々の知覺に方面露はれず」と仰せられてある、方面と云ふは我等凡夫の相のことじや、知覺と云ふは心のことじや、我

等も互の心がソツクリ御戒法の徳となつて現はるれば今迄の凡夫の相が藏れて此身此儘の佛様であるぞとの御示しです、サアこうゆう境界から世の中を見渡せば人間は申すに及ばず草でも木でも山でも河でも、盡く御戒法の姿、佛様の御姿で所謂「溪聲便是廣長舌、山色豈に清淨身に非ざらんや」である、之を次の御文には「此時十方法界の土地草木牆壁瓦礫皆な佛事を作すを以て其起す所の風水の利益に預る輩、皆甚妙不可思議の佛化に冥資せられて親き悟りを顯はす、是を無爲の功德とす是を無作の功德とす」と御示し下されたのであります、佛事と云ふは佛様の仕事です、佛様の仕事と云ふは孝順心と慈悲心とが現はれて、自から諸の悪を離れ自から衆の善を行なひ自から一切の衆生を利益せらるゝことである、大空に輝いて居る月は鏡の様な清らかなる光りを放つて、世の中の暗を照し、玉の如き影を萬水に浮べて居る、鏡の様な善の行はれた相、暗を照すは悪を離れた相、影を浮べるは衆生利益の相じや、「大空はくまなく晴れて塵の世を心のまゝに照す月影」天邊の明月も亦た佛様の仕事を致して居るではありませんか、東海に鑿へて居る富士山は芙蓉の水を出たる如く八面玲

瓏の姿を露はして居る、如何なる風にも動かされず如何なる雲にも侵されぬ、千古萬古幾多の旅人を樂ましめ幾多の文人墨客を喜ばして居る、八面玲瓏の姿は善の行はれたので、風にも雲にも侵されぬは悪を離れた徳、幾多の人を樂しましめるが衆生利益の妙用じや、富士山も亦た純然たる佛様ではありませんか、春來れば百花爛熳、秋來れば萬山紅葉、谷の戸出づる鶯は法華經の妙理を山木に轉り、深雪の松は不變真如の妙相を常盤の色に傳ふ、天地法界盡く孝順心慈悲心の御姿ならぬは無い、玉を綴れる梅が枝の花には露程も三毒の煩惱は無い、琴を調ぶる溪川の流には泡滴程も人我の執見は無ひ、自然の働天眞の佛事じや、之を無爲無作の功德と申すのである、然るに我等も互は少し計りの善を行ふても、ハヤ名譽と云ふ様な野心が起る、聊かの利益を與へても直ぐ報酬と云ふ様な望が出る、夫故作す事爲る事が有爲有作て皆な煩惱の垢を帯びて居る、情けないことでは無いか、御月様や富士山や、鶯や松の木に對しても耻かしいことではありませんか、

して見ますれば我等も互は唯々佛法値遇の因縁を喜んで、受戒入位と云へる最勝無上

の法門に於て萬劫不磨の大安心を決定なさるゝが、一大事でございます。

此の戒に因り依れば、諸の禪定及び滅苦の智慧を生ずることを得、

父母と師僧と三寶とに孝順すべし、孝順は至道の法なり、孝を名けて戒と爲し、亦は制止と名く、

四天東地佛祖相傳しきたれるところ、かならず入法の最初に受戒あり、戒をうけざば、いまだ諸佛の弟子にあらず、祖師の兒孫にあらざるなり、離過防非を參禪問道とせるが故なり、戒律爲先の旨、すてにまさしく

正法眼藏なり、成佛作祖かならず正法眼藏を傳持するによりて、正法眼藏を正傳する祖師、かならず佛戒を受持するなり、

戒は是れ防非止惡、坐禪は舉體無二を觀ず、萬事を抛下し諸縁を休息し、佛法世法皆せず道情世情雙へ忘じて、是非も無く善惡も無し何の防止か之れ有らん、此は是れ心地無相の戒なり、

世のなかには皆な佛なりおしなべて何れのものともわくぞはかなき

難波江やさながら濁る水にだに蘆間をわけてやどる月かげ

(佛遺教經)
(梵網經)
(承陽大師)
(般若證)
(花山院)
(古歌)

五 發願利生

第一 席

是れより修證義の四大原則の第三に當る發願利生の一則を演べる考てあります、前席で委しく申し上げた通り、佛祖正傳の御戒法を御相續した時に我等の本より具へて居る所の佛性の御光り即ち本證がソツクリ現はれて、此身此儘三世諸佛の御仲間入が出来るので、丁度赤ン坊が生るゝと直ぐ人間一人前の戸籍帳に載つてソレから人間の道を學び人間の仕事を致す様に、我等も互も既に佛様の戸籍帳に載つた身の上ばかり、これより後は佛様の御心を働かして佛様の仕事を致さねばならぬ、之を妙修と申すのであります、佛様の御心と云ふのは孝順心と慈悲心との外には無い、御戒法の上で云へば惡を止め善を行なひ衆生を濟度すると云ふ三聚淨戒である、今又發願利生と云ふのも大誓願を發して衆生を利益すること、取りも直さず慈悲心の現はれて、三聚淨戒の中では攝衆生戒の修行になる、次の行持報恩は日々の行持即ち勤め向を以て御

恩を報ずるのであるから、ソレは孝順心の方で三聚淨戒の中では攝律儀戒と攝善法戒の二つに當る、併し是れも一應の割り當であるから全體から見れば發願利生も行持報恩も皆な孝順心と慈悲心の働きて、三聚淨戒十重禁戒の實行された姿と云ふことになるのであります、修證義の第四章發願利生の初めの十八節には「菩提心を發すといふは己れ未だ度らざる前に一切衆生を度さんと發願し營ひなり、設ひ在家にもあれ、設ひ出家にもあれ或は天上にもあれ或は人間にもあれ苦にありといふとも樂にありといふとも、早く自未得度先度他の心を發すべし」と發願の有様を御示し下されてある、此中菩提心とあるは菩提は梵語で道と譯してある、道とは佛の道を指すのであるから、菩提心とは佛の道の現はれた心と云ふ程の意味です、解り易く云へば佛の心と云ふことである、佛様の心とは大慈大悲のことであるから、母親が自身の艱難を厭はずに我が子を愛育する様に、自分と云ふものを先に立てずに人の爲め世の中の爲めにと思ふて慈悲心を運んで行くのが眞の菩提心である、此菩提心には男だの女だの老人だの小供だのと云ふ區別は入らぬ、誰でも彼でも大慈大悲の誓願の起つた者が即ち大菩薩で

あるから、十九節には「其形陋しといふとも此心を發せば已に一切衆生の導師なり、設ひ七歳の女流なりとも即ち四衆の導師なり衆生の慈父なり、男女を論ずること勿れ此れ佛道極妙の法則なり」と仰せ下されてあります、縦ひ如何程陋しい者であらうと愚か者であらうと誓願の心には變りはない、生々世々を盡して一切衆生を救はんと志せば一切衆生がソックリ我が誓願の領分内である、未來際を期して國家を利益し世界を救済せんと志せば國家も世界も盡く我が誓願の領分内である、釋尊の「今此三界は皆な是れ吾が有なり其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり」と仰せられたは此處です、此大誓願は決して教育や遺傳の力で造作たものではない、佛性常住の妙徳と申して我等の本來具へて居る心の作用じゃ、言ひ換れば即ち宇宙の大意志じゃ、此世界の成立の前此身の生れぬ前からチャンと具有して居るのです、教育の力や遺傳の力は其の大意志の發現する手續の一部に過ぎませぬじゃ、世間の倫理學上では善惡の標準を定むるに就て種々なる學説があつて、或は人間行爲の原因たる動機を本として論ずるもあり、或は人間の行爲が社會公衆に對して利益が有るか無いか、又は個

人に對して利益が有るか無いかと云ふを立脚點とする結果論者もあり、又た進んでは人間の目的以上に宇宙の目的なるものがある、我等は必然此宇宙の目的に服従せねばならぬと主張する宇宙主義もあり、又は國君の命令や政府の法律等を以て標準を定め様とする他律的國家主義もあり、或は宇宙は理性の發表したものである國家とか社界とか云ふは此理性の精神の進化したものである、故に個人の屬して居る團體に行渡つた一般精神こそ我等の精神の現はれた所であるから、之れに服従せねばならぬと云ふ自律的國家主義もあつて、千態萬狀であります、何れも一長一短で其の根本原理が確實で無い様に思はれる、人間の目的以外に宇宙の目的があると云ふ説の如きも其の宇宙の目的とは何ぞやと段々詮整して行けば矢張神とか天帝とか云ふ、漠然としたものを設けてお茶を濁すと云ふ鹽梅で、何れにしても我等一個人と社界國家と云ふ様な團體との上に幾分の隔が付くとか、人生と宇宙との間に多少の野界が付くとかして、どうも面白く無いです、我が佛の御教では宇宙萬象は本より一體平等にして宇宙萬象の其の儘が佛性常住の孝順心慈悲心の塊り物である、社界も國家も一家族も一箇人も盡

く平等にして差別は無い、草一本樹一本水一滴塵一介ても孝順心慈悲心の姿ならざるは無い、一個人の道徳も社界國家の道徳も同一の原理で一人の善行も萬人の善行も圓融して相離れぬ、自分の利益と他人の利益とは元來同なじ孝順心慈悲心の賜であつて自分と他人の間に劃然たる境を付ることは出来ぬ、丁度日月の萬物を照すが如く他を照すと同時に自身をも照して居る、又た水の物を潤ほす様に他を潤ほすと同時に自身も潤ふて居る、任運に起つて來る孝順心慈悲心の作用は求めずして自から他を利益し願はずして自から自身をも利益するじや、然るに凡夫の悲しさには動もすれば反對に他人に迷惑を掛けたり自身に損害を招いたりするのは何故であるかと云ふに、ソレは本來平等の中に於て故らに自分と他人との隔を付けて我即ち「オレガ」と云ふ塊物を拵へソレに執着するからである、貪欲も瞋恚も愚癡も其の他所有煩惱惡業は唯だ此「オレガ」と云ふ惡戲者の仕業ならぬは無い、釋尊は「一切衆生皆な如來の智慧徳相を具す唯だ妄想執着に依て而も證得せず」と御誡め下されてあるが、妄想執着と云ふのは即ち我のことです、此我を離れ妄想執着を脱しさえすれば自から宇宙の意志

に冥合して眞箇の菩提心即ち佛心を發しませるじや、之を己れを忘れ己れを捨てよと云ふのであります、承陽大師が「佛法をならふと云ふは自己をならふなり自己を己れならざる所なし」とあるも即ち此事であります、三世の諸佛十方の菩薩が己れを捨て、衆生濟度の誓を御發し遊ばされたのも決して特々拵いた御誓願と云ふては無い、ツマリ宇宙の意志に冥合して佛性常住の孝順心慈悲心が現はれた姿で之を菩提心と申すのであります、其の姿は何んな有様であるかと云ふに三聚淨戒十重禁戒が取りも直さず菩提心の状態です、此御姿こそ眞善美圓滿なる莊嚴の妙相で此御姿を味ますのが即ち惡心惡業とも煩惱妄想とも申すのである、瓔珞本業經に理に順じて心を起すを善と爲すとあるは此戒法に隨順すること、理に違ふて心を起すと惡と名くとあるは此戒法に背くこととあります、此戒法は宇宙の大意志、佛性常住の孝順心慈悲心の御姿であるが、善と惡との標準は此戒法を以て定むるのが萬古不變の大法であるとな確信せられたいものであります、

サア一度此菩提心が現はれますれば何處に行ても何事を致しても順境に居様と逆境に在らうと少しも此心の作用を妨ぐる物は無いです、悪人に向ふた時は益々悪を止め且つ悪人を導がんとの念を起し、善人に向ふた時は益々善を行ひ道を修するの志を長じ、苦を受けた時は忍辱精進の行を勵み樂に遇ふた時は禪定智慧の功を磨き、國に向ては國を愛し人に向ては人を愛し鳥獸に向ては鳥獸を憐れみ草木に向ては草木を憐れむと云ふ様に、萬事萬物に對して任運自然に孝順心慈悲心の働を現はす時は、萬法皆な菩提心を増上すべき因縁となり、氣に入らぬ事があればこそ其の御蔭で堪忍と云ふ美しき徳を養ふことも出来、無常の世の中であればこそ苦を離れて樂を得、迷を轉じて悟を開き業障を消滅して佛様の御仲間入りも出来るじや、コ、を承陽大師は發菩提心の卷に「もし一刹那この菩提心を起すより萬法みな増上縁となる、おほよそ發心得道みな刹那生滅するによるものなり、もし刹那生滅せずば前刹那の惡さるべからず、前刹那の惡いまださらされれば後刹那の善いま現生すべからず、この刹那の量は唯だ如來ひとりあきらかに知らせたまふ」と御示し遊ばされてある、箇様に

菩提心を應用して參りさえすれば苦も樂も善も惡も盡く道に進み徳を明らかにして三聚淨戒十重禁戒の御戒法の御光りを現はす所の因縁となります、故に第二十節には「若し菩提心を發して後六趣四生に輪轉すと雖も其輪轉の因縁皆菩提の行願となるなり」と仰せられたのであります、六趣と云ふは地獄餓鬼畜生修羅人間天上の六道、四生と云ふは生物の生れ方に胎生と卵生と濕生と化生との四通があるので四生と云ふのです、併し是れは未來の事とばかり思ふてはなりません、此世の中でも火の車に乗つて居る者もあれば劍の山を踏んで居る者もある、飢渴に苦しむ餓鬼道、横道を踏んだり弱肉強食の蠻狀を呈する畜生道、我慢競走の修羅道、仁義忠孝の人間界、十善安樂の天上界、社會の状態は此世からなる六道の巷である、此六道の巷を展廻つて居る我等の身の上が、若し菩提心が堅固なれば盡く菩提の行願を成就すべき好因縁となりまするじや、次に御文には「然れば從來の光陰は設ひ空しく過すといふとも今生の未だ過ぎざる際に急ぎて發願すべし」とありて、今の今迄は逆縁に逢ふては心を苦しめ困難に逢ふては世を恨み我が身を悲んで居つたであらうが、幸にも佛様の御蔭

に依りて菩提心の明らかめが付たならば一時も早く甚深廣大の誓願を發して、逆縁に逢ふたならば益々衆生利益の念を勵まし困難に逢ふたならば、彌々大慈大悲の心を運らし、一切時一切處に於て善根切徳の資を積み孝順心慈悲心の光明を輝かさんとの心懸を持たねばなりませぬ。

太閤秀吉公の寵臣たりし堀久太郎秀政は如何なる人をも棄てずに盡く採用して其の能を見て善く使はれた人です。臣下の中に泣面の男があつた、楠公の泣男に是を掛けた程で始終涙を流し眉を皺めて一見ゾツとする様な陰氣な顔付てありました、ナンボ何んでも餘りに縁起の悪い顔貌ゆえ之を放たれよと諫むる人もあつたが、秀政は笑ひ乍ら、決して無用と思はるゝな葬式や法事の使者杯には無類の重資者よと云ふて生涯扶持を興へられたと云ふことじや、武田信玄の家來大藏左工門と云ふは大の臆病者で致方が無かつたが、信玄は使ひ道ありとて之を扶持せられ、信州戸石の合戦の時彼の臆病者を勝れたる逸物の馬の鞍籠にク、リ付大勢にて馬の尻を敲いて敵の陣中に追込だ、大藏はビツクリ驚天ブル〜ワナ〜震ひ上つて夢中になつて念佛ばかり唱へ

て居た、馬も其の臆病に呆れたと見へ直様元の陣處へ引返して來た、信玄はソレでも別段に叱りもせず今度は家中の隠目附を命じ、若し内證事を知りつゝ申上されは嚴科に處すべしと申渡された、大藏は大に恐れて馬鹿正直に何も敷も上申したので大そう役に立つたと云ふ話がある、此等は名君が人を棄てずに利用した御話でありますが、我等の菩提心とても亦た是の如くて、如何なる境遇に處しても何の様な悪人に出遇ふても決して之を恨みず之を憎まず、益々之を憐れみ之を愛すれば、悪人も善人に化し穢土も淨土と變じ苦痛困難も安寧幸福と爲るものです、承陽大師が「この發心よりのち大地を擧すればみな黄金となり大海をかけばたちまちに甘露となる」と仰せられ、太祖國師が「五道の輪轉自ら大乘の翻軸なり四生の受業まさは是れ自己の活計」と仰せられたるの正しく此消息を示されたものです、凡そ我等の身でも心でも天地でも萬物でも、其の人の觀念と境界とに依りて、苦ともなり樂ともなり惡業の因縁ともなり菩提の行願ともなるものです、「世の人のしやうじをはるもはなるゝも偏へに法のとさぐわいななり」じや、法の運用次第で生死とも涅槃ともなる、「波の音さかじが爲

めの山籠り苦は色かへる松風の音」とある歌の如く、波の音を邪魔にして山の中に入れ
 ば松風の音も亦た一つの邪魔に爲つて心を安んずることが出来ぬ、若し波の音を以て
 法の鼓とも聞く人ならば「波の鼓きこへぬ山の奥もなほ面白かりし松風の琴」て松風
 の聲も天の音楽にも勝る調のあるものです、實にや「炮烙と同じ浮世の人心氣を煎
 るもありはらざるもあり」じや、衆生は萬物に使はれ萬物に束縛されて自ら煩惱惡魔
 の世界と見る、菩薩は萬物を使ひ天地の間に逍遙自適して盡く菩提の因縁と觀する、
 苦樂も善惡も皆な我れに在りて存するのである、之を華嚴經には「譬へば衆の續像
 は畫師の作る所なるが如し是の如き一切の刹は心の畫師の成す所なり」とありて、我等
 の心が恰も畫師の様なもので三界六道十界三千も心の筆先」と一つの細工であります、
 故に心は瞋恚と邪淫とに相應すれば地獄の果報を招ぎ、心が慳貪なれば餓鬼の業と成
 り、心が愚癡なれば畜生の業と成り、心が我慢高貴なれば修羅の業と成る、心が五戒に
 相應すれば人間界を作、り十善に相應すれば天上界を作り、人空を悟れば聲聞、因縁の
 性空なりと證れば緣覺、六度を行ひば菩薩、平等大慈悲に住すれば佛と爲ると萬善同歸

集にも説てある、じやに依て心が菩提に相應すれば作す事爲る事が盡く菩提の行願
 と爲ることは自然の道理であります、佛様や菩薩方は發心の初めより唯々衆生利益を
 以て目的となされ、娑婆往來八千返の御艱難も佛様の方から云へばソレが最上の樂
 なのである、夫故修證義の次の御文には「設ひ佛と成るべき功德熟して圓滿すべしと
 いふとも尙ほ廻らして衆生の成佛得道に回向するなり、或は無量劫行ひて衆生を先に
 度して自らは終に佛に成らず但し衆生を度し衆生を利益するもあり」と仰せられたの
 てあります、彼の普原道眞公の御語に「世の人色欲を好めるやうに心のひまなく道を
 おもひ修しなば、その天徳の己れに入り來ること火のかはけるにつくが如し、色欲は
 求め得て反て己れをそこなひやぶる天徳は無量劫にも盡きず妙の妙なるもの也」とあ
 りますが、其の天徳とは即ち慈悲心孝順心のことです、即ち宇宙の意志に冥合したる菩
 提心であるから孝順とか慈悲とか言ふのも暫く人生の上に比較して假りに名けたもの
 で畢竟は妙の又た妙なるものであります、
 昔了菴門下の麒麟見と稱せられし大綱明宗禪師は初は淨土門の人であつた、相州酒

勾に於て盛んに説法して居られた時、有名なる慧春比丘尼が座に在つて説法の後に相見して、貴僧は聰明な御方じやが惜ひ哉自己の安心が出来て居らぬ願くは最乗寺の了菴禪師に参ぜられよと云ふて勸告された、ソコで明宗禪師は早速了菴禪師の處に至つて曹洞の宗旨を聞かれたがサツパリ解らぬ、或日海濱を通行の折大勢の小童が「向ふも見えねば此方も見えぬ聞くは磯打つ波ばかり」と詠ふのを聞て忽然として悟を開かれたと云ふことじや、彼も無く此も無く佛も無く凡夫も無い本來平等の大海に自から孝順心慈悲心の波濤が翻へると云ふ田地に至らねば、佛法の御利益は露はれませぬじや、又た後龜山天皇の皇子帥の宮様が出家なされて有名なる真阿上人と云ふ御方になられた、京都の誓願寺に居られた頃足利義教公が「口に唱へ卒屠婆に書きし彌陀は見ゆ書かず唱へぬ彌陀を教へよ」と云ふ歌を贈られた、筆にて書かれず口にも唱へられぬ佛様とは孝順心慈悲心のことじや、時に上人は「なにと吹く風とは更に知らねどもあはれもよふす秋の暮かな」と返歌せられました、天真にして妙なる宇宙の大意志は、火は熱し風は動揺水は潤ひ地は堅固、眼は色耳は音聲鼻は香舌は鹹酢、松は直く棘は

曲り鶴は長く鴨は短かしと露はれて居る、古歌に所謂「みる毎に皆なその儘の姿かな柳は緑花は紅」皆な盡く菩提心の姿じや、上人が或時義教公の處に赴かれ憐むべき囚人を御覽なされ之を赦免せられたしと請はれたが義教公には御聽入が無かつた、其の時上人は「慈悲の目に悪くしと思ふ者ぞなき答ある身こそなほあはれなれ」と云ふ歌を詠せられたれば義教公は大に感激せられて遂に其の囚人を赦されたと云ふことです、尤も斯く申せばとて佛の慈悲は決して良民も罪人もゴツチャマゼにするものではございませぬ、平等の中に差別ありて秩序整然寸毫も亂れませぬが、其の平等も差別も盡く菩提心の上より自然に現はるゝ妙用であつて、心の欲する所に従つて則を踰へぬと云ふが發願利生の妙功德であります、此發願利生の妙用に就ては修證義の中に四枚の般若と云ふ貴とい御教がありました、我等佛教信者殊に曹洞宗信者としては是非共心得置かねばならぬ太切の法門でありますから、席を改めてトツクリと御相談に及ぶことと致しませう。

第一一席

佛の御戒法を相續して佛様の御仲間入の出来た者は眞の佛弟子眞の菩薩である、其の菩薩の大誓願は唯だ衆生利益の一點張です、修證義の第二十一節には「衆生を利益すといふは四枚の般若あり一者布施二者愛語三者利行四者同事是れ即ち薩埵の行願なり」とありまして布施と愛語と利行と同事との四箇條が正しく菩薩の行願でありま

行に依て誓願を遂ぐるのであるから、行と願とは矢張車の兩輪の様に暫時も相離るゝことの出来ぬものでございます、其の四箇條の第一は布施であります、布施とは布はシク施はホドコシて廣く衆生に對して財と法とを恵み與ふることであり、慳貪無慈悲の心を離れて溢るゝ計の慈悲心起るのが布施の根本精神であるから「承陽大師は次の御文に「布施といふは貪らざるなり」と仰せ下された、これは優婆塞戒經に「無貪の心之を名けて施と爲す」とある佛の御語に依ての御示しです、飢渴に苦しむ者には飲食物を施し金錢に乏しき者には金錢を恵み衣服に窮する者には衣服を與ふるの類は財施であるし、道理を知らぬ者には道理を説き示し學文の無い者には學文を教へ佛法を心得ぬ者には佛法を聞かせるの類は法施である、財施は重に衆生の肉體に安樂を與へ法施は重に精神の缺目を補ふてやるのじや、萬一施すべき力が無かつたならば、ドウぞして施したいものじや救ひたいものじやと深く同情愛愍の念を起すが宜い、又他人の施を爲るのを見たならば恰も自身が布施の善根を爲した如くに、心の底から之を賛成して喜びの念を起さ

ねばならぬ、斯くする時は其の人は事實の上では施を致さんでも精神の上では既に施を爲て居るのじや、故に經には「若し貧窮の人あり財の布施すべき無きも他の施を修するを見し時、而かも隨喜の心を生ぜば隨喜の福報は施と等しふして異なること無し」隨喜の福は布施の功德と同等じやとの御教がある、此處を次の文には「我物に非れとも布施を障へざる道理あり」と仰せられたのであります、是れに就て最も心得べきことは次の「其物の輕さを嫌はず其功の實なるべきなり」とある御示してす、其の品物の輕重大小には拘はらぬ、施に依て生ずる結果が眞實の功德になるかどうかと云ふことを考へねばならぬ、蕩樂者に金を恵んだり胃病患者に食物を強いたり酒癖の悪い者に酒を振舞たりするの類は施が却て非常な怨となるじや、法苑珠林には道理の無い金銀や酒及び毒藥や殺生の道具や弓箭等の危險物や人の心を惑はす様な音樂や女色や、此等五つの物は施してはならぬと戒めてある、夫故功德の實なることを能く認めたとて眞心を以て之を施す時は、水一杯お茶一服でも一回の挨拶一席の演説でも廣大なる善根を成じまするじや、故に次の御示しには「然あれば則ち一句一偈の法を

も布施すべし此生他生の善種となる一錢一草の財をも布施すべし此世他世の善根を兆す」とありて、經文の一句一偈の法を授けても錢一文草一本の財を興へても、それが爲めに苦痛を助かり困難を凌ぎ永久の良縁を結びなば此世ばかりか來世迄も朽ちざる程の善根の種を殖え付くこととなりす、「法も財なるべし財も法なるべし」て、心が治まれば自から身も修まり身が立てば自から心も定まる譯じやに依て、法を施すのがヤガて財を興ふる様なもので財を施すのがヤガて法を施すこととなる、食物に飢え寒氣に凍へる者を助くるが如き一時の救済が正しく其の人の一生を扶ける譯合じや、心得違の者を教訓して改悟せしむれば一時の法施が其の人の一身を立つる基ともなりす、金を施すことが出来なくても金錢を作る方法を教へれば金を施したも同然てす、佛法を聞かせる力が無くとも相當の善知識の處に案内してやれば自分が聞かせたも同様の功德があるてす、財と法との二つは裏と表の様なものて決して別なものては無い、それから次に「但彼が報謝を貪らず自らが力を願つなり」と云ふ御文が別段太切であります、施を爲る時は其の布施と云へる善行を自ら喜んで、決して報謝と云ふて先方

の報酬や謝禮を宛にしてはならぬ、夫故布施のことを喜捨とも申します、喜とは布施を致した時ア、今日は御蔭を以て幸にも布施を行ふことが出来たと自ら其の行を喜ぶ心じや、捨とは物を捨てた時の様に少しも其の報を求めぬことである、優婆塞戒經には施しを爲ても高慢したり施しを受けた者を罵つたり施した物が倍にもなつて返るのを當にしたりする者は最勝の功德は得られぬぞとの御誡めがあります、唯々此方の力を願ち與へて布施の功德を成就するを、自分の仕事として樂む様でなければなりませんぬ、簡様な心懸を持ちさすれば「舟を置き橋を渡すも布施の檀度なり治生産業固より布施に非ざること無し」て、舟なき渡場は舟を置き橋なき河に橋を架けて通行の人に便宜を與ふるも廣大なる布施の行である、加之治生産業で自分の生活上の營業迄がソツクリ布施の功德と爲る、百姓が田畑を耕し乍らも、米なり麥なり大根なり午房なり、これがやがて父母の食物とも爲り妻子の養育品ともなり御上の御年貢とも爲り佛様や御先祖の供物とも爲るので、取りも直さず家の寶國の寶を作るのであると思ふて働けば、鋤を入るゝも田の草を取るもの皆な崇高なる布施波羅密である、商

人が物品を販賣するにも御客の爲めを計り家の爲め國の爲めを思ふて正直律義に勉強すれば商賣の其の儘が立派なる布施行である、檀度とあるは檀は梵語で布施のこと度はワタルと訓て波羅密の譯語で人を救ふと云ふことなのであるから檀度の二字で布施の行と云ふ程の意味であります、承陽大師は典座教訓の中で「漿水の一鉢も十號に供じて自から老婆生前の妙功德を得、菴羅の半果も也た一寺に捨して能く育王最後の大善根を萌す、記別を授かり大果を感ず、佛の縁と雖ども多慮は少實に如かず」と御示し下されてある、是れは釋尊が曾て阿難尊者を御連れになつて娑羅門城に入つて托鉢せられたことがある、娑羅門派の者は申し合せて、佛に供養することは成らぬと決めたので、釋尊は空つぼうの應量器を持って御返りになりました、其の時町端に住んで居た極貧乏な老婆が、如何にもして佛を供養し奉らんとの志切なれども供養すべき物が無い、少かに漿水と云ふて米の炊汁同様の物を瓦の器に盛て佛に供養したじや、釋尊は其の切なる志を嘉し玉ひて汝は此功德に依て十五劫の中三惡道に墮せず、後には辟支佛に成るべしとの記別を御授け遊ばされたと云ふ因縁が大論の中に出て居る、又

た阿育王が菴摩羅と云ふ菓物の果を半分丈鷄寺と申す御寺に供養した、大衆は其の志に感じて其の果を粉にして一ツマミ苑一同に分配して供養を受けたが、これを阿育王が最後の善根でありしと云ふ因縁が阿育王經に出て居ります、是れ即ち長者の萬燈貧の一燈です、故に眞實至誠の心慈愛の心で無ければ布施の功徳を成就するとは出来ませぬじや、

第二に愛語と云ふは第二十二節に「愛語といふは衆生を見るに先づ慈愛の心を發し願愛の言語を施すなり、慈念衆生猶如赤子の懐ひを貯へて言語するは愛語なり、徳あるは讃むべし徳なきは憐むべし怨敵を降伏し君子を和睦ならしむること愛語を根本とするなり、向ひて愛語を聞くは面を喜ばしめ心を樂しくす面はずして愛語を聞くは肝に銘じ魂に銘ず愛語能く廻天の力あることを學すべきなり」と委しく御示し下されてあります、愛語は慈愛の語で極柔かな極やさしい極親切なる語と云ふ程の意味です、衆生に對して慈愛の心が深くありさえすれば其の人の語は自から願愛と云ふて親切にやさしくなるものじや、衆生を慈念すること恰も母親が赤子を愛育する様な心持になれ

ば、返辭一ツ挨拶一ツの中にも無限の愛情が籠るものです、徳の有る人に向ては少しも嫉み妬みの心なく眞實心を以て之を讚めて益其の徳を勵ますが宜い、徳の無い人を見たからとて憎み恨みの心も無く怒り罵ることもせず中心からしてア、氣の毒なものじや何卒誠の徳を具へさせて上げたいものじやと思ふて、親切に諭すが宜い、箇様に致して行けば今迄は怨敵となつて居た者も自から悪心を離して此方に降伏し、昨日の敵も今日の味方と爲るものです、君子と云ふは此處では廣く世の中の人々を指した詞です、親子兄弟妻子眷屬は申すに及ばず世の中の多くの人々をも和睦させて、一家の和合は勿論一村一郡一國の平和を守るも皆な愛語の徳が根本である、人前でやさしい語を使ひば之を聞く人は自然と其の喜びが顔色にも露はれ心にも言ふに言はれぬ樂しみを生ずるものじや、蔭にて親切の語を使ひば猶更其の眞心を喜びて肝にも魂にも銘ずる程の感動を起すものです、愛語は實に廻天と云ふて天然に定まつた事柄をも引廻す程の力がある、當然怒るべき人をも怒め實際苦んで居る人をも樂ましめ悲しむ人をも喜ばしめ迷ふ人をも明らめしむる勢力のあるものです、之に反して亂暴な語無

慈悲な語虚偽の語無益の語杯は反對に真んで居る人に腹を立せたり中の宜い人を不
 中にしたり味方をも敵にしたり明らめて居る人をも迷はしたりするもので、其の害毒
 は實に恐るべきものであります、賢愚經には年少な坊さんが高德なる羅漢の渠水を飛
 び超へるのを見て、獼猴の様じやと云ふて嘲つた爲めに、五百世の間獼猴に生れたと云
 ふことが説てある、又た聲の悪い沙門に向つて狗の吠る様じやと云ふて笑つた爲めに
 狗に生れたと云ふ因縁も説てある、十善戒の中には妄語とてウソを言ふこと綺語とて
 タハコトを觸ふこと惡口とて惡る口を言ふこと兩舌とて二枚舌を使ひナカコトを言ふ
 ことを戒められてあるが、此等は皆な愛語の反對でありますから、愛語をさへ堅く守
 れば此等の過失は獨手に無くなるものです、世の中には面白半分の人に惡口を言ふた
 り人の失敗話を爲たり何でも無い事を口穢なく罵つたりする人のあるものじやが、能
 く慎んで貰ひたいものであります、承陽大師は示庫院文と云ふてお寺の森處の者に御
 示し下された中に、粥のことを御粥と申せよ齋のことを御齋と申せよ、米を扱はと云
 ふことを「よぬ白め參らせよ」と申せ、汗を煮よと云ふことを「御汁のものし參らせよ」

と申せ杯と御親切に教訓せられてあります、精神に敬いと親切とが無いと言語は自然
 疎暴になるものです、一事一物に敬いと親切が無ければ萬事萬物にも敬いと親切が無
 くなるじや、敬ひなく親切なき人がドウして高尚優美なる品性を養ふことが出来ませ
 うぞ、故に我等も互は朝な夕なに用心して此愛語の行を守りたいものであります、
 第三の利行は第二十三節に「利行といふは貴賤の衆生に於て利益の善巧を廻らすなり
 窮龍を見病雀を見しとき彼が報謝を求めず唯單に利行に催ふさるゝなり、愚人謂はく
 は利他を先とせば自らが利省かれぬべしと爾には非るなり利行は一法なり普ねく自他
 を利するなり」と仰せられてあります、利行とは利益ある行と云ふので貴い賤いに拘
 はらず所有衆生に對して利益ある行を爲すこととす、窮龍のことは晋書に在る因縁で
 ある、晋の世に名は孔愉字は敬康と云ふ人があつた、或日餘不亭と申す處に行きまし
 て圖らずも大な龜を擔ひて往く人を見た、能く聞けば殺して食ふ積りのこと、孔愉
 は不便に思ひ金を出して譲つて貰ひまして水に放して遣つた、龜はサモ嬉し相に左の
 方へ首を狂げて四度も振廻つて孔愉を見たと云ふことじや、其の後孔愉が餘不亭の知

事となつた時龜の紐を附けた印形を金で鑄さしたが、其の龜の首が左へ曲つて出來たに依て之を鑄直させること都合四度に及んだがドウしても首が左に曲つて出來る、ソレで先年龜を助けた時龜の振廻つて見た姿が丁度これに違ひ無い左すれば龜が其の時の恩を報ぜんとして我が身を護るならんとて、其の儘印形を用ゐたと云ふことでありませう、又た病雀のことは續齋譜記に在る因縁です、支那の揚寶と云ふ人が九歳の時華陰山と云ふ處で一羽の雀が鷓鴣と云ふ鳥に搏たれて、半死半生になり樹の下に倒れて多くの蟻に苦しめられて居るのを見て、小供心にも不便と思ひ家に連れ歸りまして百日餘りも箱に入れて養なつて居ると、段々傷も治り舊の通達者になつたので之を放して遣つた、すると其の夜黄色の衣裳を着た童子が揚寶の枕元に來つて、私は此間中長々御介抱を戴いた雀であります、貴君の大神は中々報ずることは出來ませぬが、これは聊か御恩報じの印でありますと云ふて白い玉の環を四つ渡して、貴君の御子孫が三公の位に登らるゝこと此環の數の如くならんと云ふて立去りました、後に至つて果して揚寶の子の揚震、揚震の子の揚秉、揚秉の子の揚賜、揚賜の子の揚彪と四代共三公

の位に登りましたじや、之に就て幾人が龜や雀杯が人間の運命を左右することが出来るものかと笑はれたが實に尤のことです、だが孔愉や揚寶の出世したのは敢て龜や雀の力とは言はぬが、其の人が斯かる仁者であつたればこそ立身も致したものであります、今は唯だ畜生に向ても自然に慈悲心の現はるゝこと、畜生にも尙ほ恩に感ずる性情あることを知らしむる爲めの御語であります、困窮した龜や病患ふた雀を見た時の如き、之を助けて遣て後から御恩返しをして貰はふ杯と云ふ心のあらう筈は無い、唯々衆生の苦しむ様を見てはジツトして居られぬと云ふ利行の心に催されて之を助けたのであります、是れ則ち佛性常住の孝順心慈悲心の活動である、然るに愚かなる人は他人計を利益することを先にしては、自分の利益は九々省かれて獨り貧乏をせねばならぬと謂ふであらうが決して左様な譯のものでは無いです、「オレガ」と云ふ私情私欲を打捨て、宇宙の大意志に冥合し菩提心に成り切つて仕舞へば自他平等に大利益を被むるのである、流車や電車の機關手が多くの人を載せて目的地に向つて進む様なもので、自分の行くのは目的では無いけれど、乗客の到着する時は自分も到着して居る

てはありませぬか、利行は一法なりじや、利行の大功德海には自他の隔ては少しも無い、自他法界平等利益我と大地の有情と同時に成道でございます。

第四の同事は第二十四節に「同事といふは不違なり自にも不違なり他にも不違なり譬へば人間の如來は人間に同ぜるが如し、佗をして自に同ぜしめて後に自をして他に同ぜしむる道理あるべし、自他は時に隨ふて無窮なり海の水を辭せざるは同事なり是故に能く水聚りて海となるなり」と御示し下されてあります、同事は事を同ふすると云ふ語じやが、解り易く申せば時代に相應し根機に相應し境遇に相應すると云ふ意味になる、夫故に不違なりと仰せられたてす、不違と云ふはタガハズと云ふので時世にも違はず根機にも違はず、又た自分の本領にも違はず自分の誓願にも違はず自分にも佗人にも相應することてす、言ひ換へれば自分の大誓願大安心と一切衆生との間を程よく調和するの作用である、譬へて見れば人間世界に出現して人間を濟度し玉ふ釋迦如來様は矢張人間と同じ様な生れ方長ち方を爲てござる様なものである、學者には學者相當、小供には小供相當、其の人と其の時と其の處とに隨つて千變萬化に菩提心を働

かせて衆生を利益せねばなりませぬ、例せば布施の如きも酒癖の悪い者が酒を貰ひに來た場合には、其の根機を見て徐ろに恕め諭して吞ませぬ様にするのが却て布施の精神に叶ふのである、愛語の如きも場合に依ては嚴格に叱り付けるのが寧ろ愛語の本意に適することもあります、此同事と云ふ作用が無ければ布施も愛語も利行も其の應用を誤つて何の役にも立たぬ様になります、釋尊の千百億化身觀音大士の三十三身地藏菩薩の四十八身等は皆な同事方便の神通光明であります、故に他人を導き誘ふて自分の大安心に歸入せしめ又た自分の大安心を運用して他人の上に活動を現はすことを正しく同事行の妙用である、自分じやの他人じやのと申すも其の時々の名前の附け方が變る丈で、畢竟は自他平等である、故に自分の功德も他人の功德も兩つ乍ら無窮で窮まり盡くると云ふことは無い、大海は固より百川を擇ばぬ利根川の水でも細溪川の水でも濁つた水でも清だ水でも決して擇り嫌いはせぬ、盡く引入れて而し、自分の方の水と同化させて了ふじや、四河海に入て復た本名なして、一度大海に流れ込めば大河の水も小河の水も清水も濁水も等しく一大海の味になつて仕舞ふ、是れが海の同事行

である、水は海に聚まり海は水を聚むる、水も海も畢竟一體平等で自他の區別は無い
 す、我等も亦た是の如く敵でも味方でも文明人でも野蠻人でも貴顯紳士でも車夫馬丁
 ても少しも擇り嫌いをせず、其の相手に相應した交際を爲し人を見て法を説き病に應
 じて藥を施す、是れが自をして他に同ぜしむるのである、それから次第に自分
 の大安心に引込て都盧一平等に受戒入位即心是佛の樂みを受けしむるのが他をして自
 に同ぜしむるのである、今日の時世に處して佛教の眞理を全世界に流布せんと欲する
 者は、殊に此同事の妙行を圓轉自在ならしめねばなりません、
 右の四箇條は菩提心を運用する上の方法でありますから、前の十六條戒を衆生濟度の
 上に應用するには無論此四箇條を離るゝことは出来ぬ、十六條戒の一々に四枚の般若
 ありとすれば六十四枚の般若が現はれて來ねばならぬ、此事は能々念に念を入れて心
 得置かねばなりません、故に第二十五節には「大凡菩提心の行願には是の如くの
 道理靜かに思惟すべし卒爾にすること勿れ」と仰せ下されてある、次の御文に「濟度
 攝受に一切衆生皆化を被むらん功德は禮拜恭敬すべし」と云ふが實に有り難き御示し

である、我等も互が一度此菩提心を發して未來際を期して一切の衆生を濟度し、一衆
 生たりとも餘さず漏さず盡く攝受と引受て利益せんとの大誓願を立て、發菩提心の
 卷に「おほよそ菩提心は、いかゞして一切衆生をして菩提心をおこさしめ佛道に引導
 せましとひまなく三業にいとまひなり」とある様に、身にも口にも意にも衆生濟度の仕
 事をのみ營み、寢ても寐ても之を忘るゝことがなければ、其の大誓願の功德こそ實に
 甚深廣大であるに依て、一切衆生は知らず識らず其の潤を被むるのである、我等も互は
 斯かる貴と大誓願を發したる其大誓願を自ら疎略にしては成りませぬ、己れを忘れ
 私を捨て、佛様の御心の通りになつたならば此身も此心も最早や自分一箇の物では
 無い、國の寶世の寶じや、一切衆生の大導師宇宙の大光明である、天上天下唯我獨尊
 とは此事です、故に自分が自分の誓願を禮拜し自身が自身の菩提心を恭敬して、此大
 誓願を傷つけぬ様此菩提心を汚さぬ様に致さねばなりません、
 我 天皇 皇后兩陛下が國民を赤子の如く思召るゝ御慈慮の深くましますことは申し
 上げる迄も無きこと乍ら、多くの國民が拜承して居る「冬ふかみねやの食を重ねても

思ふは民の夜寒なげり」と云へる 天皇陛下の御製「綾錦とりかさねても思ふがな
寒さおほはん袖も無き身を」と云へる 皇后陛下の御製の如きは、實に有り難くも亦
た恐れ多きことではありませんか、御身は九重雲深き宮中に在しても其の大御心は業
に既に賤が伏屋の隅々に迄も行き渡りて、如何なる匹夫匹婦なりとも此罔極の天恩を
被むらぬ者はありますまい、明治二十三年の新年の社頭祈世の御題に「とこしへに民
やすかれといのるなる我が世を守れ伊勢の大神」と御詠じ遊ばされたる、天皇陛下の
御製を拜し奉れば、現扶桑國の民草は申すに及ばす未來萬億年の後の國民迄も此御恩
澤に浴し奉らぬものはありますまい、又た古今人臣の上から見ましても楠公父子が國
家の爲めに心血を絞つて忠義を勵みたる七生報國の大誓願は、獨り湊川社頭に其の英
靈を留むるのみならず、今尙ほ日本國民の腦裡に輝き渡つて居る、征露の軍に従ひし
我が忠勇なる幾十萬の將卒が奮然陣に臨んだ時は名譽も無く利益も無く迷も無く悟も
無く唯だ忠君愛國の至誠ばかりじや、此忠君愛國てふ大菩提心のみの時は其の大菩提
心は日本全國を蓋へて、國民は一人として此恩分を被らぬものは無くてす、我等も互も

幸に受戒入位と云へる 大安心の牀に坐し大菩提心の光を放ち衆生利益の行願を身口
意三業の上に現はす時は、其の大慈悲心は三世の諸佛十方恒沙の菩薩と一體無差別と
爲り、自己の大誓願中に一切衆生を攝し盡して居るのであります、これが發願利生
の神通妙用でございます。

悲心を以て一人に施す功德の大なること地の如し、己れの爲めに一切を施す報を得ること芥子の如し、
一の厄難の人を救ふは餘の一切に施すに勝る、衆星光りありといへども一月の明らかなるには如かず、
(大丈夫論)

むかしより天帝きたりて行者の志氣を試験し、あるひは寛波旬きたりて行者の修進をさまたぐることもあり、
これみな名利の志氣はなれざるとき、この事ありき大慈大悲のふかく、廣度衆生の願の老大なるには、これ
らの障礙あらざるなり、 (承陽大師)
真人をほゆる犬ありと知るべし、ほゆる犬をわづらふことなけれ、うらむることなけれ、引導の發願すべし、
如是畜生發菩提心と施設すべし、 (全上)
佛道を願ふものは恒時に願ふべし、百劫千劫を限るべからず、三世の諸佛長劫修行して猶ほ未だ休せず、處
空縦ひ盡くるあるも佛行は退轉なし、 (弘徳圓明國師)

六行持報恩

第一席

これから修證義の四大原則の最後の行持報恩の一則を御話し致します、前席に於て申し上げた通り佛の御仕事菩薩の行願と云ふも、つまり佛性常住の孝順心慈悲心の現はれたので之を妙修と云ふのです、其の内慈悲心の作用が發願利生で孝順心の作用が只今の行持報恩であります、尤も上を敬ふのが孝順、下を憐れむのが慈悲であるから、唯だ一片至誠の心が其相手次第に両面に現はれるので畢竟一菩提心の妙用です、先づ行持と云ふは行は「オコナイ」持は「タモツ」と訓ひ、「オコナイ」とは我等が身と口と意とに働を現はすこと、「タモツ」とは住持三寶の中の持の意で、一定の正しき道を守り持つことじや、行があつても持つ所の道が無ければ其の行は煩惱惡業の垢となり、道を持ても行が無ければ資の持ち腐りと爲る、夫故正しき道を持って晝夜無間斷に身口意の三業を働かして其の道を行ふのが行持であります、報恩とは恩を報ずるといふこと

とです、凡そ我等の此世に生るゝや赤體にして寸絲を掛けず空手にして一粒を握らずで、糸一筋米一粒だも持ては來ぬ赤裸裸で生れ空手で來たのじや、それが飢へもせず凍へもせず、次第に生長して一人前の人と爲たのは盡く他の恩分に依るのである、我等の一身は申すに及ばず衣服財産家屋田宅も皆な御恩の賜である、して見れば此御恩に報ずるは正しく人間の人間たる道であつて人の禽獸に異なるは唯だ之れあるが爲めです、故に大論には「恩を知るは大悲の本、善業を開くの初門、人の愛敬する所、名譽遠く聞え死して天に生ずることを得、終に佛道を成す、恩を知らざる者は畜生より甚だし」と云ふてあります、心地觀經には四恩と云ふて四通りの恩を説き示されてある、一には國王の御恩即ち天皇陛下の御恩です、此中には皇祖 皇宗の御恩も含まれてあります二には父母の御恩此中には先祖代々の御恩も含まれてある、三には衆生恩と云ふて一切衆生は皆な我が恩人じや、元來人は社会的動物とか申して決して一本立の出來ぬものです、多數の人が集つて一の社會を組織し相依り相扶けて始めて生存することが出来る、一枚の着物でも一椀の御飯でも決して五人や十人の力では得られぬ、幾百千人の

手が掛らぬけ着ることも食ることもならぬものです、米屋も薪屋も呉服屋も仕立屋も大工も左官も思人ならぬは無い、金があるから田地があるからと云ふて、人の世話にはならぬ人の厄介にはならぬ杯と威張るは大間違です、故に我等は社會に對し一般人類に對し博愛的觀念を以て其の恩に報ずるは、必然の義務であります、殊に佛の御教に依りますれば人間計りては無く三界六道の衆生も皆な我が思人であります、幾度か生じ幾度か死する間に於て或は人間と爲り或は畜生と爲り親と爲り子と爲り夫と爲り妻と爲り因縁纏綿して相離るゝことは無いです、そこで梵網戒經には「一切の男子は是れ我が父なり一切の女人は是れ我が母なり我れ生々之れに従て生を受けざるは無し、故に六道の衆生は皆な是れ我が父母なり」と御示し下されてある、爐邊に眠れる猫、庭面に鳴く鶏、厩に繋げる馬、軒場に戯むれる犬迄も我が前世の親兄弟でありしやも知れぬ、コ、を承陽大師は「六の道遠近迷ふともがらは我が父ぞかし我が母ぞかし」と御詠じ遊ばされた、行基菩薩も「山鳥のほろく」と鳴く聲きけば父ぞかと思ひ母かと思ふ」と詠じてある、して見れば鳥畜類に至る迄も相當の恩恵を施すことを忘れ

てはなりませぬ、四には三寶の御恩です、佛恩の廣大なることは今更言ふ迄も無いが佛ありと雖も法なくんば佛道に入ること出来ぬ、法ありと雖も僧なくんば法を顯はすことが出来ぬ、僧は法に依て生じ法は佛に依て出づ、佛の御慈悲は我等も互をして即座に佛位に證入し當處に罪障を消滅して、永久不滅の大安心を得せしめ三界生死の苦を離れしめ玉ふ、其の御恩の深大無邊なることは生を易へ身を易へても報謝し盡すことが出来ぬ程である、斯る大恩に報し奉るには尋常一様の事では到底報じられぬ唯だ日々の正しき行持こそ眞實の報恩になるぞと云ふので行持報恩と申したのであります、併し此行持報恩とても亦た菩提心の働でありますから、修證義の第二十六節には「此發菩提心多くは南閻浮の人身に發心すべきなり今是の如くの因縁あり願生此娑婆國土し來れり見釋迦牟尼佛を喜ばざらんや」と仰せられたのである、即ち此菩提心なるものが國王父母三寶等に對しては孝順報恩の念と爲り、一切衆生に向ては慈悲利生の念となるのです、南閻浮とは佛教の世界説では須彌山と云ふ山を以て世界の中心とし其の山の南に當る閻浮提と云ふ國が、我等の住んで居る此世界であるから、南閻浮の

人身と仰せられたのじや、

二四

即ち堪忍世界と云ふことです。此世界は生れてから死ぬる迄寒暑をも忍び飢渴をも凌ぎ私欲を制し妄念を耐へる等、凡て堪忍の力に依て人の人たる道を全ふして居るのであるから娑婆と名けたものです。此世界には苦みもあり悲みもあり罪もあり垢もあるが、其の苦みや悲みや罪や垢が却て我等を菩提に導き我等をして諸善萬徳を積しむるの因縁となるじや、順境に臨ては私情を制し逆境に臨ては忿怒を忍び艱難に逢ては増々精進し障礙に逢ては彌々禪定の躰を堅め、理に對しては智慧を磨き貧窮下賤に對しては布施を行ふと云ふ様な鹽梅に、我れ知らず六度の行願を全ふして菩提の道を莊嚴することが出来る、一つらさをも憂さをも忍ぶ心こそ心の道の誠なりけり」じや、故に三世の諸佛諸菩薩は多くは此世界に於て發心遊ばされて居る、若し此世界が餘りに樂であつたり安心であつたりしたならば、樂に執着し安心に油断して眞の道を行ふことがならぬ、幸にして我等は此娑婆國土に生れ殊に釋迦牟尼佛を拜み奉りて其の御教に預るとは、正しく眞の菩提心を發すへる時節が到來したものと云はねばならぬ、喜び

の上の喜び、幸の上の幸ではありませんか、そこで第二十七節には「靜かに憶ふべし正法世に流布せざらん時は身命を正法の爲めに抛捨せんことを願とも値ふべからず正法に逢ふ今日の吾等を願ふべし」と御示し下されてある、假令如何程結好なる人間の身を受けましても若し佛の正法が世の中に流布て居らなんだなら、よしや法の爲めには身も命も惜まぬと云ふ程の志があろうとも、諺に言ふ無袖は振られぬて如何共することが出来る、雪山童子は半偈を聞かんが爲めに命を捨て、鬼に施し、支那の二祖大師は雪夜に臂を斷て達磨に參ぜられた、常啼菩薩は法勇菩薩に就て法を聞かれた時骨を敲て筆と爲し血を絞て墨と爲して御經を書かれたことが大般若經の常啼菩薩品に出て居る、釋尊が因地に於て燃燈佛を供養せられた時髮の毛を斬て道路の泥の掩はれたと云ふことが大寶積經に出て居る、涅槃經には六難とて、人間の身を受くること、難い、人間に生れても中國と云ふて文明の御國に生るゝことが難い、中國に生れても六根具足することが難い、六根具足しても佛に逢ひ奉ることが難い、佛に逢ひ奉りても法を聞くことが難い、法を聞ても菩提心を發することが難いと説てある、然るに我等

お互は萬物の靈長たる人間の身を受けたるのみならず、大日本帝國と云ふ大乘佛教相應の御國殊に明治聖代の御代に生れ合せ、皇の上で安々佛の御法を聽聞し奉り此の身此儘菩提心の光を放つ境界になつたと云ふは、實にや盲龜の浮木優曇華の花咲くよりも喜ばしき身の上でありまするじや、夫故次の御文には「見ずや佛の言まはく無上菩提を演説する師に値はんには、種姓を觀すること莫れ容顏を見ること莫れ非を緣ふこと莫れ行を考ふること莫れ、但般若を尊重するが故に日々三時に禮拜し恭敬して更に患惱の心を生ぜしむること莫かれ」とありまして、若し佛の正法を説き聞かして下さる人に遇ふた時は、よしんば其の人の身分が賤しかろうと平生の身持が好くなかろうと容貌が御疎末であらうと、そんなことには少しも貪着せず、唯々般若と云ふて佛様のお悟を尊び重んじ一心不亂に其の人の説く所の御法を聽聞して禮拜恭敬し奉り、更に厭じやとか怠屈じやとか云ふ心を起すなよとの御誡めてす、我等は兎角に人を取て法を取らず形を採て心を採らず、表面を貴んで裏面を等閑にし位を重んじて徳を輕んずる風があつてならぬ、これは非常に損なことです、缺點を拾つた日には天下の中殆

と一人も師と爲すべき人は無い位のものです、若し其の善き所を擇ぶ様にすれば見る物聞く物が盡く我が善知識となるものである、孔子も論語述而の篇に「三人行けば必ず我が師あり其の善き者を擇んで之れに従ふ」と云ひ、里仁の篇には「賢を見ては齊しからんことを思ひ不賢を見ては内に自ら省る」と云ふてある、又た無量壽經には「當に熟々思ひ計りて衆の惡を遠離し其の善き者を擇び勤めて之を行ふべし」と示されてあります、歌に「よしあじき人を鏡に見る時は人こそ人の鏡なりけり」立向ふ人の姿は鏡なり己が心をうつしてや見ん」とあるも即ち此意を詠んだのです、藤原の成道は人が少しでも善事を行ふを見ると涙を流して感歎したと云ふことじや、此心得を以て人に接しますれば何事も皆な身を修め家を齊ひ國を治め天下を平らかにする御手本とならざるものは無いです、況てや我が佛の御教の如きは千佛萬祖方か我等衆生を濟度せんとの御誓願を以て、三祇百大劫の御難行娑婆往來八千返の御辛勞、功を積み徳を累ぬるも露計も我が身の爲めを圖り玉はず教を敷き法を施して衆生の爲めに慈悲の涙を洒ぎ玉はぬ日とても無い、或は悪人を以て正機ぞと仰せられ或は衆生に代て苦惱を

受けんと宣ふ、「難波江やさながら濁る水にだも蘆間を分けて宿る月影」にもまされる
 佛の御光と申さねばならぬ、こゝを第二十八節に至つて、「今の見佛聞法は佛祖面々の
 行持より來れる慈恩なり佛祖若し單傳せずば奈何にしてか今日に至らん、一句の恩尙
 ほ報謝すべし一法の恩尙ほ報謝すべし況や正法眼藏無上大法の大恩これを報謝せざら
 んや、病雀尙ほ恩を忘れず三府の環よく報謝あり窮龜尙ほ恩を忘れず餘不の印よく
 報謝あり、畜類なほ恩を報ず人類争てか恩を知らざらん」と御示し遊ばされたのであ
 ります、心地觀經にも「恩を知り恩を報ずるは是れ聖道なり」とありて、御恩の有り
 難いことを知りて其の御恩に報ゆるは取りも直さず諸佛大聖の道じや、一句の經、一
 席の法も能く未來永劫の福田となる、況てや正法眼藏と云ふ三世諸佛の御本懷たる受
 戒入位の大法を相傳し奉りて即坐に成佛得道の大安心を決定することの出來ると云ふ
 は何んと廣大なる御恩徳ではありませんか、發願利生の處で御話に及びました通り、
 彼の揚寶が病み煩ふて居る雀を助けて遣りしに四の玉環を御禮として持ち來り、貴君
 の御子孫が三公の位に登らるゝことは此環の數の如くならんと申したが、後に至つて

果して其の言の通りであつた、又た晋の孔愉が命の危い龜を救ふて遣りしに他日餘不
 亭の知事となりし時、其の印形の上に龜の形を現はして御恩報謝の志を示した、箇
 様に畜生ですら恩を報ずるては無いか、苟も萬物の靈長たる人間として御恩を忘れる
 様では申譯の無いことであるぞとの返すくの御教訓じや、こゝでは佛様の御恩を主
 として御示し遊ばされまして、國王と父母と衆生との三の御恩を報ずることは行持の
 方に備さに具はつて居るのでありますから、ツマリ四恩齊しく報ずるの御教になるの
 でござります。

九州の某師團附の騎兵上等兵吉井政男と云へる人は先年入營の際乗用として齊光號と
 名くる馬を御下げになりました、氏は非常に親切な人であつて常に其の馬を愛するこ
 と骨肉の如くてあつた走ります、明治三十七年二月日露開戦と云ふことになりましたの
 て氏も現役として従軍し、彼の齊光號に跨りて各處に轉戰致しました、十月十五日有
 名なる沙河の大會戰の折氏は軍旗保護の任務を帯びて師團長の傍に在りましたが、午
 後二時頃敵より打出したる一發の彈丸九氏の頭上にて破裂した、氏はアツと云ふ聲も

ろともに馬より真逆まに落ちて、ソレナリケリに壯烈なる最後を遂げたじや、彼の馬は鐵砲の響に驚きしが奮然跳り上り約半町餘りも砲烟の中を割て敵前に駆け行さしました。背には我が太切なる主人の在らざるを悟りしものと見へ、狂氣の如くに取返し舊の處に來て見れば、主人は既に哀れを死體に留めて横つて居る、馬は直ちに進み寄り氏の軍服を匿へて頻りに起さんと努めたるも、主人は最早蟬脱の液、馬は悲しき聲を揚げ猶も死骸を揺振て殺の如き彈丸の中に立て斬て居る様は餘所の見る目も哀れであつたと申すことです、軍旗の下に在りたる一兵卒は見るに見兼ねて駆け來り氏の肩を收容して手厚く後方の村落に葬りました、處が彼の馬は其の日より氏の墓の傍に立て離れず糧も食まず水も飲まざること六晝夜、只泣に泣通して居つた走じやが、次第に肉も落ち氣力も衰ひ丁度氏の戦死の一七日目の夕方、氏の墓前に斃死を致しました、之を見聞する者一人として哀を催さぬは無かつたと申すことじや、身は畜生たりと雖も主人を慕ふの切なる人間も及ばぬ程であるから、其の馬の死骸を氏の墓の傍に埋めまして、或將校が筆を執て「嗚呼忠勇なる齊光號」と記せる墓標を建て、遺はされた

と云ふ、最とも哀れな御話がございます。

昔から禽獸が主人の恩を忘れずして種々の美談を後世に傳へたのは澤山あります、然るに身人間と生れ乍ら親に背き主に逆らひ恩を怨にする者が世の中に少なからぬと云ふは悲みても尙ほ餘りあることでございます、我が國は建國の始より忠孝の二道を以て道徳の大本としてある、忠孝は即ち君と親とに對する報恩の行持であります、神武天皇が中國の賊を御征伐の時「朕は日の神の後胤なり日に向て戦ふは不祥なり」と宣ふて太陽を背にして賊を平らげ玉ふた、大和橿原の宮に御即位遊ばされて御殿を御造營の砌の詔勅に「上は乾靈の國を授くるの徳に答へ下は皇孫の正を養ひ玉ふの心を弘め、然る後六合を兼ねて以て都を開き八紘を掩ふて宇を爲さんこと亦た可ならずや」と宣ひ、又た天下に詔して「我が皇祖の靈は天より降り照して朕が躬を助け給へり今諸の虜ども已に平ぎて海内穩になりつれば天神を郊祀して大孝を伸ぶべし」と仰せられ、鳥見の山中に靈の時を立て、皇祖をお祭りになつて仁政を敷き玉ふたのである、又た 今上天皇陛下の明治二十三年十月三十日の御勅語には「我臣民克く忠に克く孝

に億兆心を一にして世々厥の美を濟せるは此れ我が國體の精華にして教育の淵源亦實に此に存すと御諭し下されてある、是れ皆な報恩の行持であります、九重の宮中に於ける一ヶ年の最初の御儀禮は御祖先の御遙拜式じや、即ち一月の元旦、陛下は伊勢の宗廟を始め加茂等の天神、大三輪等の地祇、其の他山陵を御遙拜遊ばさるゝのが四方拜です、故に我が國は報恩を以て國體の基礎、政治の主胸として居るのであります、御勅語を四恩に當儀めて見ますれば、克く忠にと云ひ常に國憲を重じ國法に遵ひ一旦緩急あれば義勇公に奉ずとあるは國王の恩に報ずる方でありませす、父母に孝にとあるは父母の恩に報ずること、兄弟に友に夫婦相和し朋友相信し博愛兼に及ぼし進て公益を廣め世務を開きとあるは衆生恩に報ずることになります、恭儉己を持しと云ひ學を修め業を習ひ以て智能を啓發し徳器を成就しとあるは皆な行持に屬しまするじや、だが行持と報恩とは一つことになるのであるから行持がやがて報恩であります、又た報恩の内でも互に圓融互換して居るので、國王の恩に報ずるのがやがて孝とも爲り公徳とも爲り親に孝行するのがやがて忠とも爲り慈悲とも爲るので、所謂忠孝一體萬行

一心であります、心地觀經には「世間の凡夫慧眼なく恩處に迷ひ妙果を失す五濁世諸の衆生深恩を悟らずして恒に恩に背く、我れ爲めに四恩を開示し人をして正見菩提道に入らしむ」と御示し下されて、恩を知り恩を報ずるは常に人倫道德の一大事たるのみならず、佛果菩提に進むべき正しき道であります、況てや孝經にも「親を愛する者は敢て人を惡まず親を敬する者は敢て人を慢らず」と云ふてある通り、恩人を愛する人は必ず他人に向ても親切なものです、恩人を敬ぶ程の人は決して他人をも輕蔑はせぬものです、故に恩を報ずるの志ある者でなければ衆生利益の大誓願を發すことは出来ぬ、衆生利益の慈悲心に富める人は自から報恩の行持を全ふすることの出来るものです、發願利生も行持報恩も一菩提心の妙用なることは、之を以て能く御合點下されたいものであります、

第二席

御恩を報ずるは實に人道の一大事なることを前席に於て粗御話に及びましたが、其の